



樋ノ口遺跡
Cトレンチ
空堀断面状況
(北東から)



樋ノ口遺跡
第6トレンチ
竪穴住居跡検出状況
(東から)



樋ノ口遺跡
Tトレンチ
竪穴住居跡検出状況
(西から)

②^{いわくらだて}岩倉館跡

- | | | |
|---|-----------|----------------------|
| 1 | 遺跡所在地 | 本荘市川口字岩倉館1外 |
| 2 | 確認調査期間 | 平成14年11月14日～12月20日 |
| 3 | 確認調査対象面積 | 43,700m ² |
| 4 | 工事区域内遺跡面積 | 40,700m ² |
| 5 | 遺跡の立地と現状 | |

a 立地

岩倉館跡は、JR羽越本線羽後本荘駅から北東約2.1kmの地点に位置する。本館跡の南方向より子吉川が、北東方向からは芋川が流れ、本荘平野が一望できる標高約12～80mの丘陵に立地する。また、周辺の子吉川および芋川沿いには、縄文時代から古代にかけての遺物包含地と中世城館跡が点在する。

b 現状

山林および畑地である。

6 確認調査の方法

現地形および現地表面で城館跡を確認した。さらに地形を考慮してトレンチを設定し、重機及び人力で表土を掘削した後、遺構確認面を精査し遺構・遺物の有無を確認した。確認調査における試掘面積は480m²で対象面積の1.1%に相当する。調査の記録は、検出遺構と出土遺物の位置を示す平面図の作成と写真撮影によった。

7 確認調査の結果

a 層序

確認調査対象区、第1トレンチの層序は、以下の通りである。

第Ⅰ層 表土。層厚10～15cm。

第Ⅱ層 明黄褐色土 (2.5Y 7/6)。盛土整地層 (遺構確認面)。層厚0～50cm。

第Ⅲ層 暗褐色土 (10YR 3/4)。層厚10～20cm。

第Ⅳ層 黒色炭化物層。層厚0～20cm。

第Ⅴ層 にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)。盛土整地層 (遺構確認面)。層厚0～30cm。

第Ⅵ層 黄褐色土 (10YR 5/6)。地山。

盛土整地層が2層存在しており、地山面においても遺構が確認できる。遺構確認面は第1・2トレンチのある廓面には3時期、他の廓面には1ないし2時期認められる。

b 検出遺構と出土遺物

遺構は、尾根を平坦に造成した廓、廓と廓の間を仕切る空堀、廓下の斜面に削り出された腰廓、廓縁辺部に巡る土塁・段状遺構などが現地形で明確に確認された。腰廓と考えられる平坦面やその縁辺の土塁は、約20cmの厚さの炭化物層の上に地山土を盛って造成されていた。また、土塁の断面に柱穴があったことから塀などがあったと考えられる。炭化物層の下は基盤層となり、その面から地山土が密に詰まった柱穴を検出した。第16トレンチのある北側尾根には道路状遺構がある。また南側の尾根には頂部に沿う溝状の窪みがあり、道の可能性が高い。

遺物は、青磁、白磁、染付、珠洲系陶器、越前、瀬戸、美濃等の中世陶磁器が出土した。さらに炭化物層からは、陶磁器類の他に短刀や銭貨が出土した。北側では、古代の集落や中世の柱穴とそれら

第3章 調査の記録

に伴う土師器・陶磁器などの遺物を検出した。

8 所見

a 遺跡の種類

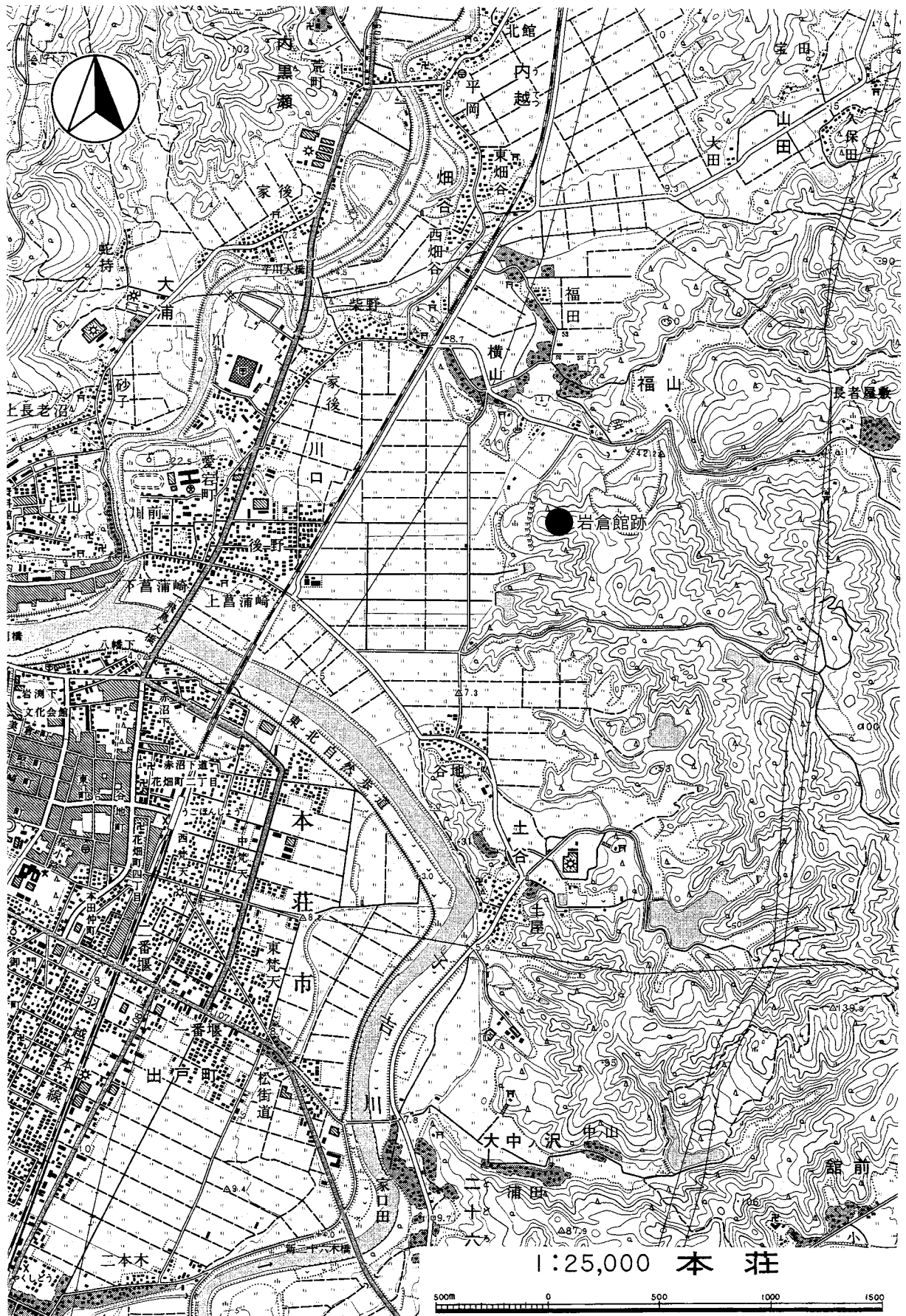
古代の集落跡と中世の城館跡である。

b 遺跡の範囲と工事区域

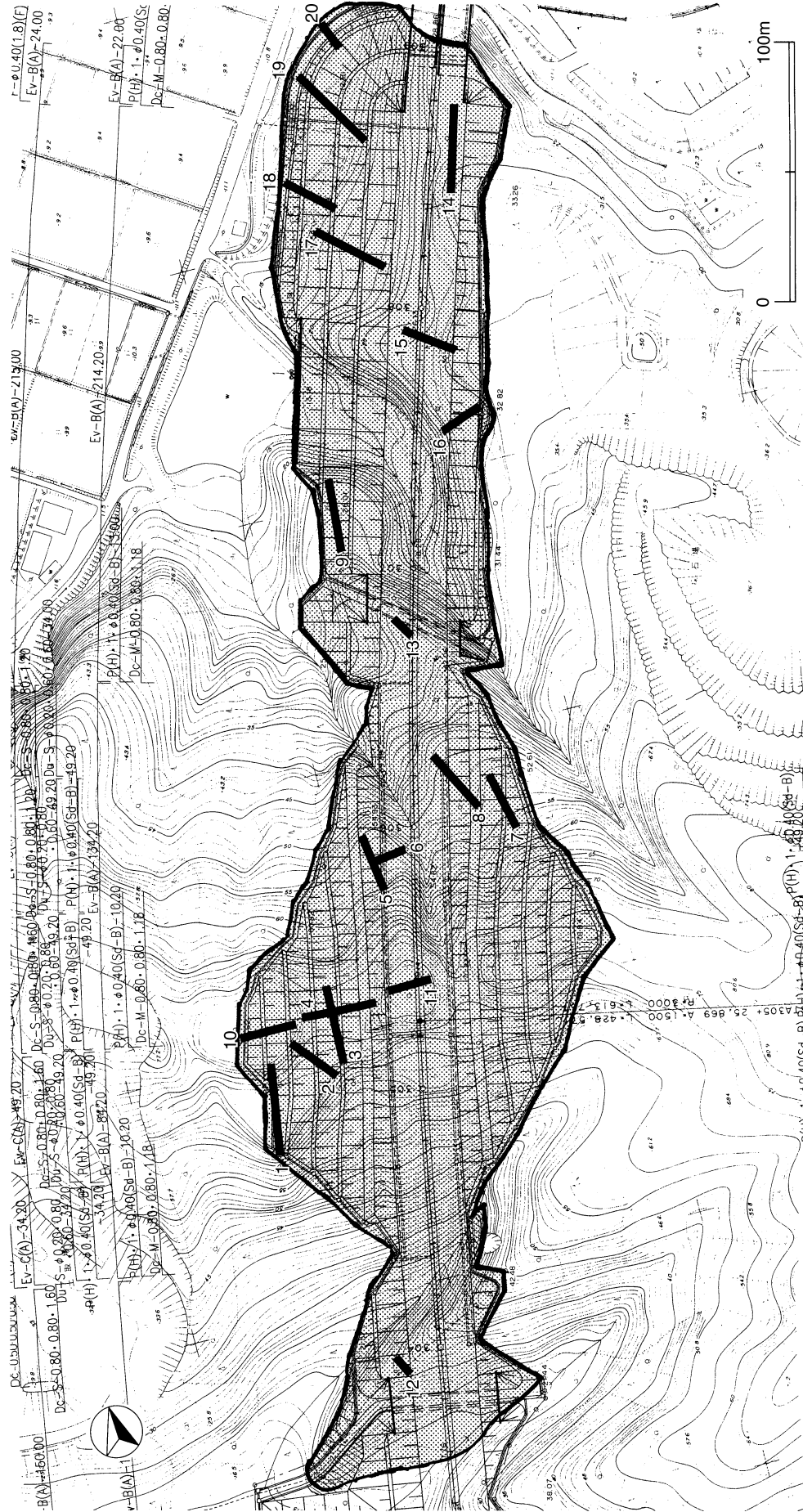
遺跡の範囲は、南側の沢部分および北側の一部を除く山林一帯と、より西の丘陵斜面にも広がると思われる。工事区域内遺跡の範囲は、確認調査対象区の山林部分40,700㎡である。

c 発掘調査時に予想される遺構・遺物

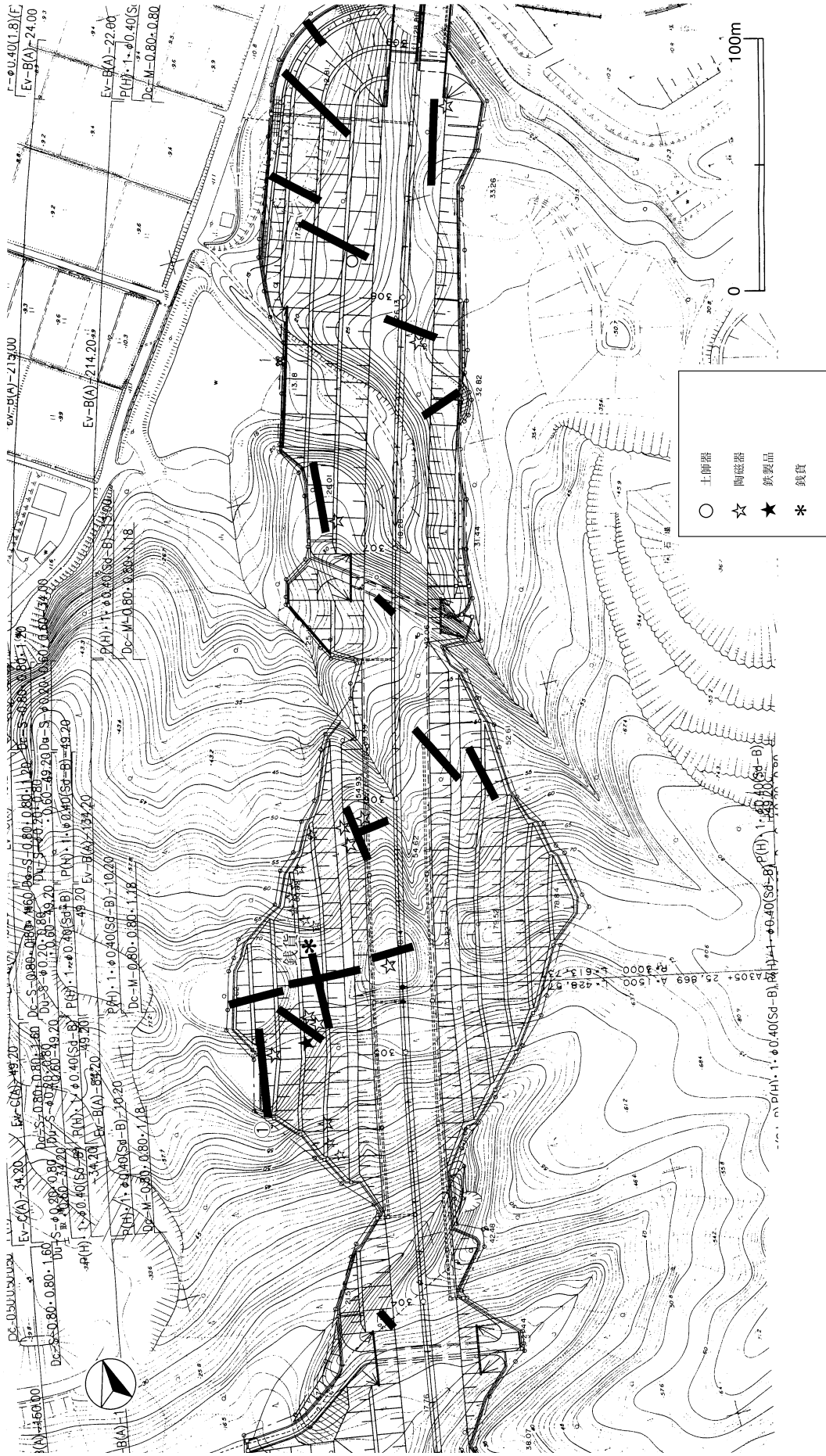
遺構は北側から古代の竪穴住居跡3～5軒程度、南側では中世の城館に伴う廓・空堀・土塁・土坑・段状遺構などが多数検出されると予想される。特に南側の城館跡に伴う遺構は、残存状況が良好であり、城館創始期から廃絶までの様相を把握できる可能性が高い。遺物は古代の須恵器・土師器、中世の陶磁器や鉄製品、銭貨などが出土すると考えられる。



第78図 岩倉館跡位置図



第79図 岩倉跡確認調査範囲とトレンチ位置図



第81図 岩倉館跡確認調査結果図 (遺物出土地点)



岩倉館跡
遠景（南から）



岩倉館跡
第1トレンチ
土層断面（北東から）



岩倉館跡
第2トレンチ南端部
土層断面（北西から）

つみさわやま
③堤沢山遺跡

- | | |
|-------------|---------------------|
| 1 遺跡所在地 | 本荘市川口字大学堤沢山5外 |
| 2 確認調査期間 | 平成14年11月27日～12月13日 |
| 3 確認調査対象面積 | 8,000m ² |
| 4 工事区域内遺跡面積 | 3,900m ² |
| 5 遺跡の立地と現況 | |

a 立地

遺跡は J R 羽後本荘駅から、北東2kmにあり県立大学の東0.3kmに位置する。遺跡が立地する丘陵は、東西方向に深く開析された侵食谷が発達している。遺跡はこの侵食谷開口部内側にある。遺跡の標高は11～47mで、調査の対象範囲は、東から西に流れる大きな沢とそれを挟む南北の尾根からなる。沢から尾根にかけては急斜面を呈している。遺跡周辺には、上谷地遺跡、新谷地遺跡、横山遺跡、岩倉館跡などの縄文時代、古代、中世の遺跡が分布している。

b 現況

調査区は山林で、木は伐採済みであるが大小の枝木が多く残っている。

6 確認調査の方法

調査区中央部の大きな沢と、それに流れ込む北側の2つの小さな沢を中心に幅1mのトレンチを設定し、遺構の存在が予想される部分についてはトレンチを拡張し、遺構の検出に努めた。実質調査面積は222m²で対象面積の2.8%にあたる。遺構としたものについては、性格を確認し、位置を記録した。なお、調査対象範囲としては、大きな沢を挟む南北二つの尾根部斜面も含まれるが、両斜面ともに非常に険しい急斜面であり遺構等は存在しないものと推定し、トレンチを設定しなかった。

7 確認調査の結果

a 層序

1 トレンチの層序は以下のとおりである。

- 第Ⅰ層 黒色土。層厚5cm。
- 第Ⅱ層 褐灰色土。層厚15cm。
- 第Ⅲ層 黒褐色土。層厚10cm。
- 第Ⅳ層 灰黄褐色土。層厚20～25cm。
- 第Ⅴ層 黒褐色土。排滓場を含む。層厚10～15cm。
- 第Ⅵ層 暗褐色土。層厚20cm。
- 第Ⅶ層 にぶい黄褐色土。遺構確認面で整地層の可能性はある。層厚20～40cm。
- 第Ⅷ層 黒褐色土。排滓場を含む。層厚15cm。
- 第Ⅸ層 にぶい黄褐色土。地山で遺構確認面の可能性はある。

第Ⅰ～Ⅷ層が鉄滓・炉壁を含む遺物包含層にあたる。このうち第Ⅴ・Ⅷ層が主要な遺物包含層で、この層中に排滓場が形成されている。第Ⅴ・Ⅷ層以外からの遺物の出土量は少ない。第Ⅶ層は遺構確認面で、整地層の可能性はある。なお、1 トレンチの北側では第Ⅲ～Ⅵ層が存在しない。

4 トレンチ周辺はテラス状の地形を呈し、1 トレンチとは層序が異なる。4 トレンチの層序は以下のとおりである。

第3章 調査の記録

第Ⅰ層 黒色土。層厚5cm。

第Ⅱ層 黒褐色土。層厚60cm。

第Ⅲ層 赤褐色土。焼土。層厚10cm。

第Ⅳ層 黒褐色土。層厚10cm。

第Ⅴ層 明赤褐色土。焼土。層厚15cm。

第Ⅵ層 暗褐色土。焼土。層厚10cm。

第Ⅶ層 にぶい黄褐色土。地山。遺構確認面の可能性がある。

第Ⅱ～Ⅵ層が鉄滓・炉壁を含む遺物包含層である。このうち第Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ層が主要な包含層で、この層中に排滓場が形成されている。遺構は主に第Ⅶ層で確認した。焼土層である第Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ層を掘り込んでいる遺構であれば、各焼土層において遺構を確認できる可能性がある。

b 検出遺構と出土遺物

遺構・遺物は、調査区中央部の大きな沢とそれに流れ込む小さな沢で検出した。遺構には、製鉄炉、排滓場、土坑、溝、柱穴様ピットなどがあり、遺物は鉄滓・炉壁などが出土した。

8 所見

a 遺跡の種類

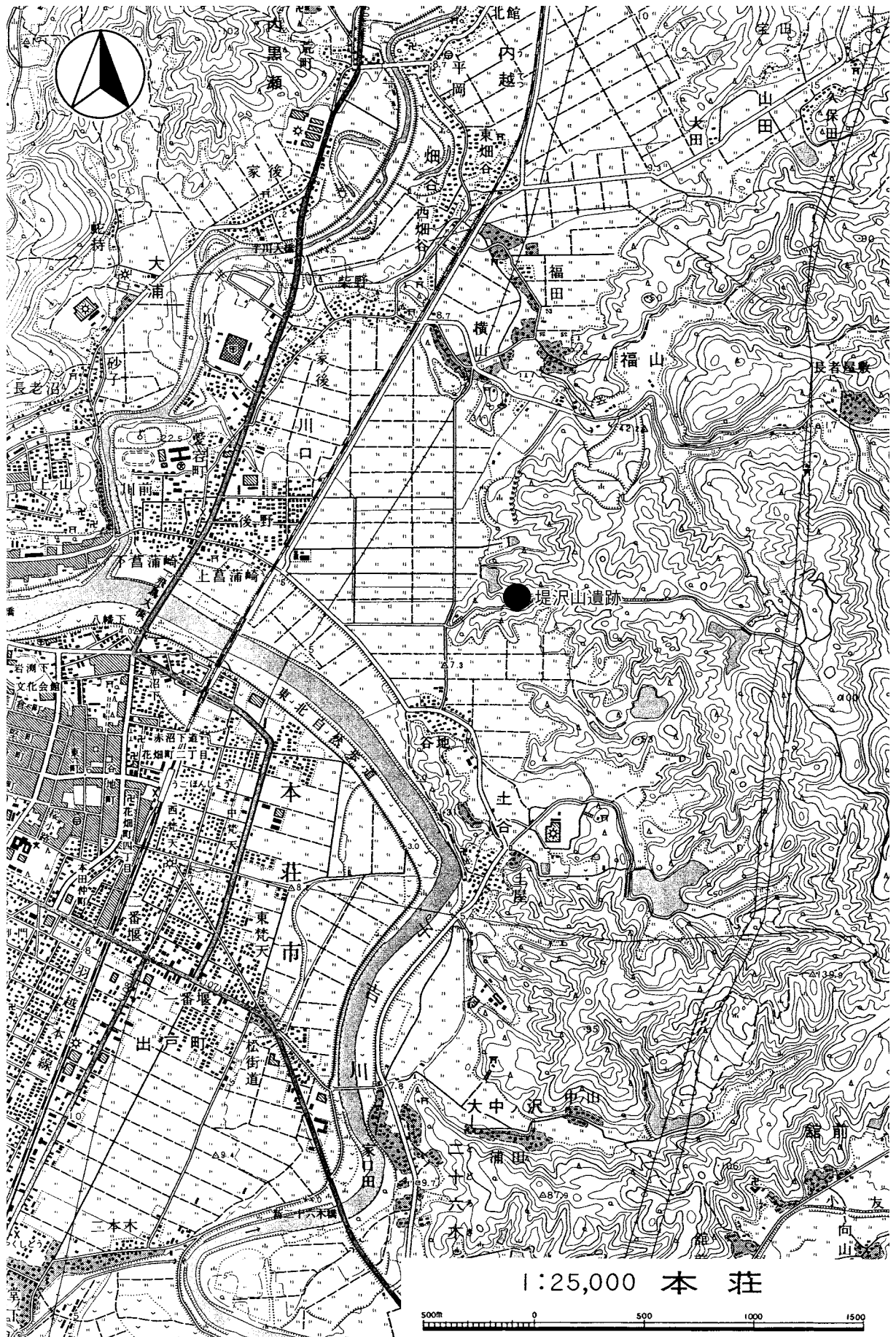
古代、中世の製鉄関連遺跡と考えられる。

b 遺跡の範囲と工事区域

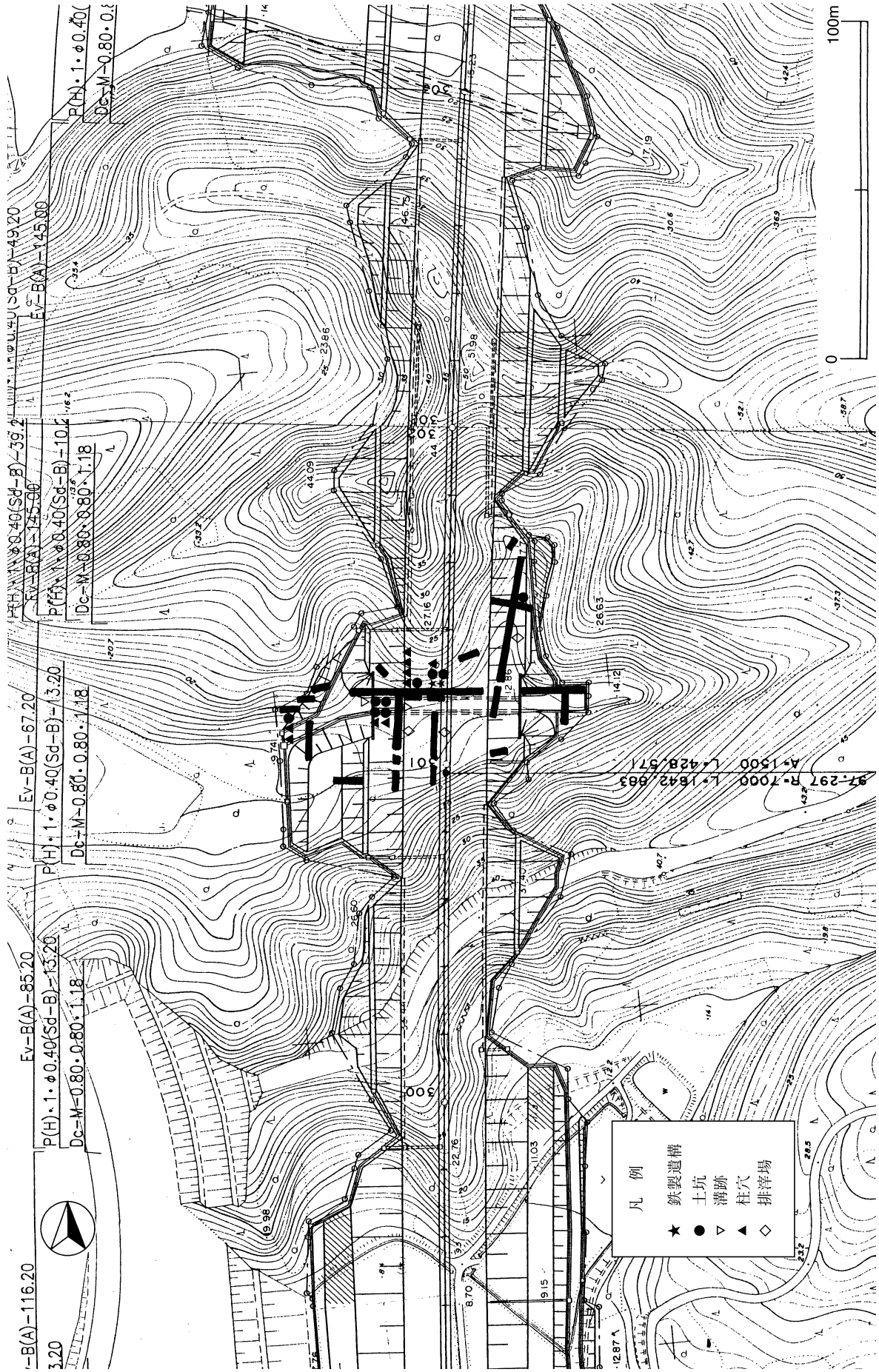
遺跡の範囲は、調査区中央部の大きな沢と、北側の2つの小さな沢とその周辺を含む範囲3,900㎡と考えられる。南・北の尾根に向かう急斜面については、地山露出地や地表面の観察により、遺構が存在する可能性はないと判断し調査範囲から除外した。

c 発掘調査時に予想される遺構と遺物

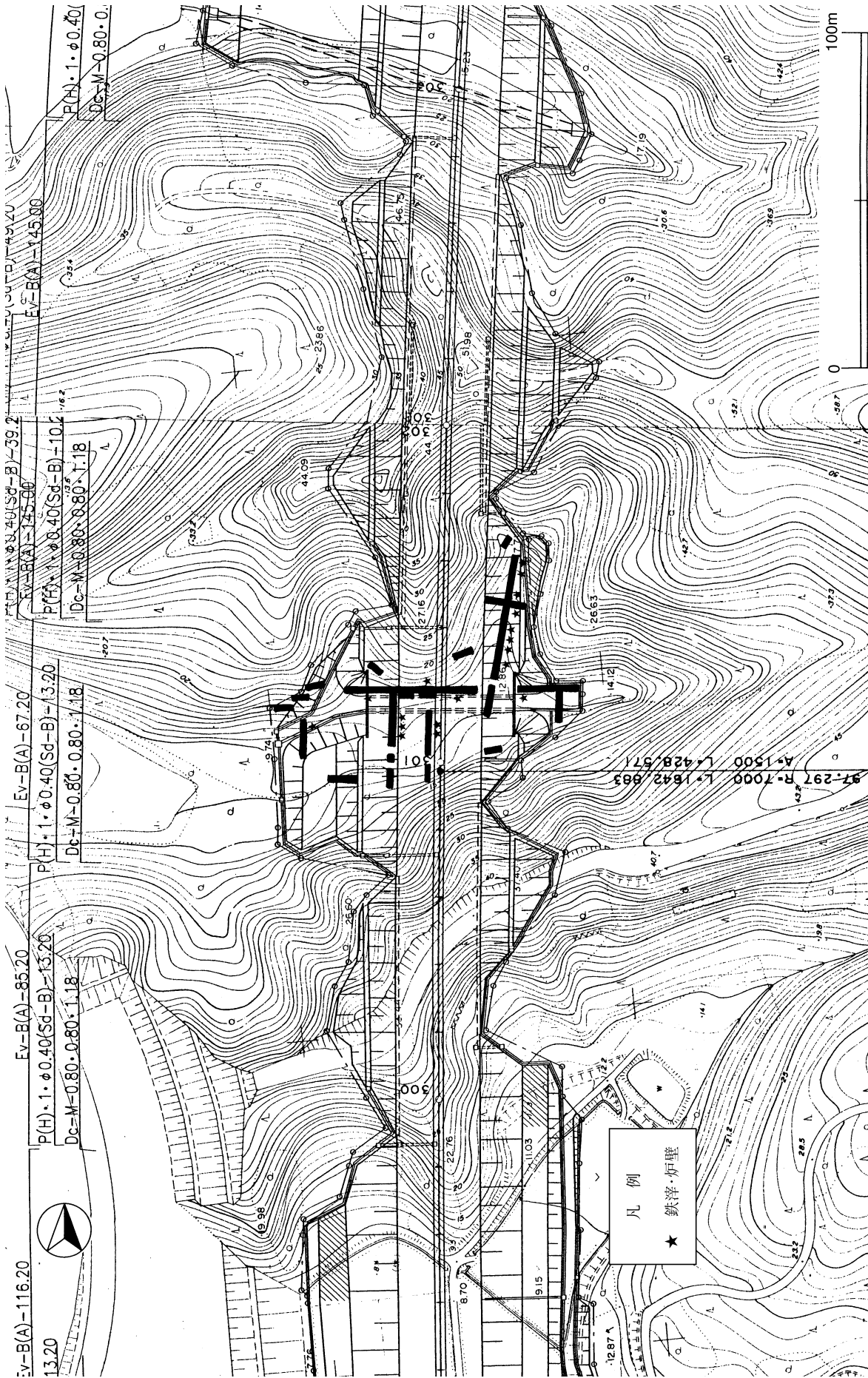
調査では、製鉄炉5～7基、排滓場5～7箇所、土坑35基前後、溝跡数条、柱穴様ピットなどの古代もしくは中世の遺構が検出されると考えられる。また、炭窯も検出される可能性がある。遺構は3トレンチのテラス状の地形部分と1トレンチの沢底部から多く検出すると予想される。遺物は鉄滓や炉壁、鞆の羽口などが出土すると考えられ、特に鉄滓・炉壁は膨大な出土量になると予想される。



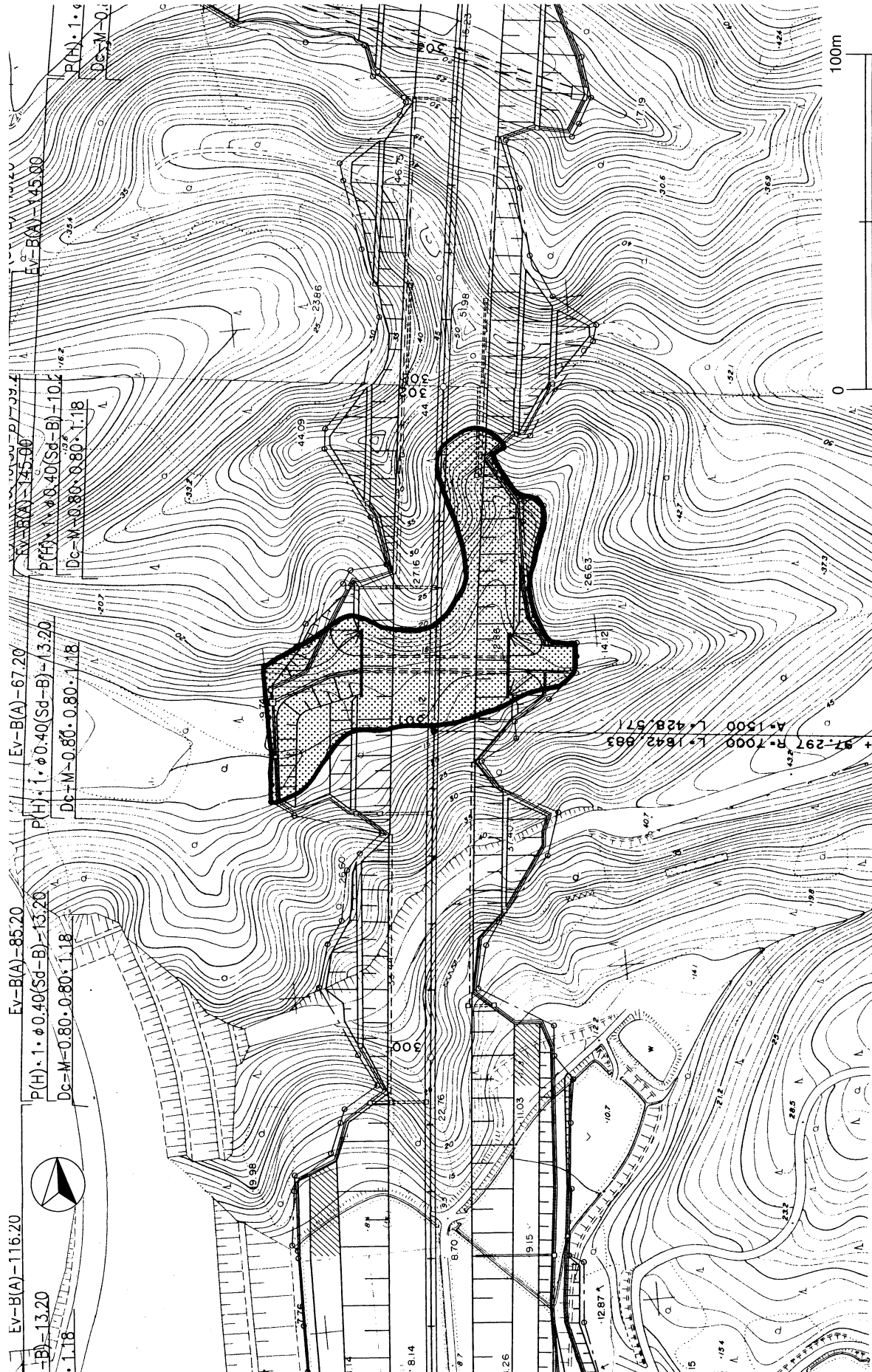
第83図 堤沢山遺跡位置図



第85図 堤沢山遺跡確認調査結果図（遺構検出地点）



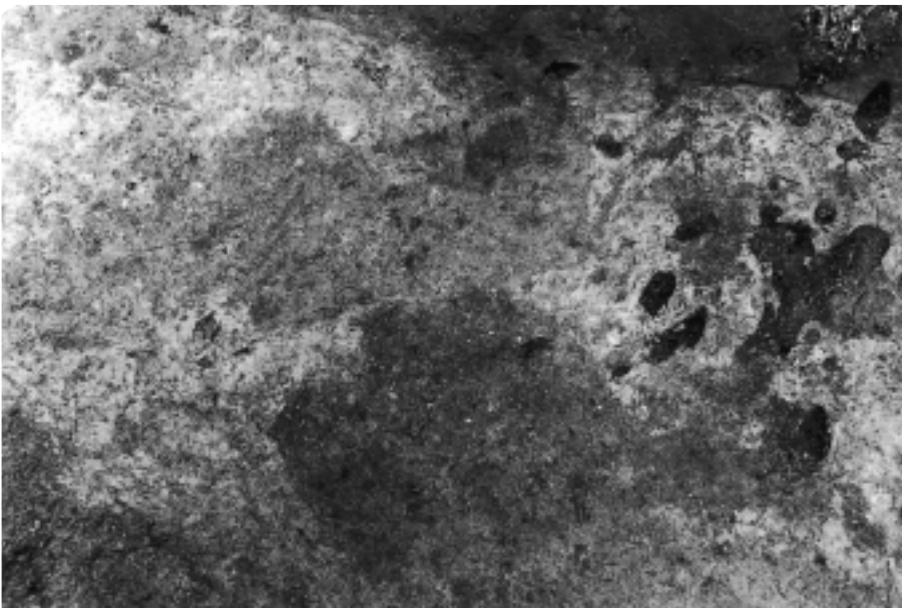
第86図 堤沢山遺跡確認調査結果図（遺物出土地点）



第87図 堤沢山遺跡範囲図



堤沢山遺跡
近景（南から）



堤沢山遺跡
製鉄遺構（奥）と
土坑（手前）（南から）



堤沢山遺跡
第10トレンチ
鉄滓出土状態（西から）

(2) 国道7号琴丘能代道路建設事業

①^{なわてした}縄手下遺跡

- | | | |
|---|-----------|------------------|
| 1 | 遺跡所在地 | 能代市田床内字縄手下53-2外 |
| 2 | 確認調査期間 | 平成14年11月5日～12月3日 |
| 3 | 確認調査対象面積 | 17,700㎡ |
| 4 | 工事区域内遺跡面積 | 8,500㎡ |
| 5 | 遺跡の立地と現況 | |

a 立地

縄手下遺跡は、能代市扇田にある能代東中学校より東へ約700mに位置し、幟山丘陵地北西端の台地上（標高約43m）に立地する。台地周辺の平坦地は、現在水田となっており、同じ台地の西側には、国指定史跡である檜山安東氏城館跡の一つ大館跡が隣接している。

b 現況

全域が伐採済みの杉の植林地であり、現在は主に笹が自生している。

6 確認調査の方法

地形を考慮してトレンチを設定し、通し番号を付した。重機により表土を掘削したのち、遺構確認面もしくは地山面を精査して遺構・遺物の有無を確認した。

実質調査面積は1,400㎡で、調査対象面積の7.9%にあたる。

7 確認調査の結果

a 層序

第10トレンチ東側で確認した層序は以下の通りである。

第Ⅰ層 黒褐色土 (7.5YR 2/2)。腐葉土による表土層。植物根が多い。層厚5～20cm。

第Ⅱ層 暗褐色土 (10YR 3/3)。シルト層。層厚5～15cm。

第Ⅲ層 にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)。シルトからなる漸移層。層厚5～15cm。

第Ⅳ層 明黄褐色土 (10YR 6/6)。粘土からなる地山層。層厚100cm以上。

第Ⅱ層が土師器・須恵器、第Ⅳ層上位が旧石器時代の遺物包含層である。遺構は、第Ⅲ層・第Ⅳ層の上面で確認した。第5トレンチ南側及び北側では、第Ⅱ層が確認できなかつたため、植林の際に削平されたと考えられる。第12トレンチ西側と第15トレンチ北側の溝跡から南西側の斜面までの範囲では第Ⅲ層が確認されず、古代以降に削平されたと考えられる。平坦面から検出された溝跡の覆土では、第Ⅱ層と第Ⅳ層に由来する土が確認された。地表面から遺構確認面および旧石器時代の遺物包含層である第Ⅲ層・第Ⅳ層上面までは深さ20～50cmである。

b 検出遺構と出土遺物

遺構・遺物ともに、調査区平坦面から見つかっている。遺構は溝跡、土坑、柱穴、炭窯跡、焼土遺構が検出された。土坑は主に平坦面の西側で、炭窯は第19トレンチ北西の斜面近くで検出されている。溝跡は平坦面全体から複数検出されており、それらの多くが柱穴を伴う。第20トレンチと第21トレンチで検出された溝跡は一連のものであり、平坦面の縁に沿って延びている。また、第12トレンチ西側・第15トレンチ西側・第26トレンチ北側で検出された溝跡は方形につながり、削平による整地部分を

第3章 調査の記録

区画していると考えられる。焼土遺構は第10トレンチと第3・第4トレンチの交点付近で見つかった。

遺物は、旧石器時代の石器、縄文時代の土器・石器、古代の土師器・須恵器・鉄製品・鉄滓が、中コンテナ2箱分出土している。旧石器時代の石器は、第10トレンチと第11トレンチの交点で出土している。

8 所見

a 遺跡の種類

旧石器時代・縄文時代の遺物散布地であり、古代の集落跡と推定される。

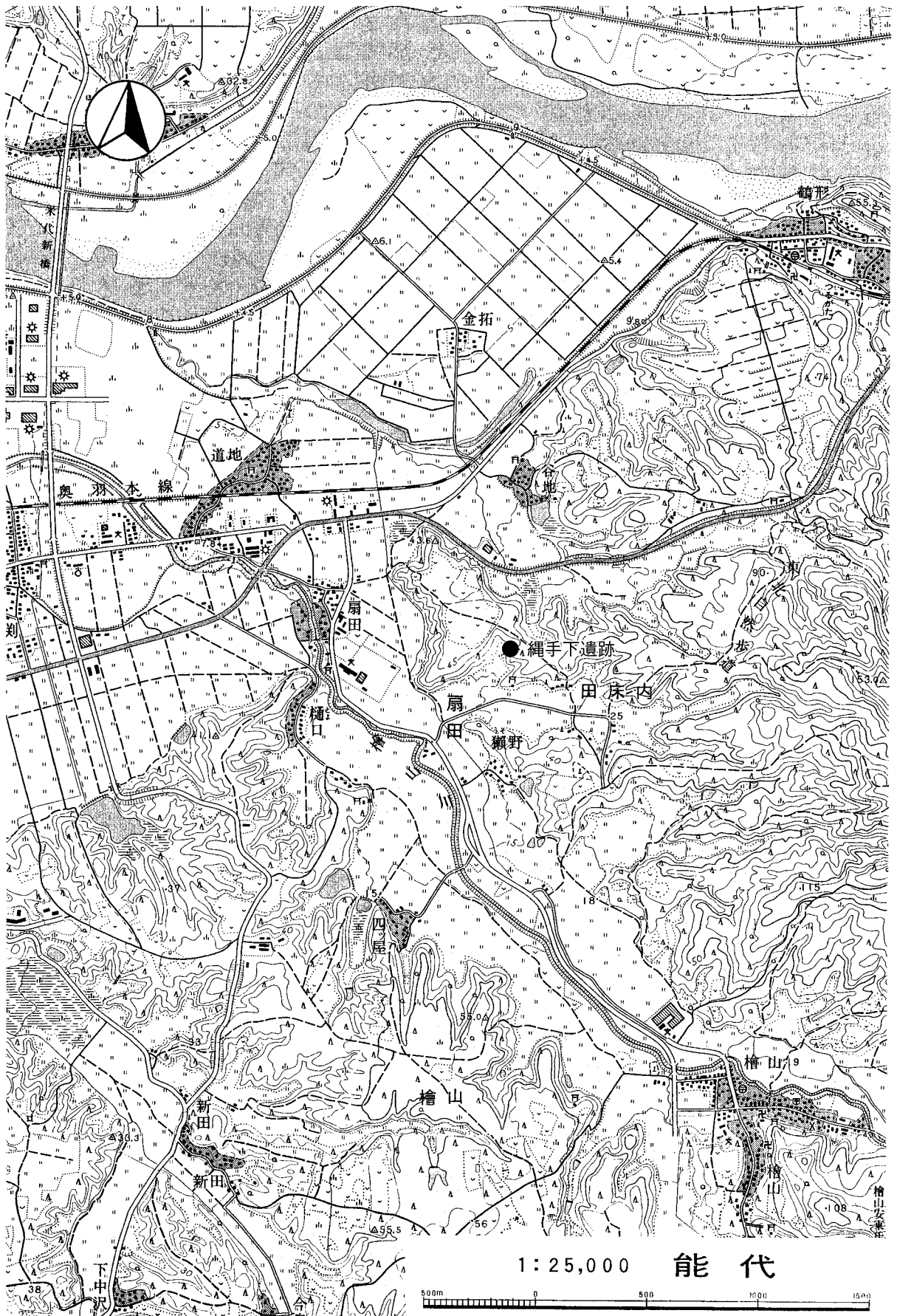
b 遺跡の範囲と工事区域

工事区域内遺跡範囲は、調査対象範囲内の中央部から南東部にかけての平坦面8,500㎡である。北東側の沢と南西側の斜面については、地形や重機路のための掘削部分を観察したところ、遺構・遺物とも確認できなかったため、遺跡範囲から除外した。

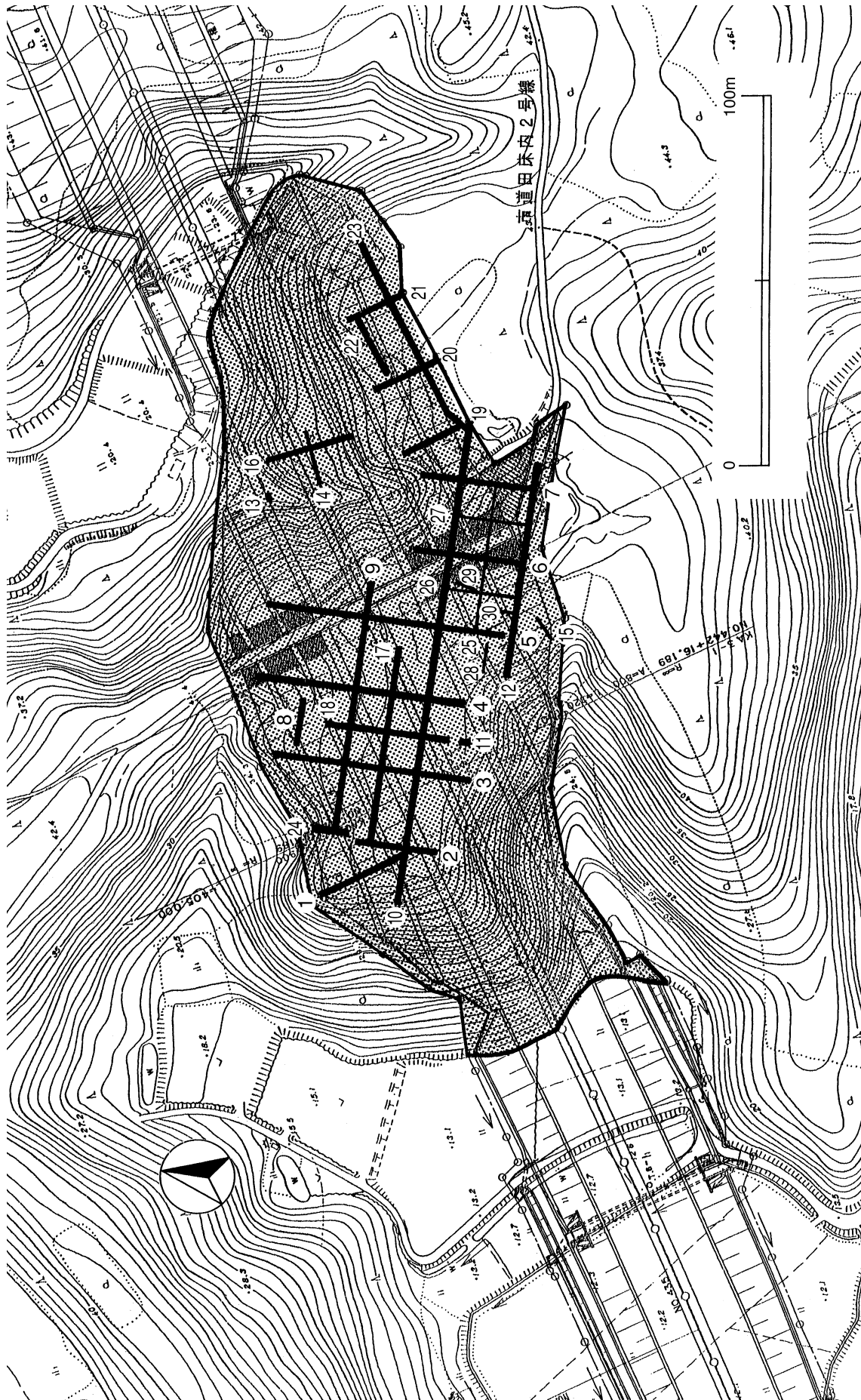
c 発掘調査時に予想される遺構・遺物

主な遺構としては、古代の溝跡・土坑が数十基、竪穴住居跡3～4軒が検出され、遺物は土師器・須恵器が出土するものと考えられる。

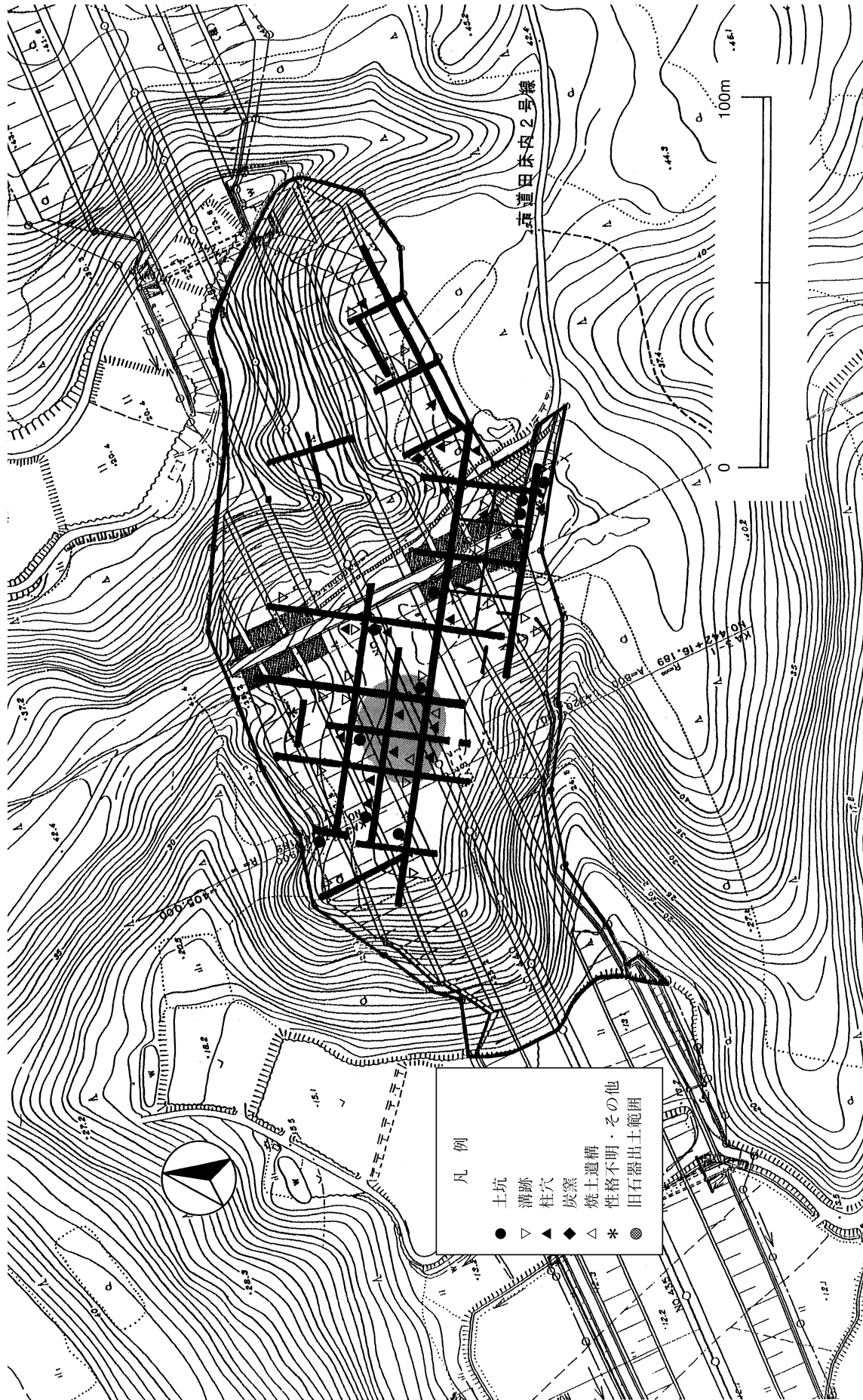
調査範囲の中央部からは旧石器時代の遺物集中区域が検出されると考えられる。また、南西部全域からは縄文時代の遺物が出土し、縄文時代の遺構の検出も予想される。



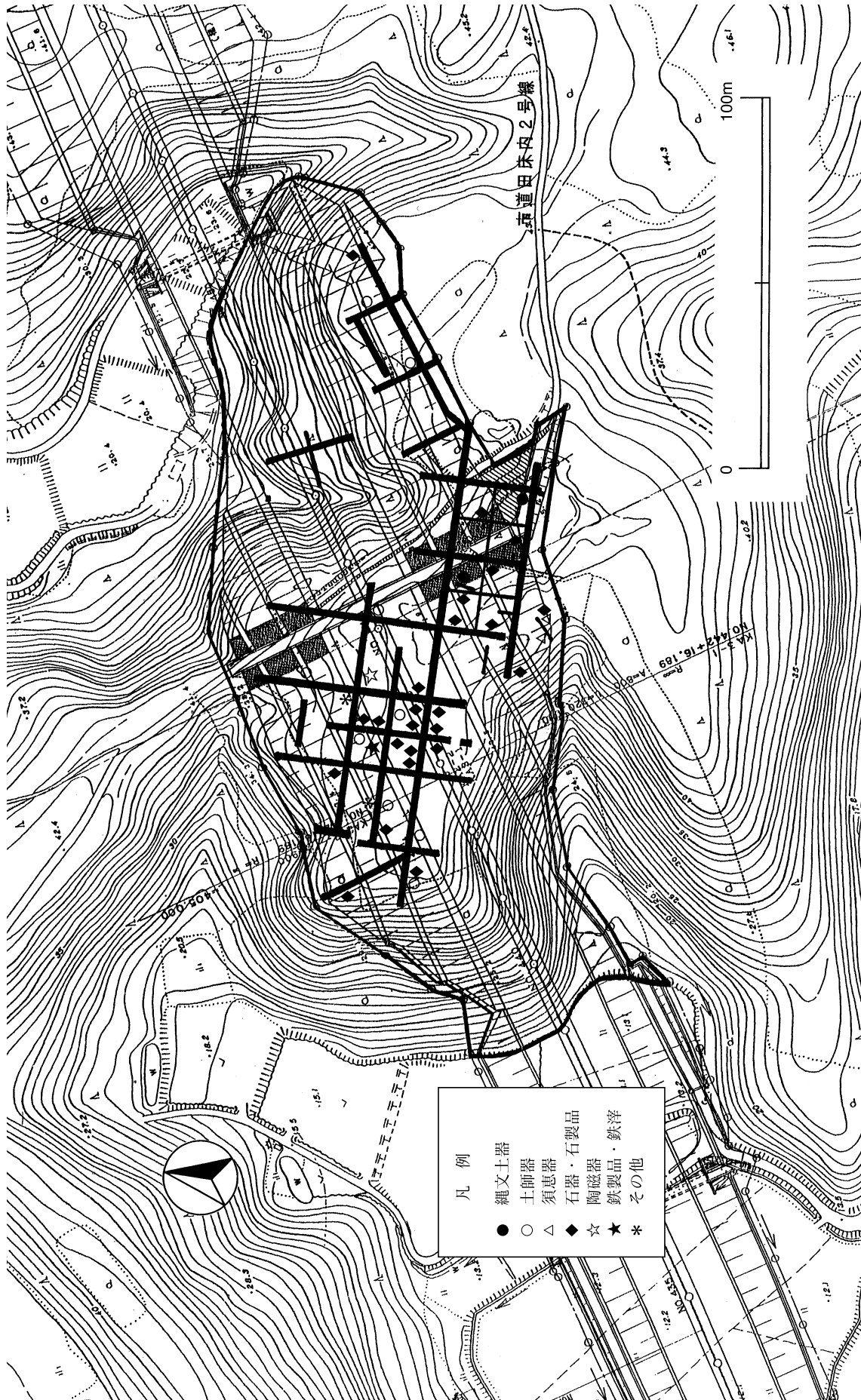
第88図 縄手下遺跡位置図



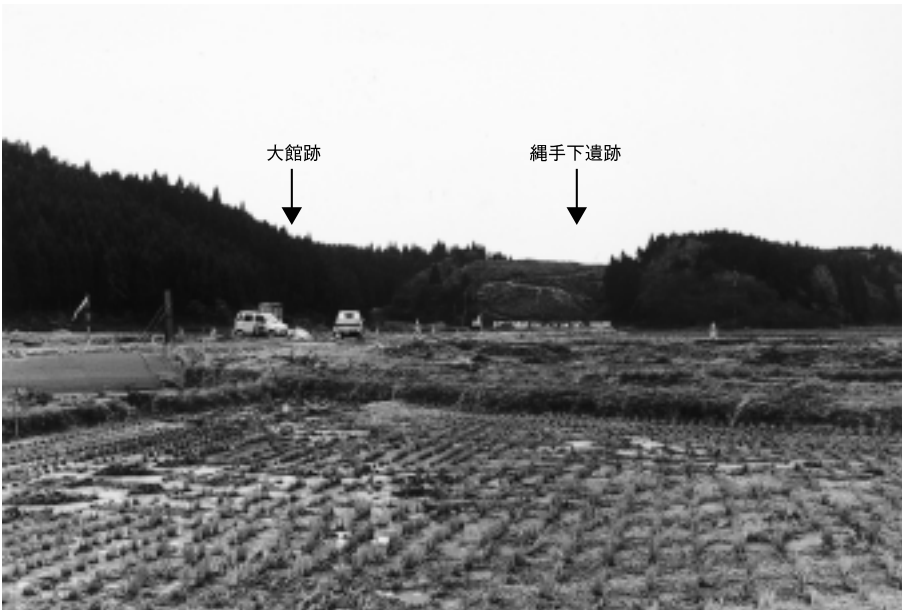
第89図 縄手下遺跡確認調査範囲図とトレンチ位置図



第90図 縄手下遺跡確認調査結果図 (遺構検出地点)



第91図 縄手下遺跡確認調査結果図 (遺物出土地点)



縄手下遺跡
遠景（南から）



縄手下遺跡
第10トレンチ
溝跡検出状況（東から）



縄手下遺跡
第15トレンチ
遺物出土状況（南から）

②^{いわのめ}岩ノ目遺跡

- | | |
|-------------|----------------------|
| 1 遺跡所在地 | 能代市扇田字岩ノ目15-2 |
| 2 確認調査期間 | 平成14年6月25日～7月19日 |
| 3 確認調査対象面積 | 17,100m ² |
| 4 工事区域内遺跡面積 | 0m ² |
| 5 遺跡の立地と現況 | |

a 立地

能代市街地の東方に位置し、能代市役所の南東6.3km、J R 東日本奥羽本線東能代駅の東南東2.3kmに所在する。米代川に注いでいる檜山川左岸の低地に位置し、南には最高地55mの志戸橋野台地が連なっている。台地は、遺跡の西側から南側にかけて開析谷が樹枝状に発達した地形になっている。低地の標高は11mである。

b 現況

調査対象地の全域が水田である。

6 確認調査の方法

未買収区域を除いて、基本的に20mごとに幅1.6mのトレンチを設定したが、中央の未買収区域周辺には10mごとにトレンチを設定した。重機または人力により表土を掘削したのち、遺構面もしくは地山面を精査して遺構・遺物の有無を確認した。

確認調査対象面積における試掘面積は984m²で、対象面積の5.8%に相当する。

7 確認調査結果

a 層序

第4トレンチ南側の基本層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層 黒褐色土 (10YR 3/2)。層厚10cm。

第Ⅱ層 黒色土 (10YR 2/1)。層厚10cm。

第Ⅲ層 オリーブ黒色土 (5Y 3/2)。層厚5cm。

第Ⅳ層 灰オリーブ色土 (7.5Y 4/2)。植物遺体を多量に含む。層厚30cm。

第Ⅴ層 灰オリーブ色土 (7.5Y 5/2)。地山土。

第Ⅳ層が広範に存在し、水田に造成される以前は湿地帯であることが理解された。また、第Ⅳ層面の高低差から、西側の沢筋から檜山川に流れる流路の痕跡を確認した。

b 検出遺構と出土遺物

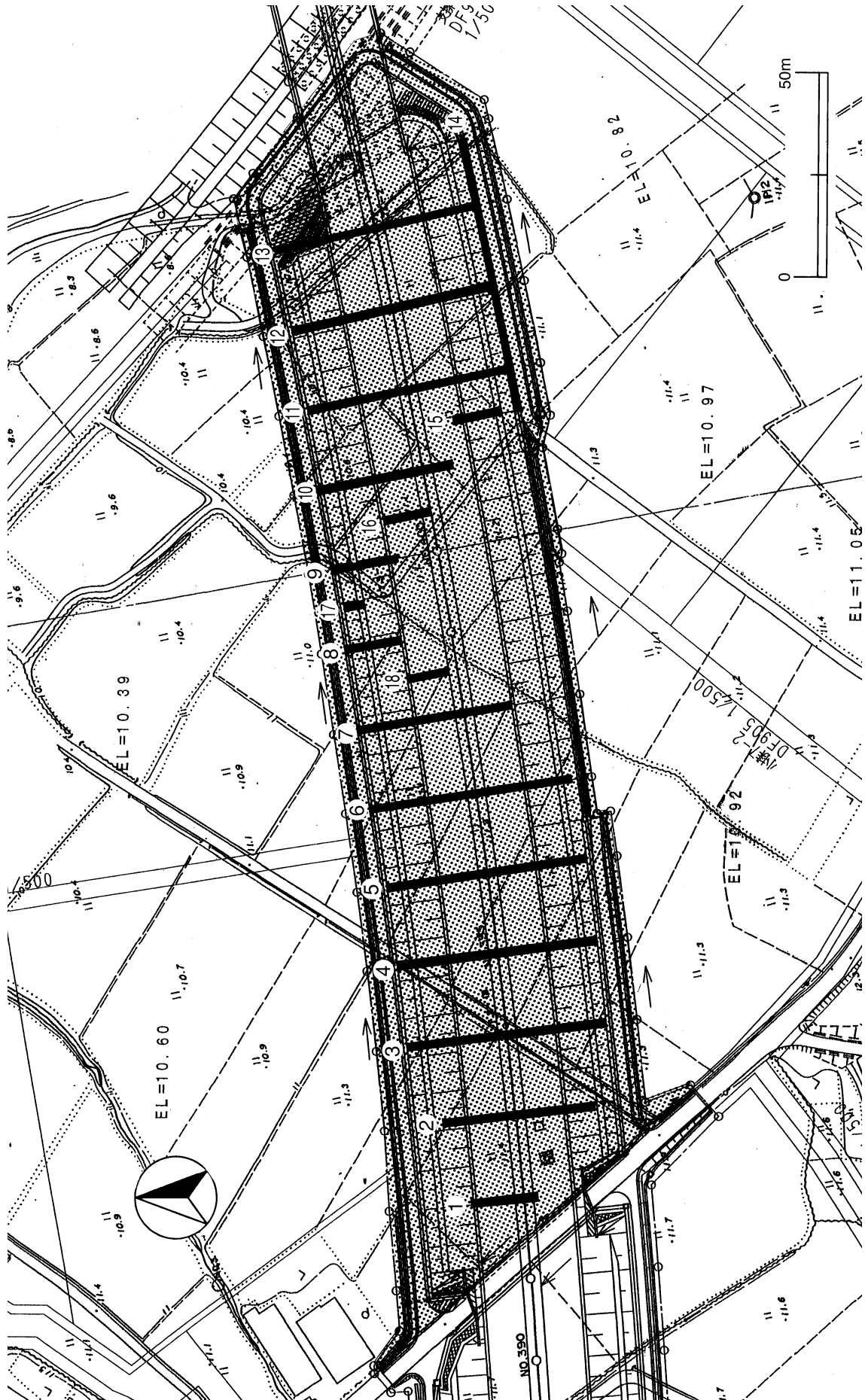
調査区域からは、平安時代の土師器が数点出土したが、小破片で殆どが摩滅している。これらは第Ⅱ層・第Ⅲ層からの出土で、樋口遺跡等西側の遺跡から流れ込んだものと判断される。遺構は検出されなかった。

8 所見

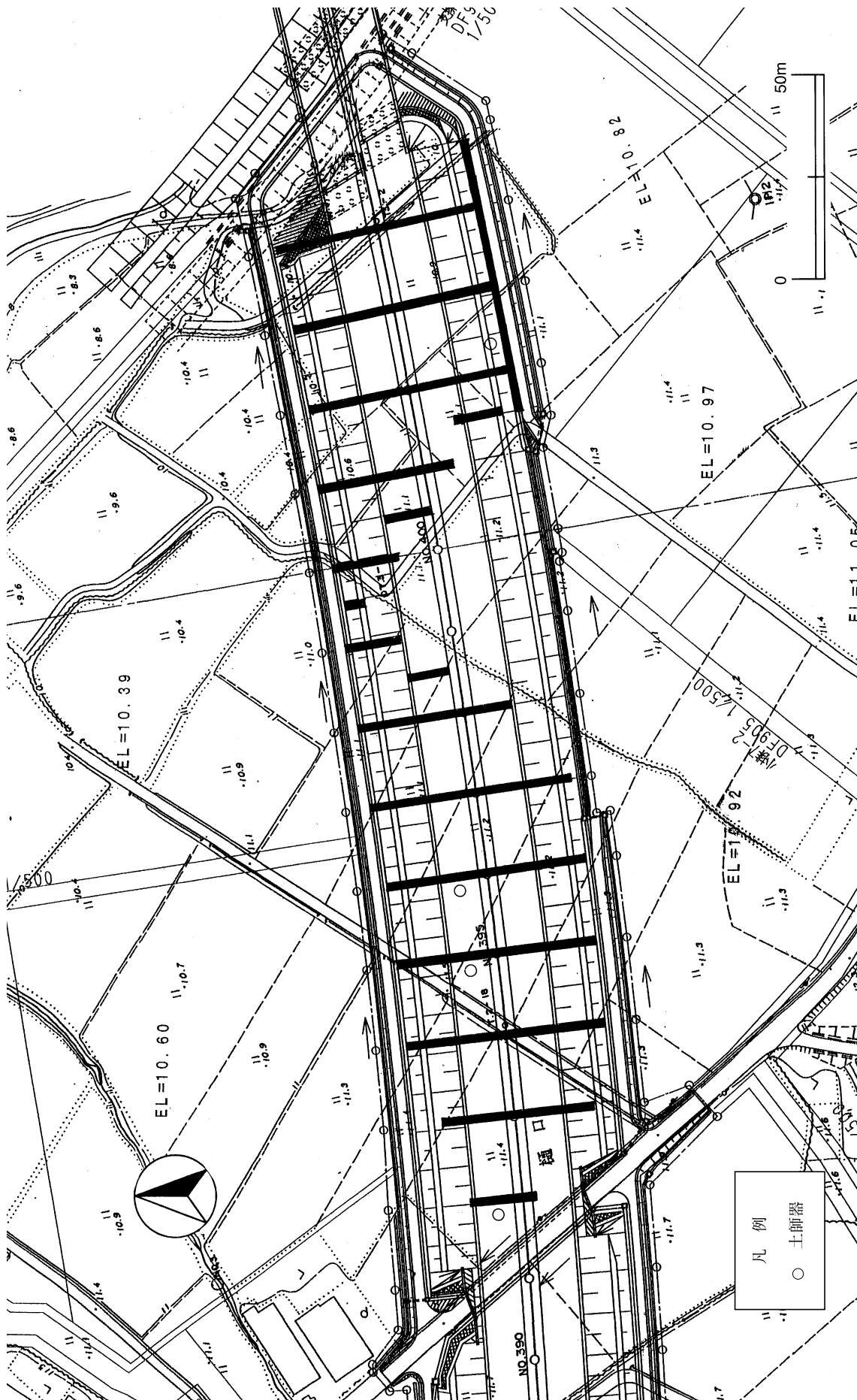
遺物はわずかに出土したものの、遺構は検出されなかったため、工事区域内での発掘調査の必要はないものと判断した。



第93図 岩ノ目遺跡位置図



第94図 岩ノ目遺跡確認調査範囲とトレンチ位置図



第95図 岩ノ目遺跡確認調査結果図（遺物出土地点）



岩ノ目遺跡
遠景（西から）



岩ノ目遺跡
植物遺体出土状況
（北から）



岩ノ目遺跡
トレンチ精査状況
（南から）

第3章 調査の記録

③樋口遺跡^{とよぐち}

- 1 遺跡所在地 能代市扇田字樋口61-3外
- 2 確認調査期間 平成14年6月25日～7月19日
- 3 確認調査対象面積 12,700m²
- 4 工事区域内遺跡面積 1,500m²
- 5 遺跡の立地と現況

a 立地

能代市街地の東方に位置し、能代市役所の南東6.2km、J R 東日本奥羽本線東能代駅の東南東2.2kmに所在する。遺跡は、調査区北西部の緩斜面を除いて、米代川に注いでいる檜山川左岸の低地に位置し、南には最高地55mの志戸橋野台地が連なっている。台地は、遺跡の西側から南側にかけて開析谷が樹枝状に発達した地形になっている。低地の標高は12mである。

b 現況

調査区北西部の緩斜面は、雑木や雑草で覆われていた。また、調査区南西部の低地には、ヨシが繁茂している。その他の地域は水田である。

6 確認調査の方法

調査地区に、基本的に20m間隔で幅1.6mのトレンチを設定した。重機または人力により表土を掘削したのち、遺構面もしくは地山面を精査して遺構・遺物の有無を確認した。

確認調査対象面積における試掘面積は760m²で、対象面積の6.0%に相当する。

7 確認調査結果

a 層序

低地（第2トレンチ）の基本層序は以下のとおりである。

- 第Ⅰ層 オリーブ黒色土（5Y 3/2）。表土。層厚は25cm。
- 第Ⅱ層 オリーブ黒色土（5GY 2/1）。層厚20cm。
- 第Ⅲ層 黒色土（7.5Y）。層厚20cm。
- 第Ⅳ層 暗褐色土（10YR 3/3）植物遺体を多量に含む。層厚40cm。
- 第Ⅴ層 オリーブ黄色土（5Y 6/3）。地山土。

第Ⅳ層が広範に存在し、水田に耕作される以前は湿地帯であることが分かった。第Ⅳ層面の高低差とその起伏の方向性から、西側沢頭から東側の檜山川方向へ、流路の痕跡が確認できた。

斜面地（第10トレンチ中央）の基本層序は以下のとおりである。

- 第Ⅰ層 暗褐色土（7.5YR 3/4）。表土。層厚10～20cm。
- 第Ⅱ層 黒褐色土（10YR 3/2）。層厚10～15cm。
- 第Ⅲ層 黒褐色土（10YR 2/2）。古代遺物包含層で植物遺体を多量に含む。層厚10cm。
- 第Ⅳ層 オリーブ灰色土（10Y 5/2）。層厚10～40cm。
- 第Ⅴ層 黒褐色土（10YR 2/2）。層厚10～60cm。
- 第Ⅵ層 オリーブ灰色土（5GY 5/1）。砂質地山土。

b 検出遺構と出土遺物

調査区北西部の緩斜面は、一帯が平安時代の捨て場と考えられる。斜面地のため場所によって層序

が異なるが、第Ⅲ層からは平安時代の土師器や須恵器の他に、木製品や削り屑・種子等が多量に出土した。土器には坏や甕の器種があり、木製品には、削り物・篋・箸・曲物等がある。第Ⅲ層には、厚さ5cm前後の木屑層が確認できた。第Ⅲ層の西側斜面には、1m四方の狭い範囲からほぼ完形の土師器杯6点が、正立して置かれたような状態で出土したことから、遺構の可能性もある。この緩斜面の南側に隣接する水田からは、幅1.3～1.4m、深さ0.2～0.35mの溝跡を検出した。覆土からは、平安時代の土師器・須恵器、箸・曲物・加工痕のある材木等の木製品が出土した。

8 所見

a 遺跡の種類

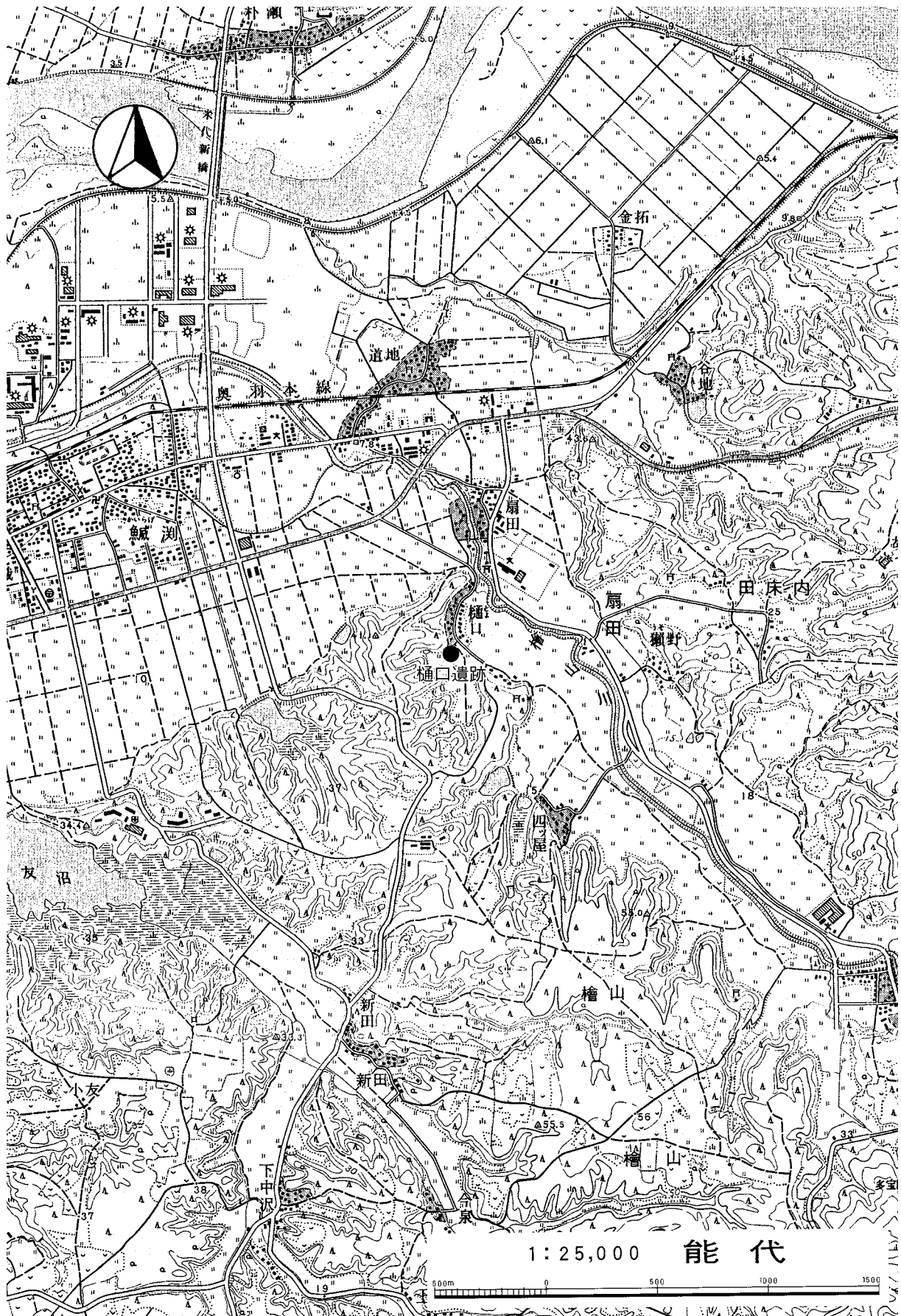
調査区北西部の緩斜面一帯が、平安時代の捨て場と考えられ、溝跡もこれと関連するものと考えられる。

b 遺跡の範囲と工事区域

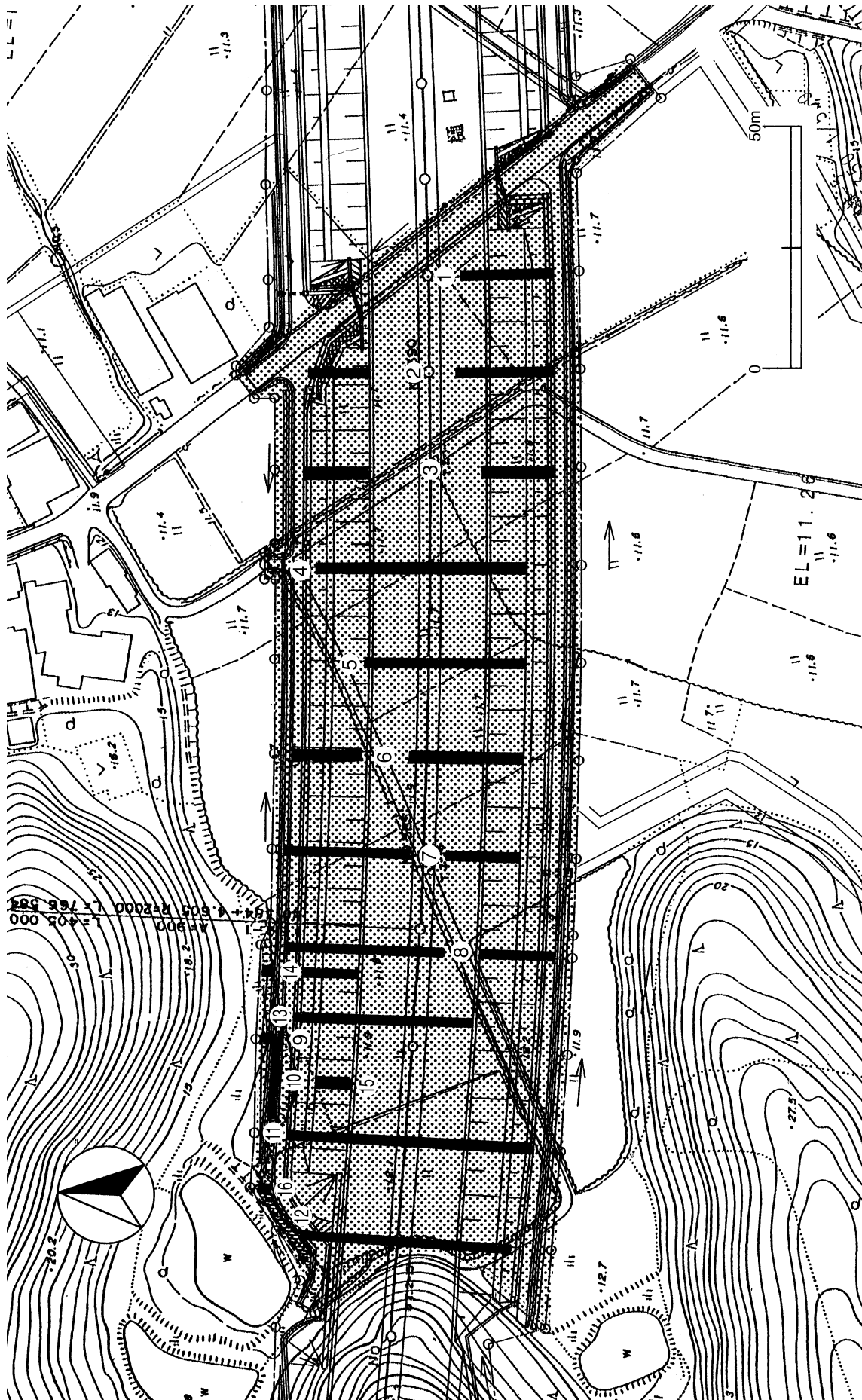
調査区北西部の緩斜面及び隣接した南側低地の一部が、工事区域内における遺跡範囲である。木製品等を主体とする捨て場の北側には、現地形でやや平坦な場所が存在しており、ここに木工に関わる生産遺跡が存在するものと考えられる。今回の調査による工事区域内遺跡範囲は700㎡であったが、後に当地区の路線計画が北側に拡幅変更されたため、遺跡の範囲は1,500㎡になった。

c 発掘調査時に予想される遺構・遺物

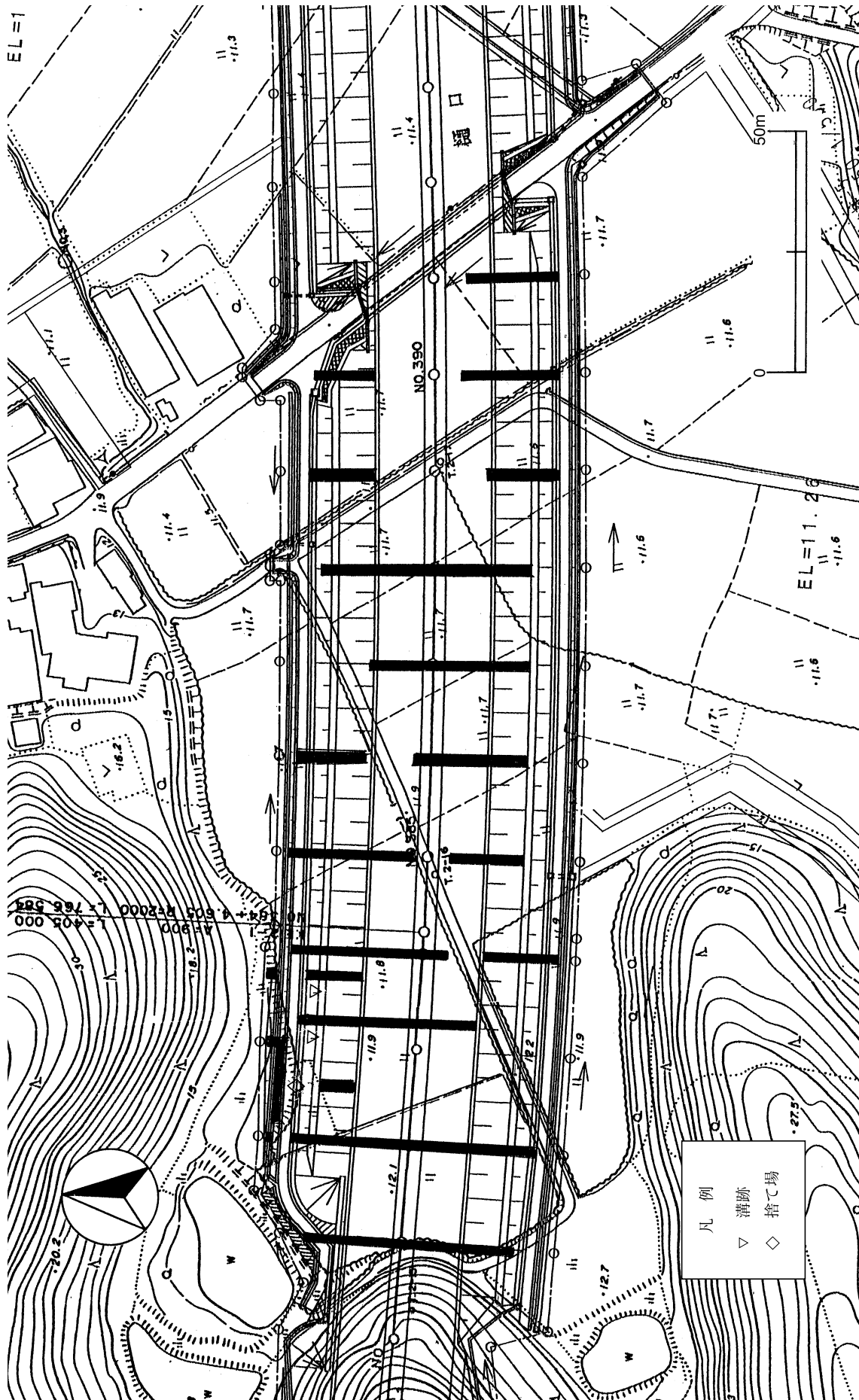
工事区域内遺跡範囲の全域が、平安時代の木製品や削り屑を主体とした捨て場と考えられる。調査範囲が木工生産に関わる遺跡の一画を占めると考えられるため、削り屑・木屑とともに多量の木製品が出土すると考えられる。また、種子等の植物遺存体も良好な状態で検出される可能性が高い。土器は、坏や甕を主体にまとまった量が出土すると予想されるが、木製の日常什器も出土すると思われる。一方、土器が配置されたように出土した捨て場の一部には、住居跡が存在する可能性もある。



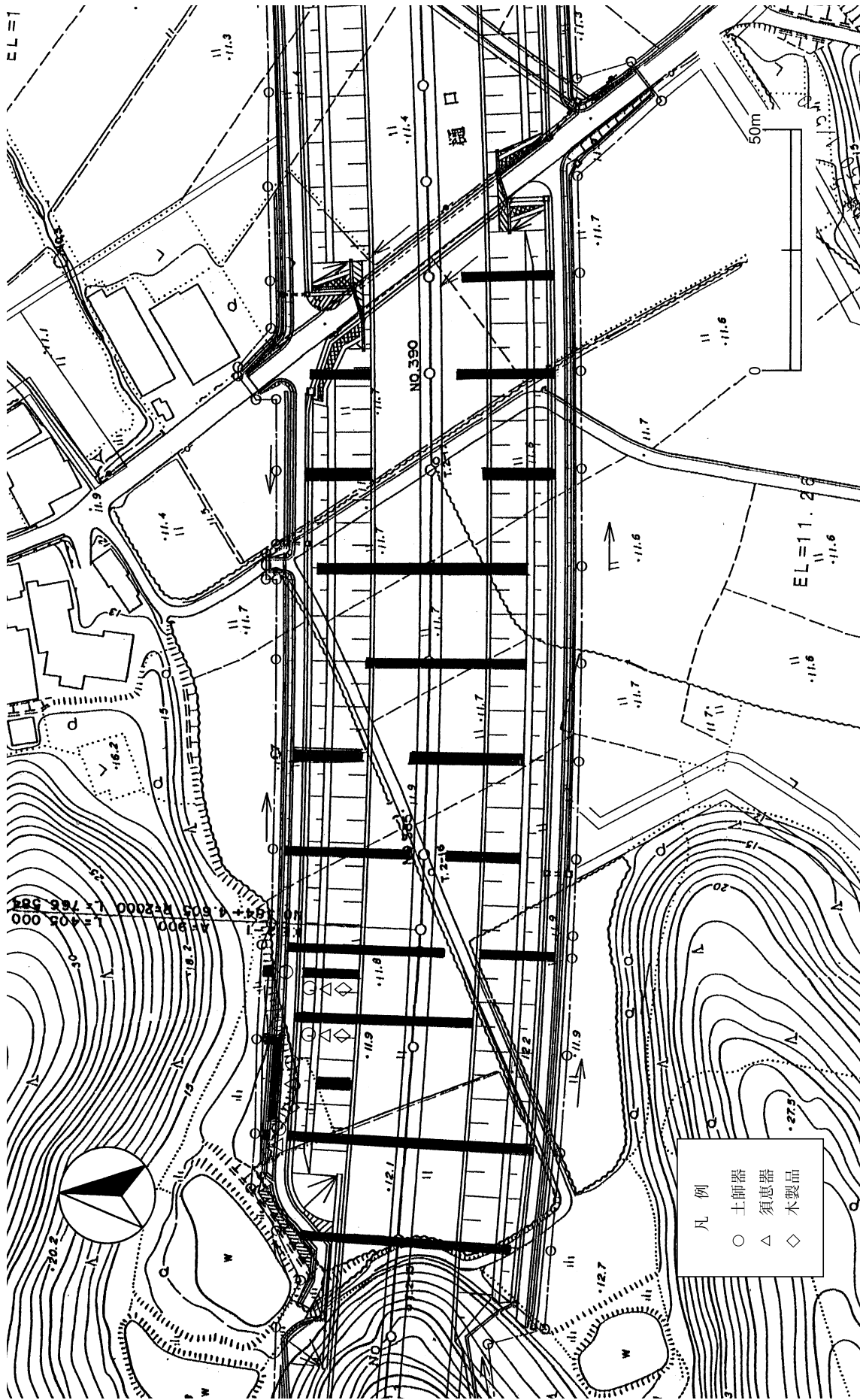
第96図 桶口遺跡位置図



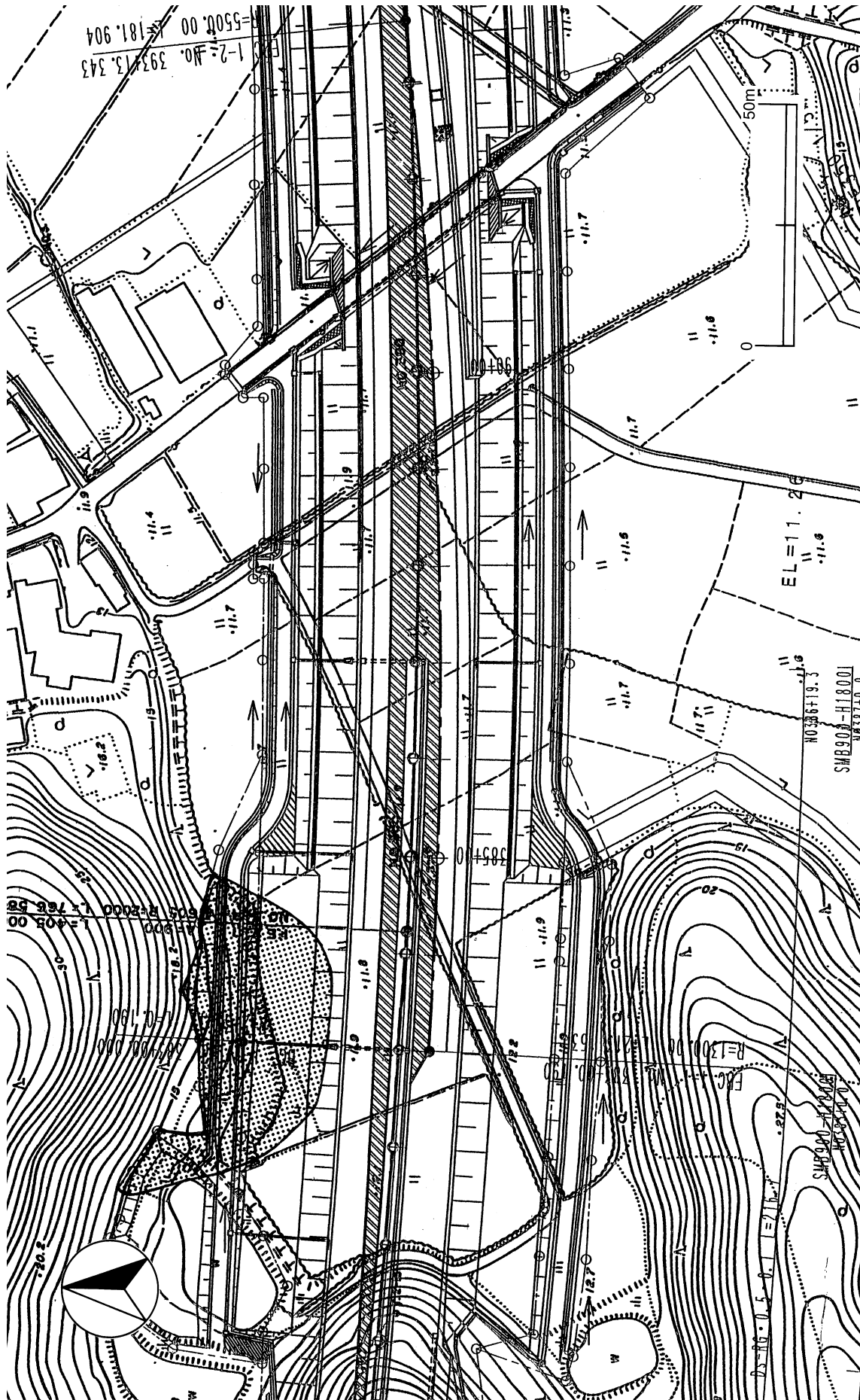
第97図 樋口遺跡確認調査範囲とトレンチ位置図



第98図 樋口遺跡確認調査結果図 (遺構検出地点)



第99図 樋口遺跡確認調査結果図 (遺物出土地点)



第100図 樋口遺跡範囲図

樋口遺跡
遠景（南西から）



樋口遺跡
遺物出土状況（北から）



樋口遺跡
遺物出土状況（南から）



(3) 都市計画街路秋田中央道路建設事業

①^{くぼたじょう}久保田城跡

- 1 遺跡所在地 秋田市千秋明德町204-7外
- 2 確認調査期間 中土橋地区：平成14年5月21日～6月5日
堀地区：平成14年7月1日～7月12日
- 3 確認調査対象面積 中土橋地区：250㎡
堀地区：6,060㎡
- 4 工事区域内遺跡面積 中土橋地区：250㎡
堀地区：穴門堀400㎡ 大手門堀200㎡ 計 600㎡
- 5 遺跡の立地と現況

a 立地

久保田城跡は、JR秋田駅の西400mに位置し、その大部分は現在千秋公園となっている。この久保田城跡の大手門堀と穴門堀及び両者の間の通称中土橋地区が、今回の調査対象地点である。

b 現況

大手門堀は東西約250m、南北約70m、水深は約1mで毎年夏には美しいハスの花が咲く。中土橋は広小路から千秋公園に至る重要な橋で幅約18.5mのアスファルト敷道路となっている。工事は大手門堀から中土橋及び穴門の堀をかすめて、開削によって道路を造ろうとするものである。

6 確認調査の方法

(1) 中土橋地区

工事区域の北側と南側に沿って、それぞれ南北2m幅のトレンチを設定し、南側を1トレンチ、北側を2トレンチとした。東西幅2～3mの区画内を重機で掘削したのち、遺構面や地山面を精査して遺構・遺物の有無を確認した。確認調査対象面積における試掘面積は58㎡で対象面積の23.2%である。

(2) 堀地区

穴門堀調査区は、鋼板矢板で仕切られた内側全範囲400㎡を、排水した上で水流によってヘドロを洗い流し遺物の表面採集をした。一部は広小路に平行して手掘りによる掘削を行い遺構・遺物の有無を確認した。大手門堀調査区は、3地点に各々4.8m×4.8mの範囲を鋼板矢板で囲み、内部のヘドロは特殊作業車を使って除去し、内部に遺物がないか目視による確認をした。中土橋に最も近い場所を立坑No.1、堀のほぼ中央を立坑No.2とし、最も駅寄りで広小路にも近い場所を立坑No.3として調査を行った。確認調査対象面積における試掘面積は470㎡で対象面積の7.8%である。

7 確認調査結果

(1) 中土橋地区

旧中土橋遺構を含んだ2トレンチの基本層序は以下のとおりである。

a 層序

- 第Ⅰ層 灰色土 (7.5Y 4/1)。盛土。層厚40～45cm。
- 第Ⅱ層 オリーブ灰色土 (5GY 5/1)。粘質土。黄色ブロックを含む。層厚5cm。
- 第Ⅲ層 黒褐色土 (10YR 2/2)。黄灰ブロック色を含む。層厚20～25cm。

- 第Ⅳ層 黒色土 (10YR 2/1)。黒・黄灰ブロックを含む。層厚5～10cm。
- 第Ⅴ層 黒褐色土 (10YR 3/2)。均一な層。層厚5～10cm。
- 第Ⅵ層 灰オリーブ色土 (5Y 4/2)。均一な層。層厚5～8cm。
- 第Ⅶ層 黒褐色土 (10YR 2/2)。一部ラミナ状をなし、植物を含む。層厚15～25cm。
- 第Ⅷ層 黒褐色土 (10YR 3/2)。均一な層。層厚20～25cm。
- 第Ⅸ層 灰オリーブ色土 (5Y 4/2)。地山。

第Ⅱ～Ⅳ層が、中土橋築造に関わる土層と判断された。2トレンチのかつての中土橋護岸西側は、アスファルト下1.4m前後で黒色のヘドロ状態を呈している。

b 検出遺構と出土遺物

遺構は、久保田城跡の一面を占める旧中土橋と堀であり、他に明確な遺構は確認できなかった。調査区には、全域にガス・電気・水道などの管が埋設され、調査区のいたる所が攪乱されている。

1トレンチでは、旧中土橋が中央部で南北約2m×東西約3.5mにわたって確認できた。この西側部分では、旧中土橋の端にあたる旧護岸部に組まれた礫が、杭列やしがらみを伴って検出された。旧護岸部の南北方向は北北東－南南西であり、現中土橋護岸と平行する。旧護岸東側では、旧中土橋の構築土は検出されたものの、攪乱が著しく柱列やしがらみを見つけることはできなかった。遺物は、旧護岸部分を中心に陶磁器・貨銭・煉瓦などが出土した。

2トレンチでは、旧中土橋が調査区中央部で南北約2m×東西約2.5mにわたって確認できた。この西側部分でも、旧護岸部で組まれた礫が杭としがらみを伴って検出され、1トレンチの旧護岸に直線的に連続することが判明した。東側護岸部分は、攪乱が著しく検出できなかったが一部旧中土橋の面を断面で確認している。遺物は、旧護岸部分を中心に、陶磁器・煉瓦などが、西側堀からは陶磁器が出土した。また、旧護岸部の旧中土橋構築土を除去したところ、構築土直下より箸や瓦と幅10cm長さ50cmほどの板材が出土した。

(2) 堀地区

a 層序

〈穴門堀〉

- 第Ⅰ層 オリーブ灰色土 (7.5Y 5/2)。ヘドロ層。層厚5～30cm。
- 第Ⅱ層 礫層。遺物包含層 (陶磁器・木製品)。層厚5～25cm。
- 第Ⅲ層 灰色土 (7.5Y 5/1)。砂礫層で粘質土を混入する。層厚15～25cm。

第Ⅲ層以下の層は確認できていないが、それより下はシルト系粘質土であることがボーリング調査によって分かっている。

〈大手門堀〉

- 第Ⅰ層 オリーブ灰色土 (7.5Y 5/2)。ヘドロ層。層厚30～200cm以上。
- 第Ⅱ層 礫層。遺物包含層 (木製品)。層厚15～25cm。
- 第Ⅲ層 灰色土 (7.5Y 5/1)。砂礫層で粘質土を混入する。層厚は不明。

第Ⅲ層以下の層は確認できていないが、それより下はシルト系粘質土であることが分かっている。

b 検出遺構と出土遺物

穴門堀の広小路に平行した護岸区域では、江戸時代の逆茂木か土留め柵と考えられる木材が見つか

った。穴門堀からは、江戸時代に相当する陶磁器類を第Ⅰ層又は第Ⅱ層の直下で採集した。

大手門堀に設置された立坑No.1からは、中土橋からの延長で東側に緩やかな傾斜を示す部分が認められた。この傾斜地には、土留め柵として打ち込まれたと考えられる杭が数本確認された。また、多数の木製品、曲げ物、陶磁器類が出土した。

8 所見

(1) 中土橋地区

a 遺跡の種類

近世城館の水堀にかかる土橋跡が確認された。

b 遺跡の範囲と工事区域

工事区域内の全域が、旧中土橋及びその堀で占められる。全域にガス・電気・水道などの管が埋設されているものの、破壊を免れている遺構が部分的に残されていると予想される。

c 発掘調査時に予想される遺構・遺物

旧中土橋の西側護岸部分は、連続的に遺存する。護岸部分からは杭やしがらみと、それらを固定する煉瓦、近世陶磁器などが出土するものと考えられる。堀からは、陶磁器類が出土すると予想される。また、久保田城築城当時の中土橋より古い面に遺構・遺物が存在すると考えられる。

(2) 堀地区

a 遺跡の種類

江戸時代の城郭であり、門に通ずる旧中土橋構築時の護岸工事跡及び外敵侵入に備えた防御性遺構である。

b 遺構の範囲と工事区域

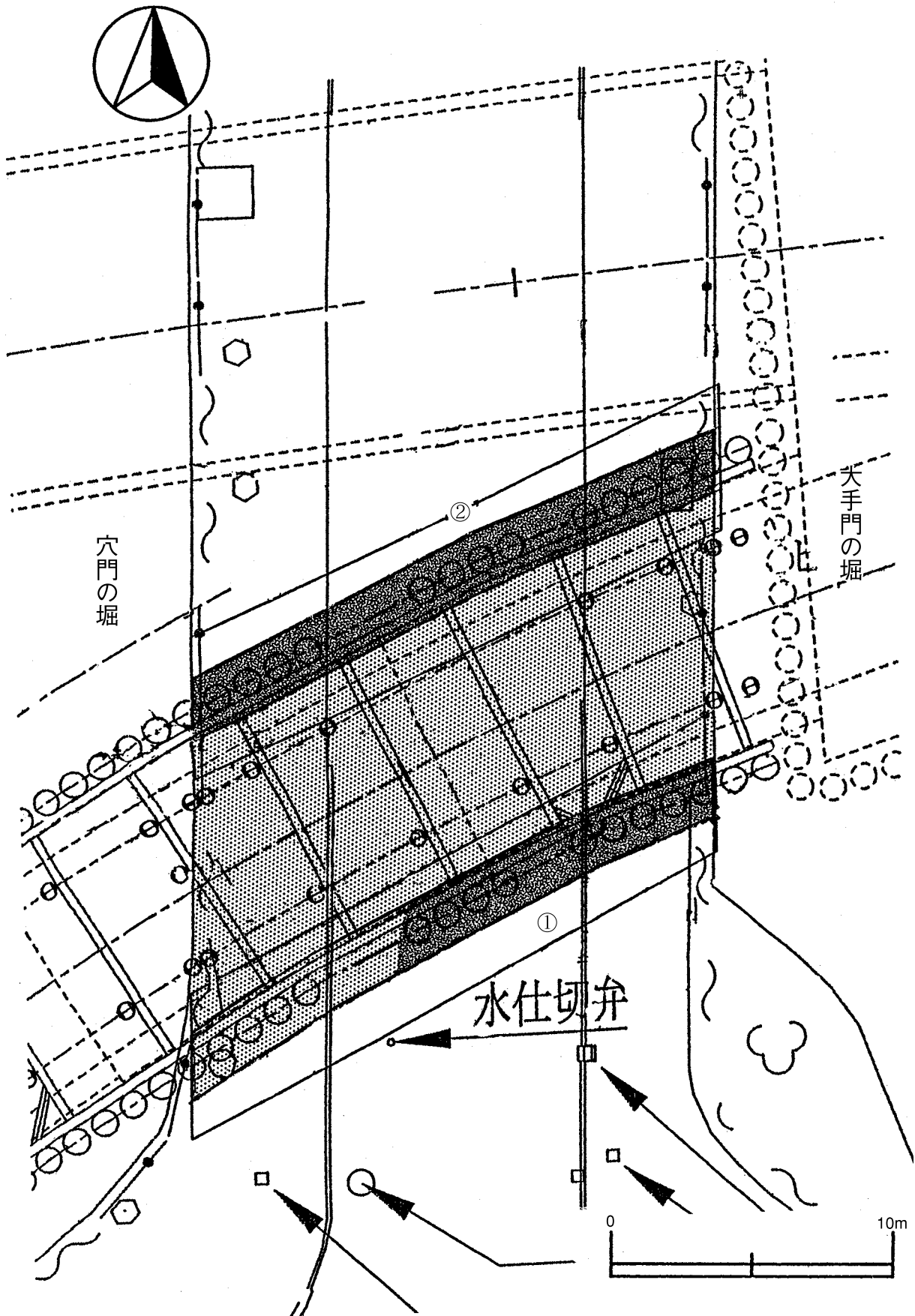
工事区域内の全域が旧中土橋及びその堀で占められている。中土橋の両岸と広小路沿い護岸下にかかる部分に、遺構が残されていると予想される。

c 発掘調査時に予想される遺構・遺物

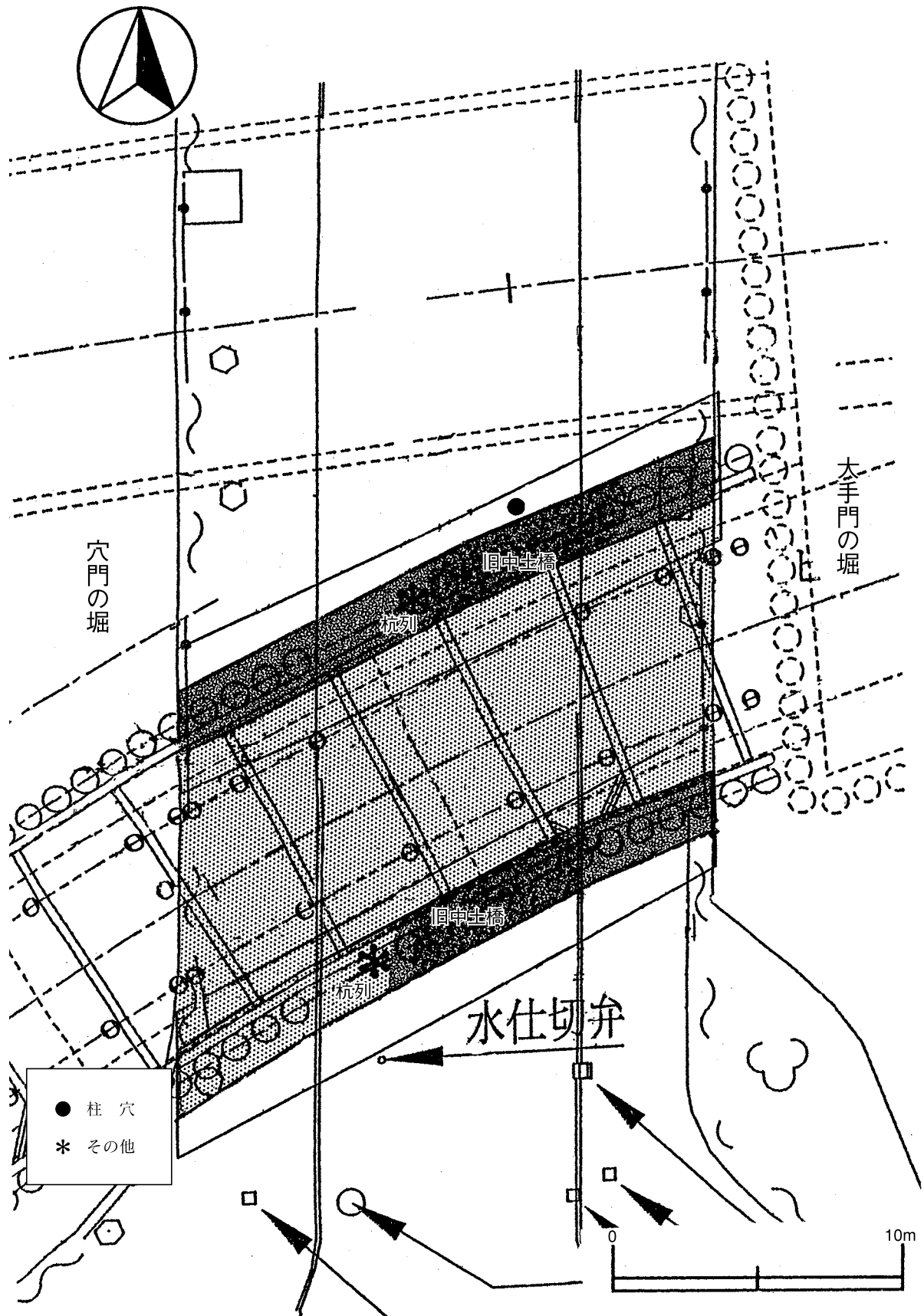
中土橋護岸部分に近い堀の中からは、杭やしがらみ、近世の陶磁器、木製品、曲げ物などが出土するものと考えられる。中土橋から西側の広小路沿い護岸下までは、逆茂木や杭、近世の陶磁器、瓦などの出土が予想される。



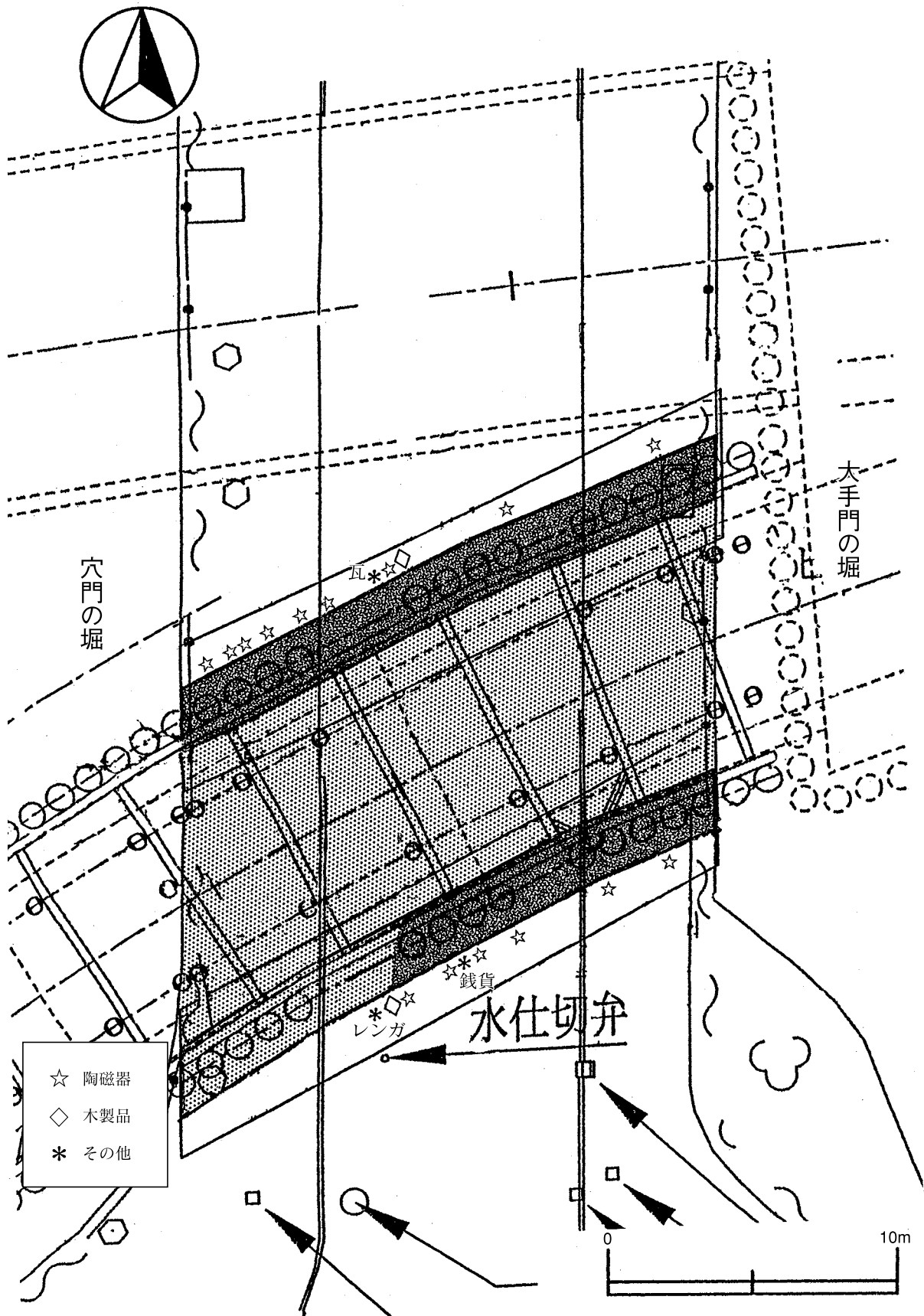
第101図 久保田城跡位置図



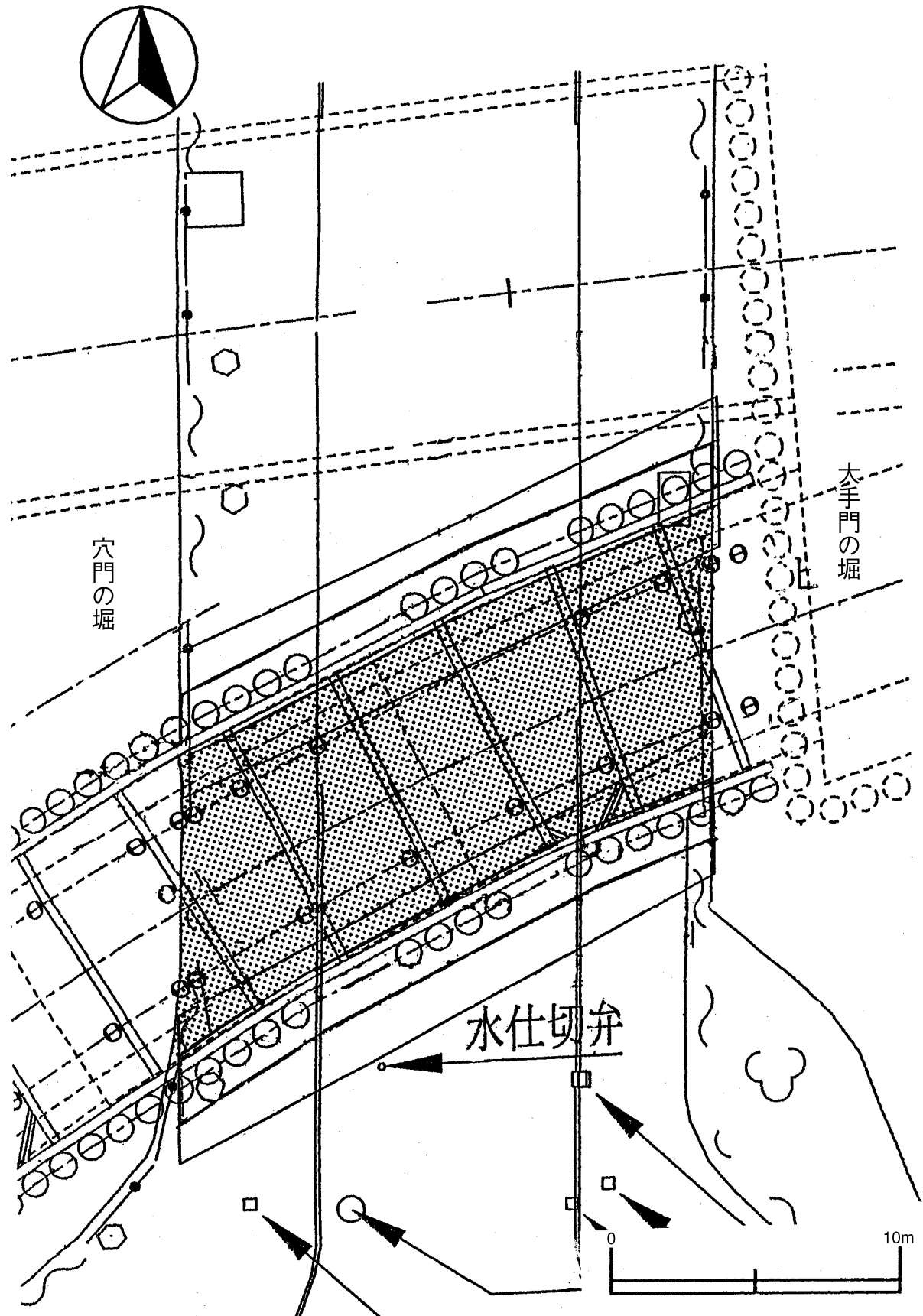
第102図 久保田城跡（中土橋地区）確認調査対象範囲とトレンチ位置図



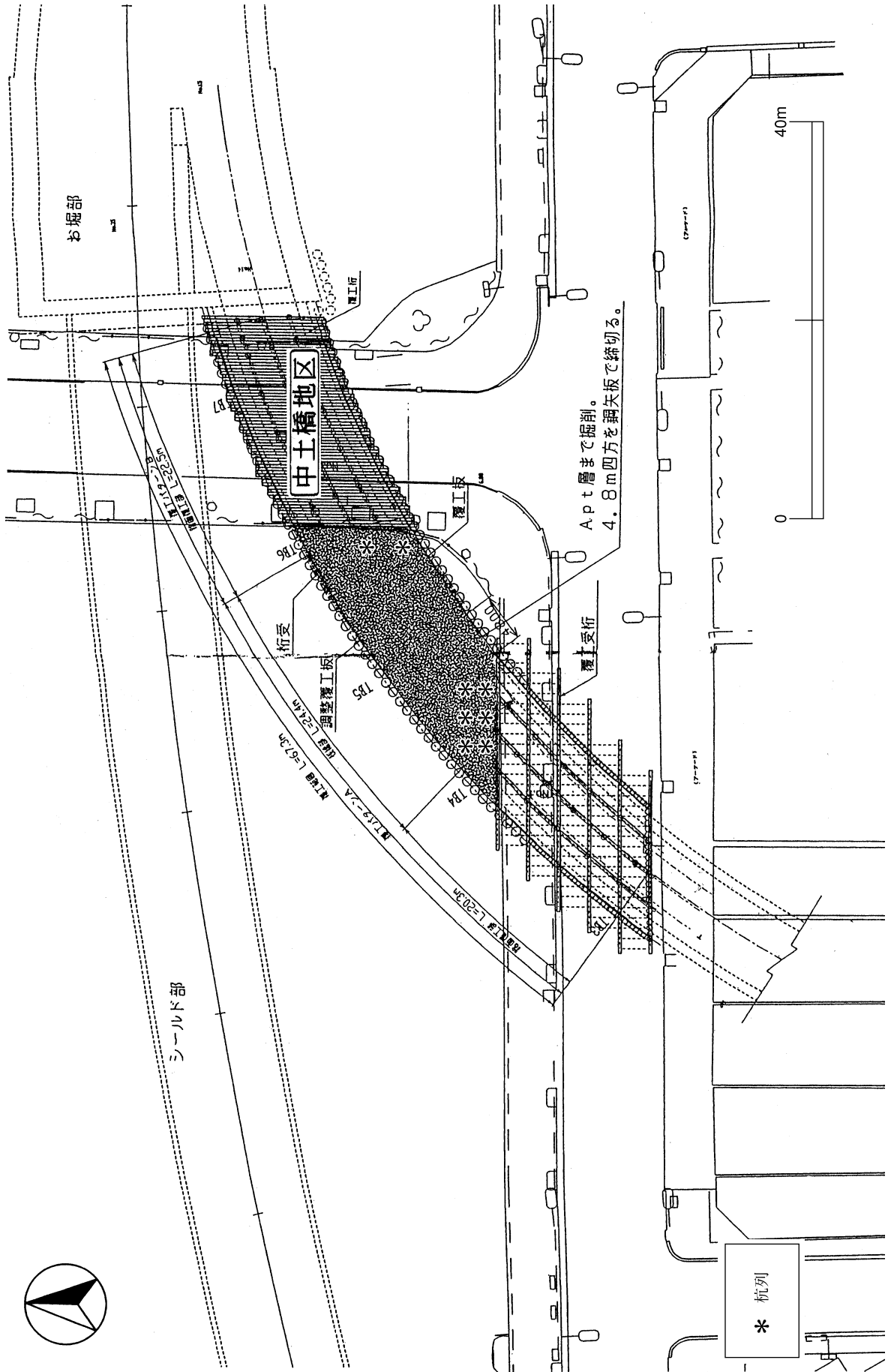
第103図 久保田城跡（中土橋地区）確認調査結果図（遺構検出地点）



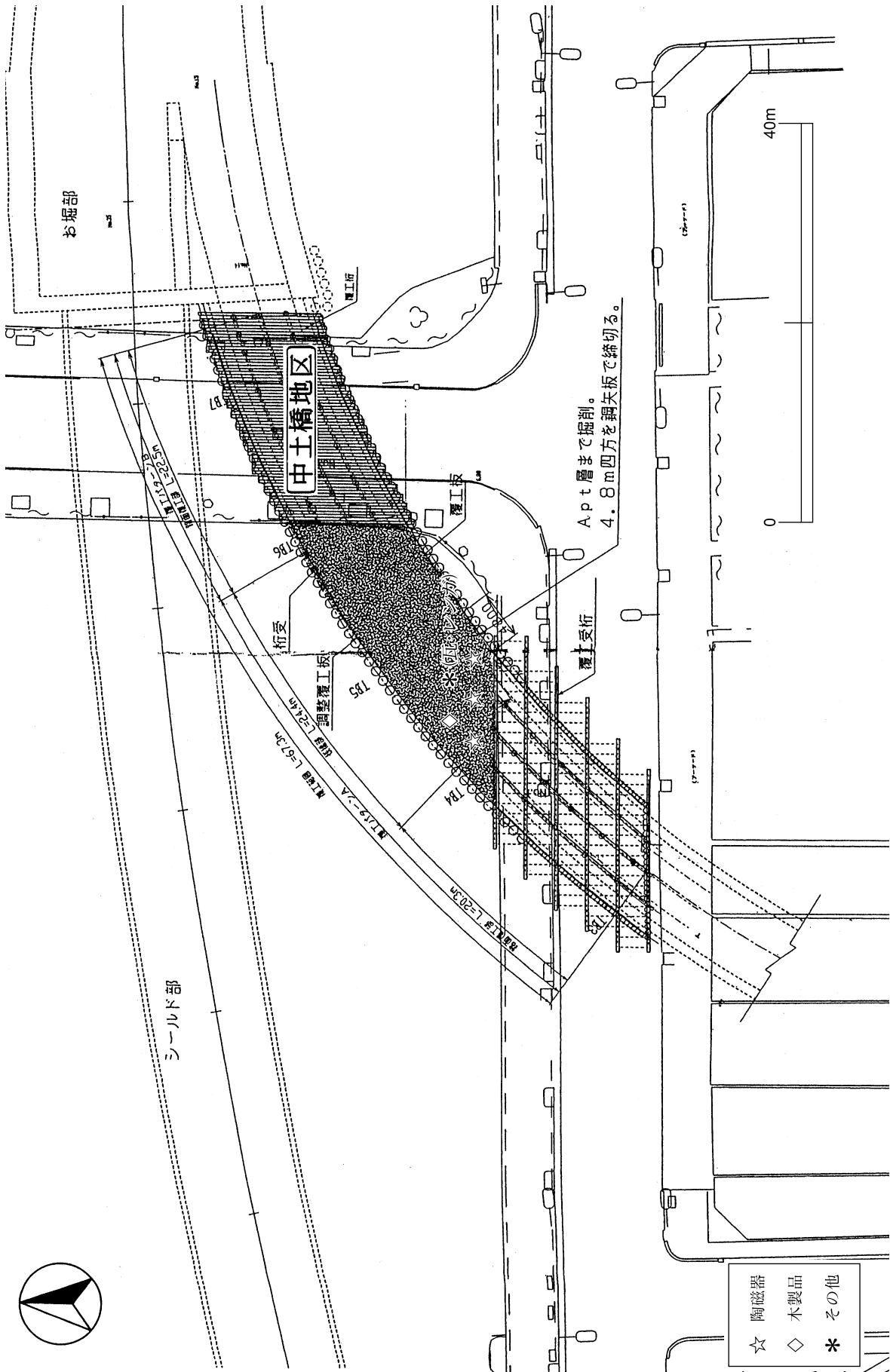
第104図 久保田城跡（中土橋地区）確認調査結果図（遺物出土地点）



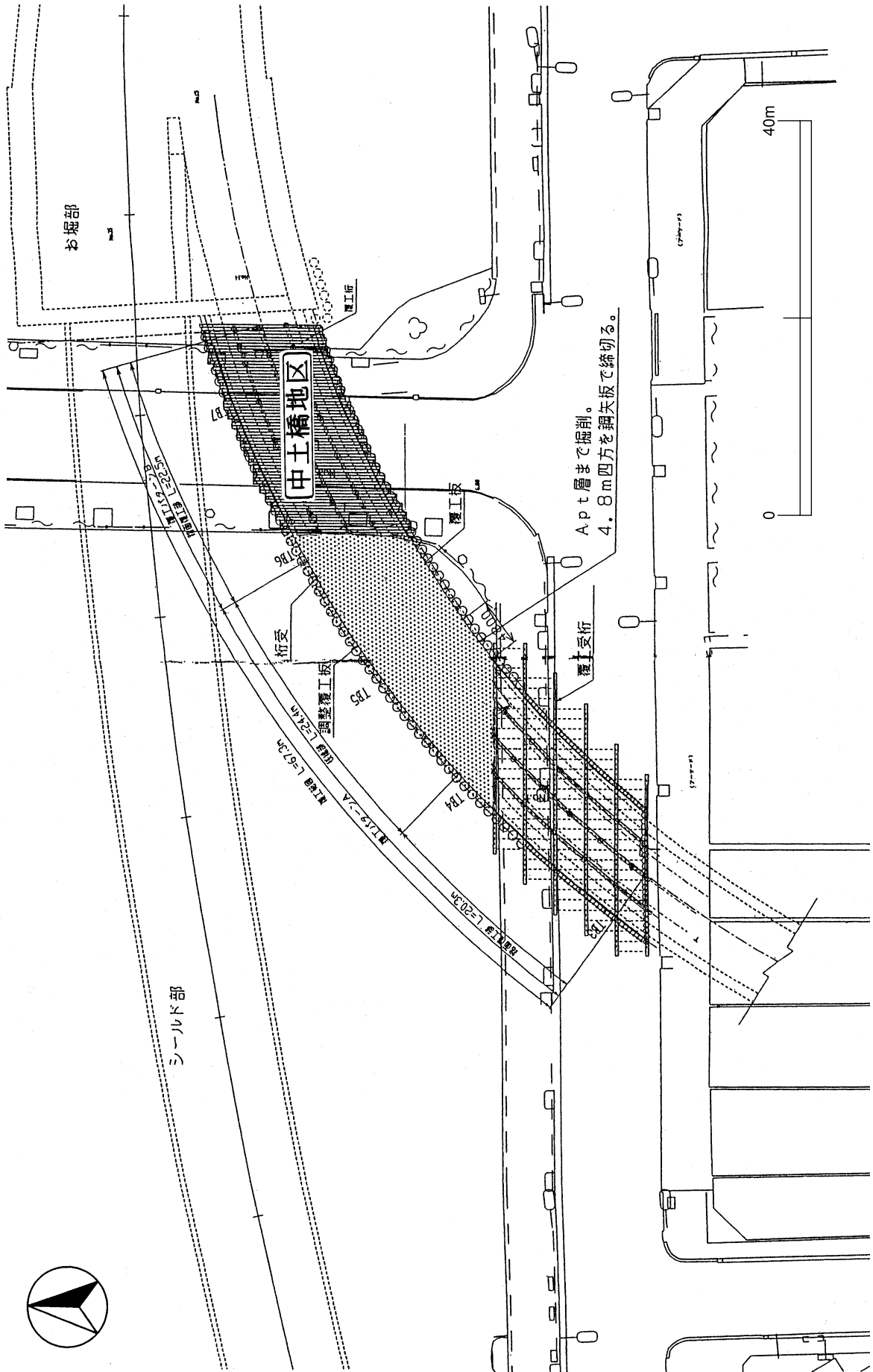
第105図 久保田城跡（中土橋地区）範囲図



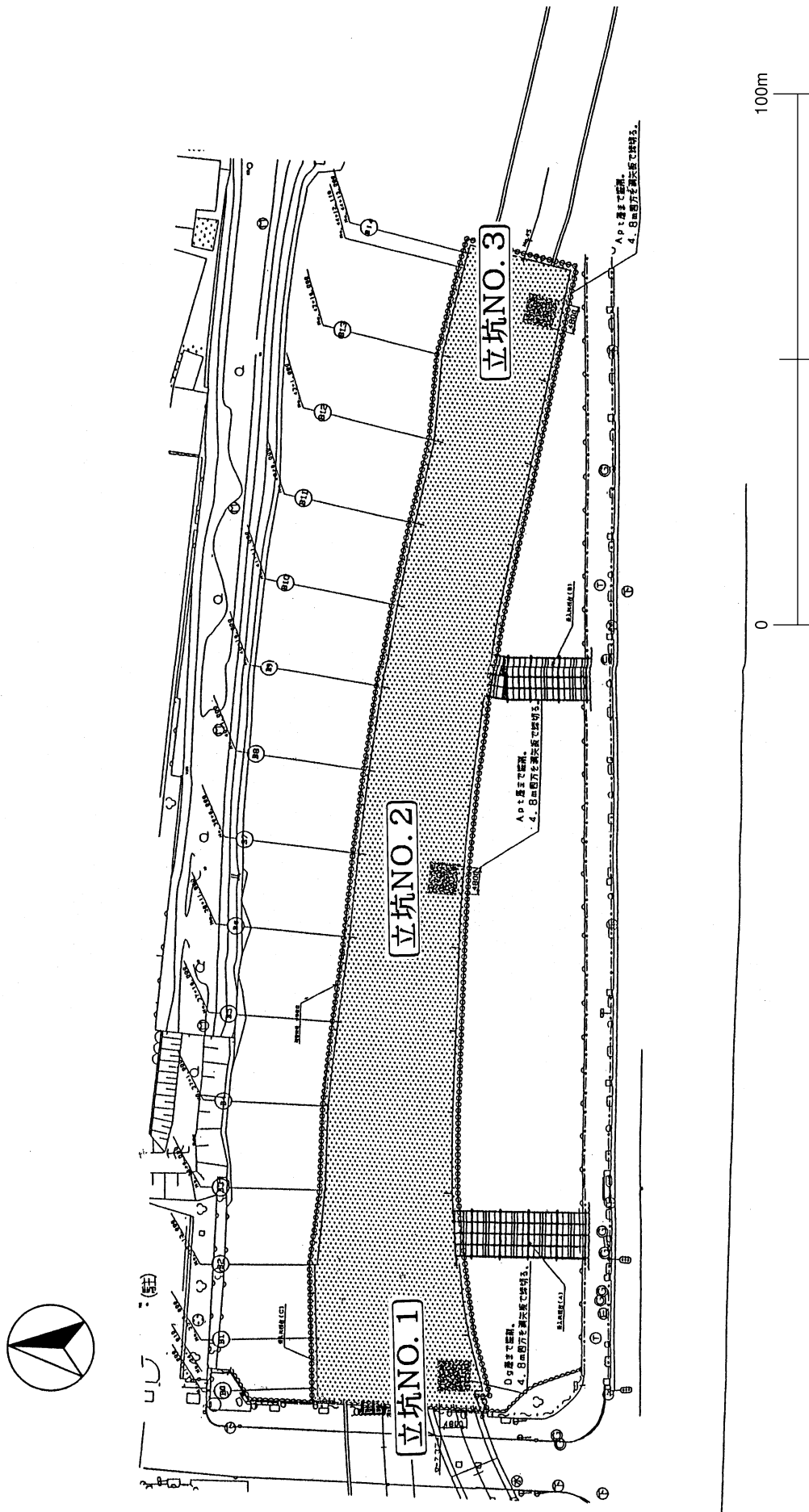
第107図 久保田城跡 (堀地区穴門堀) 確認調査結果図 (遺構検出地点)



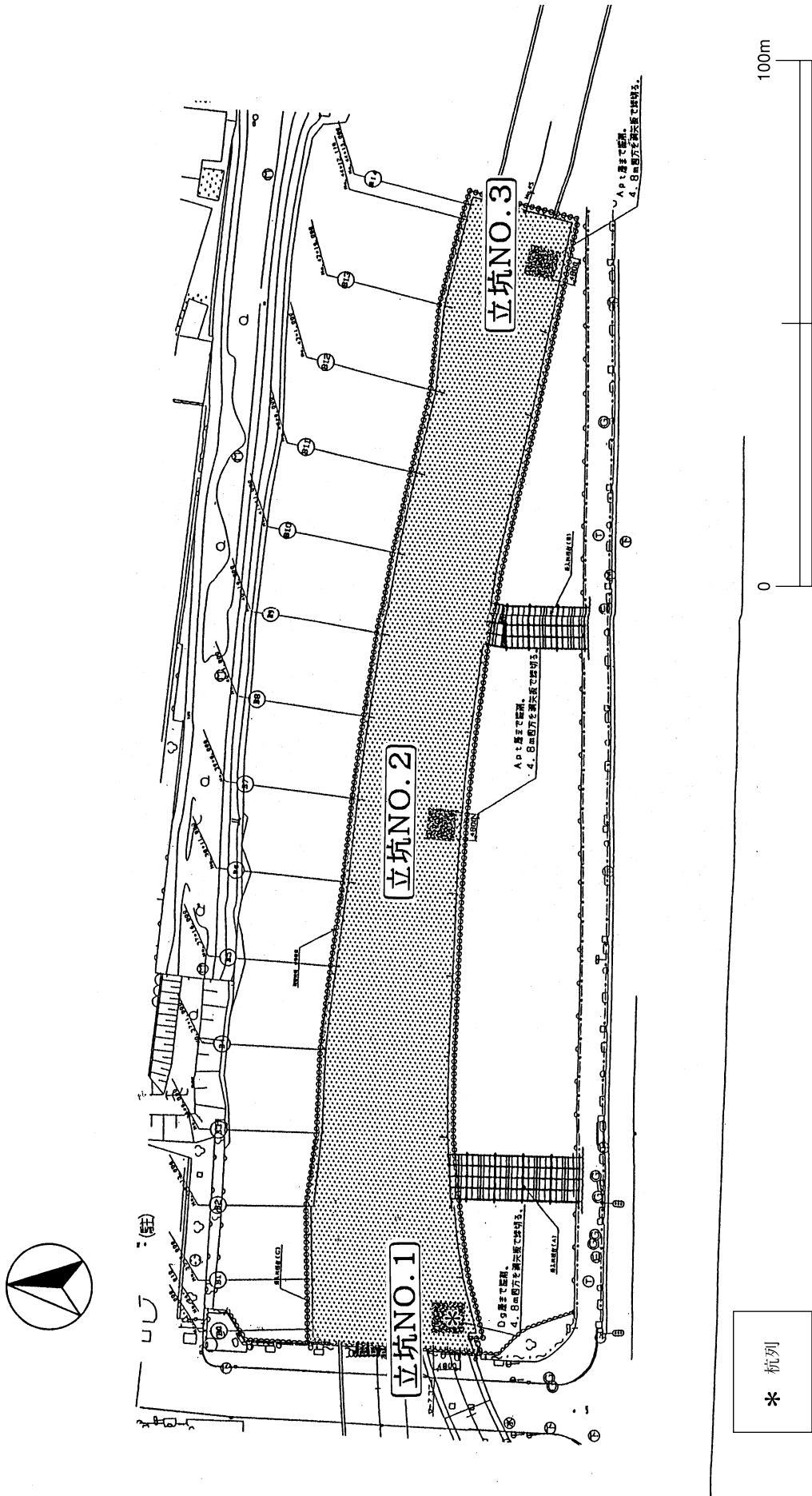
第108図 久保田城跡（堀地区穴門堀）確認調査結果図（遺物出土地点）



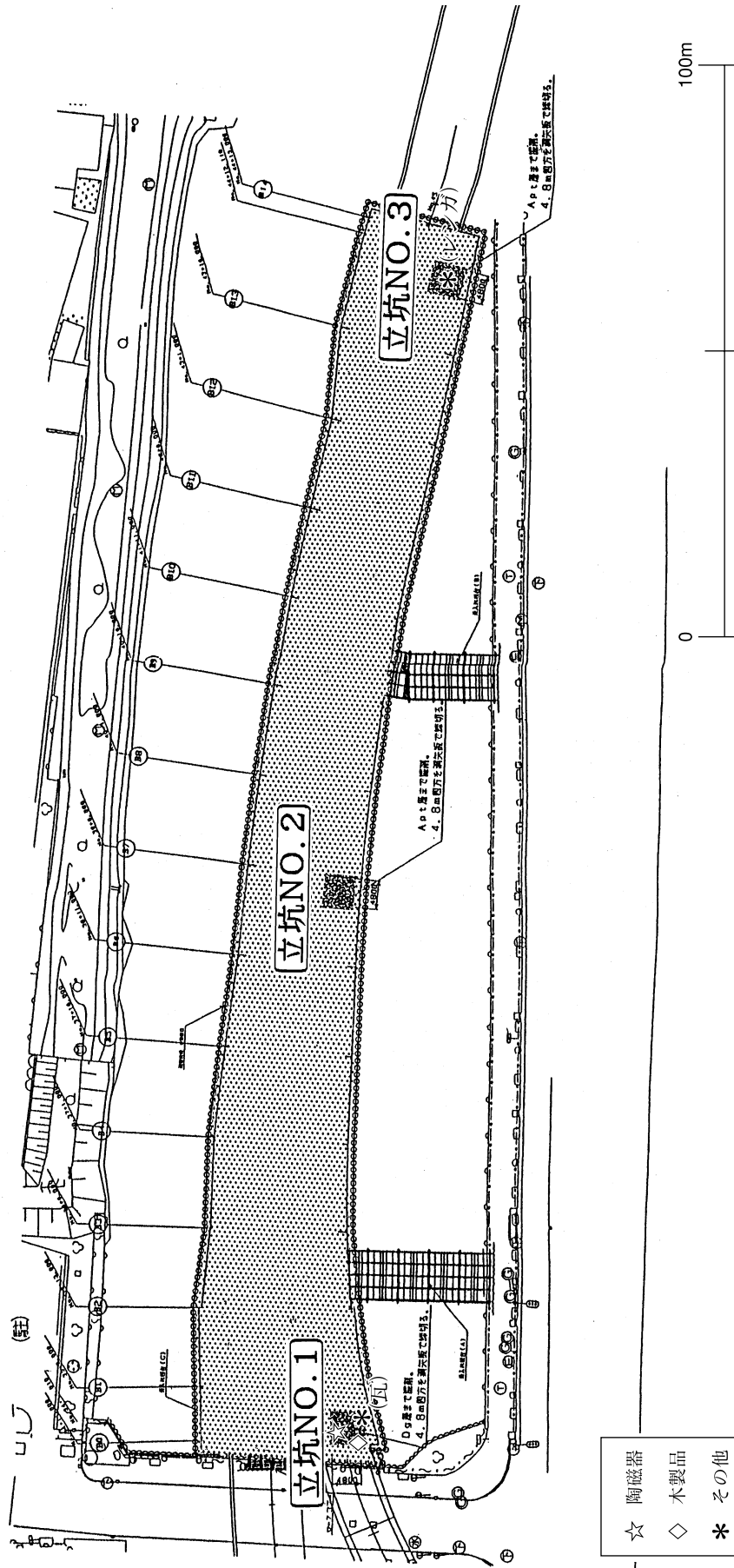
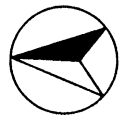
第109図 久保田城跡（堀地区穴門堀）範囲図



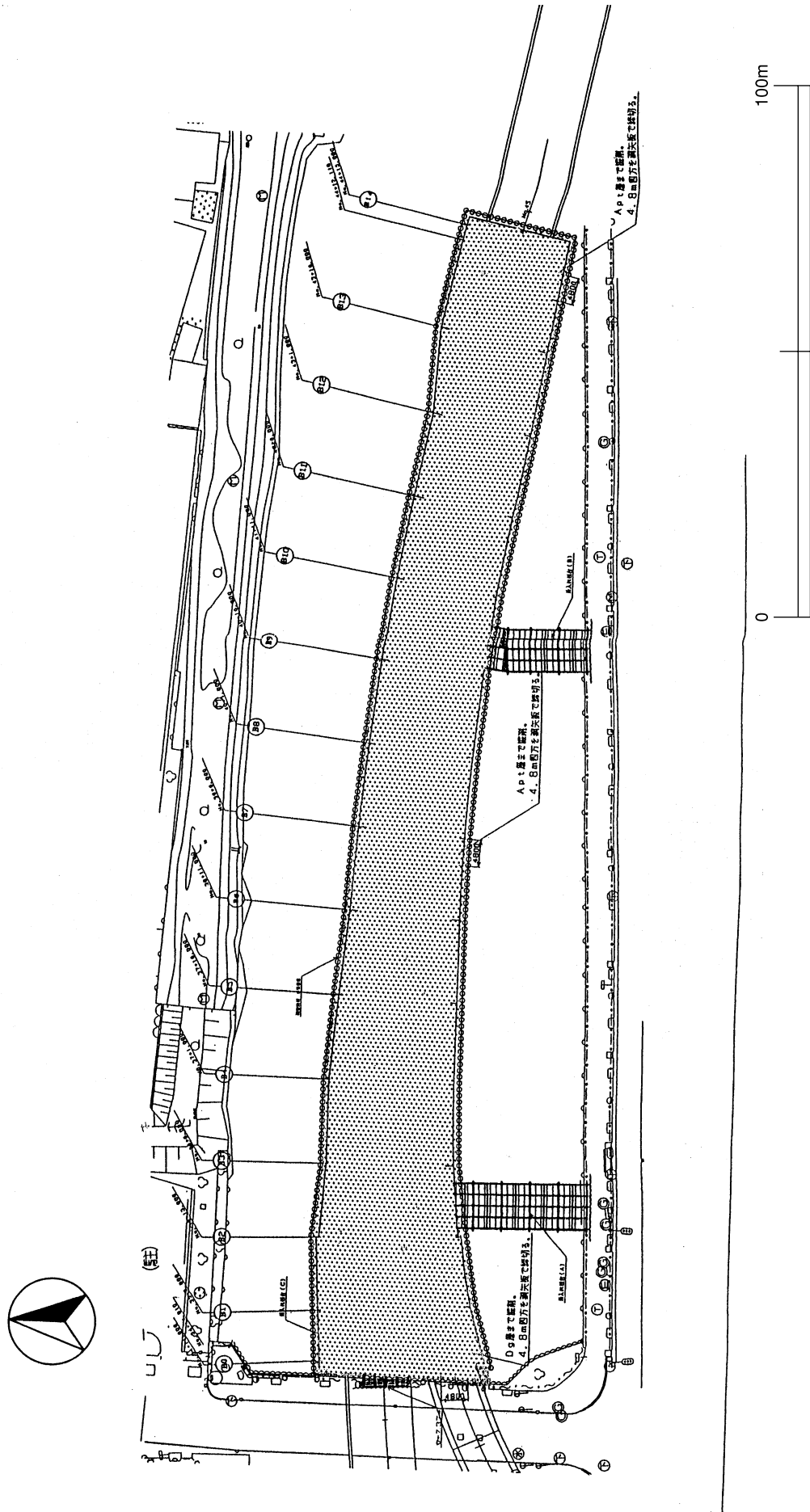
第110図 久保田城跡（堀地区大手門堀）確認調査範囲とトレンチ（立坑）位置図



第111図 久保田城跡（堀地区大手門堀）確認調査結果図（遺構検出地点）



第112図 久保田城跡（堀地区大手門堀）確認調査結果図（遺物出土地点）



第113図 久保田城跡（堀地区大手門堀）範囲図



久保田城中土橋地区
第1トレンチ調査風景
(北東から)



久保田城中土橋地区
第2トレンチ旧中土橋
構築土最上層 (南から)



久保田城中土橋地区
第2トレンチ旧中土橋
西側護岸部 (南西から)

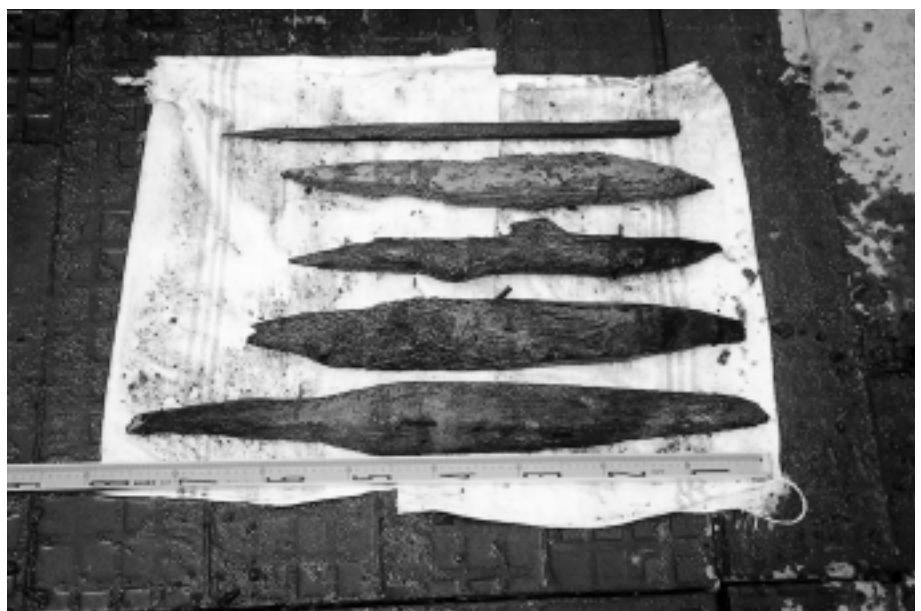
久保田城堀地区
穴門堀調査風景
(西から)



久保田城堀地区
穴門堀護岸下杭列
出土状況 (西から)



久保田城堀地区
穴門堀
出土した木製品





久保田城堀地区
大手門堀調査区全景
(東から)



久保田城堀地区
大手門堀立坑
No.1調査前



久保田城堀地区
大手門堀立坑
No.3作業風景

②^{めいとくかん}明德館跡

- 1 遺跡所在地 秋田市中通1丁目
- 2 確認調査期間 平成14年12月10日～12月12日
- 3 確認調査対象面積 200㎡
- 4 工事区域内遺跡面積 200㎡
- 5 遺跡の立地と現況

a 立地

明德館跡は、秋田駅の西約700mに位置し、秋田低地上に立地する。標高は7m程である。

b 現況

調査地点は、旧交通災害センター及びその駐車場として利用されていた所であり、現在は更地の状態である。

6 確認調査の方法

計画路線内ほぼ中央（幅杭は未設置）を通るようにして、これに並行させてトレンチ1本を設定した。重機による表土除去の後、遺構確認面あるいは地山面を精査して、遺構・遺物の有無を確認した。

確認調査における試掘面積は30㎡であり、対象面積の15.0%に相当する。

7 確認調査の結果

a 層序

遺跡の結果、建物等の造成に伴う基礎工事埋め立て土が地山面にまで及び、近現代の攪乱層（第Ⅰ層）下に地山面が位置する。ただトレンチ南端部では地山直上のスクモ層がごく一部残存する。

第Ⅰ層 近現代の攪乱層（砂利・砕石・コンクリート等混合土、整地層）。層厚60～70cm。

第Ⅱ層 スクモ層（泥炭層、遺物包含層）。層厚10cm前後。

第Ⅲ層 地山（黄褐～青・灰色粘土）遺構確認面

b 検出遺構と出土遺物

削平を受けた地山面上より、溝跡1条、柱穴5本を検出した。溝跡は幅約2mであり、東西方向に延びる。柱穴は径あるいは一辺が20～40cmとなる。

遺物は僅かに残存するスクモ層中より、木製品（箸・木片）が出土した。

8 所見

a 遺跡の種類

掘立柱建物、溝（区画・排水溝）等で構成される江戸時代の城下町遺跡と考えられる。

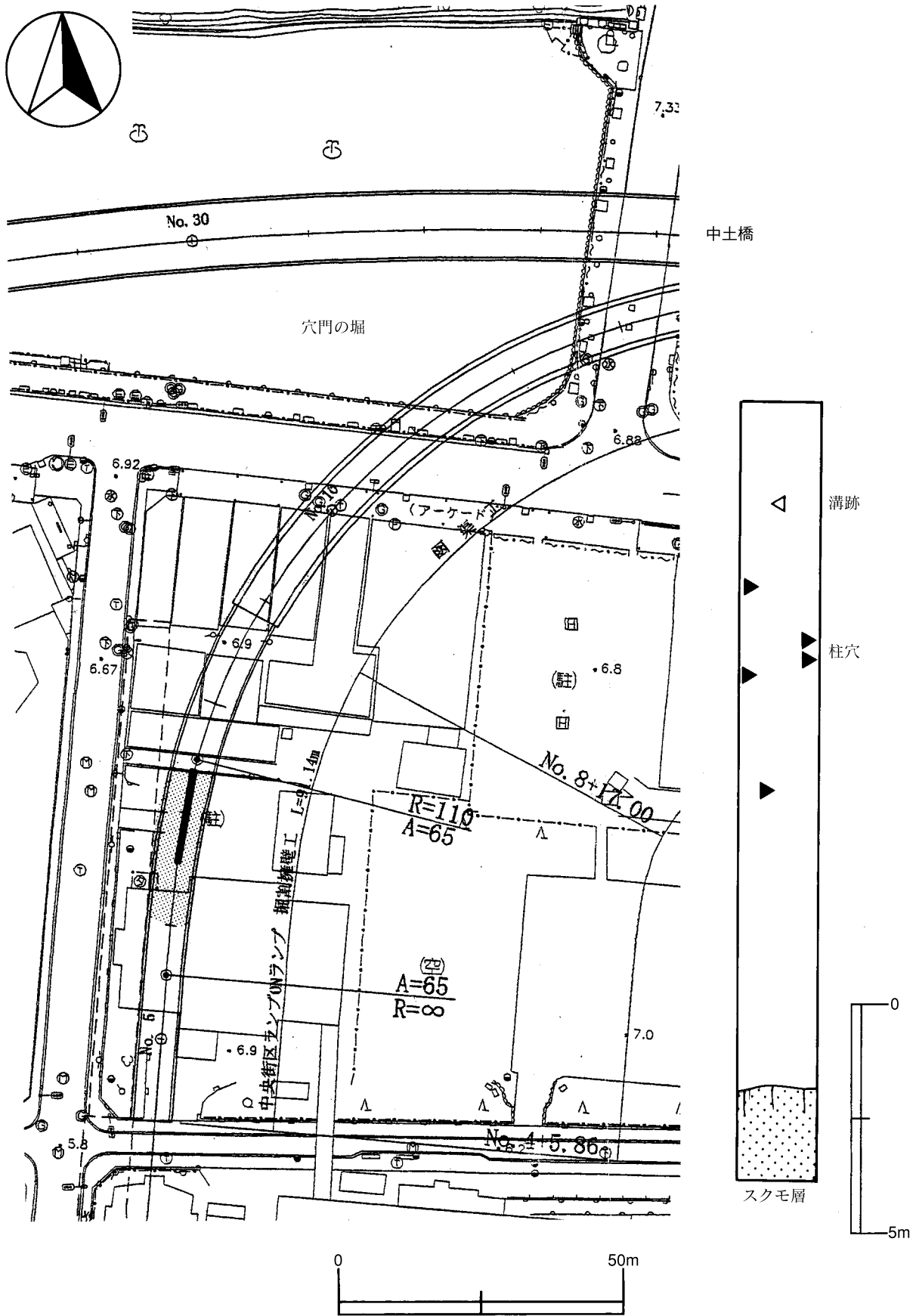
b 遺跡の範囲と工事区域

確認調査の対象となった区域全てが遺跡の範囲と判断される。

c 発掘時に予想される遺構と遺物

本確認調査及び秋田市教育委員会による『藩校明德館跡』の調査成果に基づくと、掘立柱建物跡・井戸跡・板跡・井戸跡・土坑・溝跡等の検出が予想される。また遺物は陶磁器類や木製品等の出土が考えられる。

なお本調査地区は、『御城下絵図』（1849年、秋田市佐竹史料館蔵）によると、藩校明德館敷地内の北西隅部に位置する。

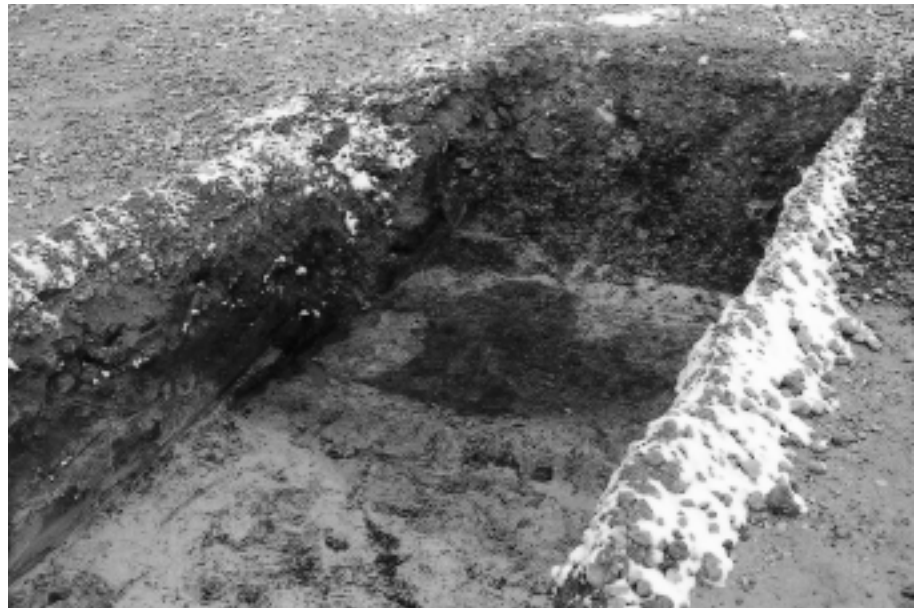


第114図 明德館跡確認調査範囲とトレンチ図

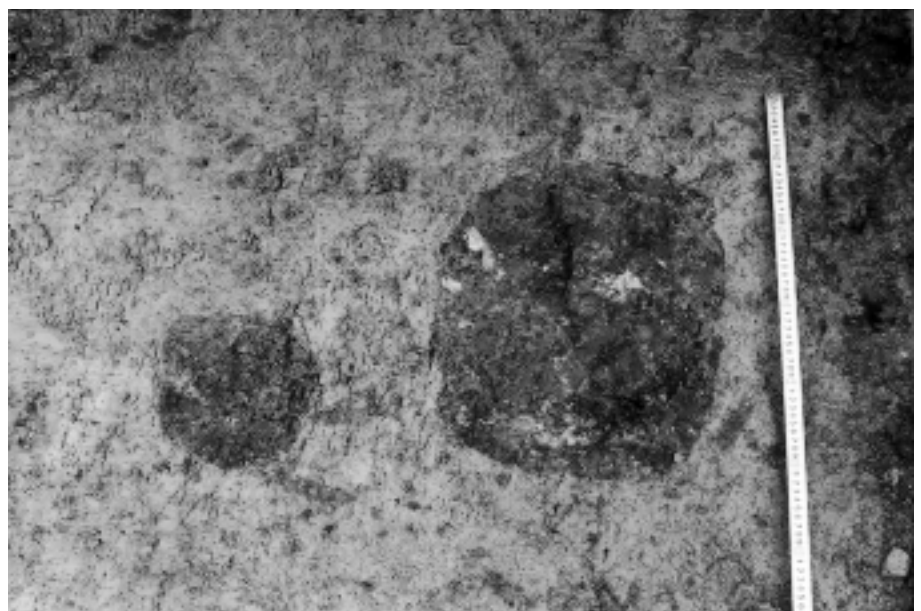
明德館跡
遠景（東から）
（枠内：明德館範囲、
●印：調査地点）



明德館跡
溝跡検出状況
（南から）



明德館跡
柱穴検出状況
（西から）



(4) 秋田県教育・福祉総合施設整備事業

ひがしねごやまち
① 東根小屋町遺跡

- 1 遺跡所在地 秋田市中通2丁目1-52
- 2 確認調査期間 平成14年6月3日～6月14日 (第1次)
平成14年9月17日～9月20日 (第2次)
- 3 確認調査対象面積 2,850㎡
- 4 工事区域内遺跡面積 2,850㎡
- 5 遺跡の立地と現況

a 立地

確認調査対象区は秋田市中通2丁目1番地内に所在し、北緯39° 42' 52"、東経140° 7' 33" に位置する。調査対象範囲は、市道仲小路線と中通牛島線の交差点北東側一画にあたり、旧秋田保健所の敷地とその南側に隣接する駐車場用地からなる。

当地区は秋田市街地の中央部にあたり、東側約600mにはJR秋田駅が、北側約500mには秋田藩主佐竹氏12代の居城である久保田城跡がある。西側約400mには久保田城築城の際に掘り替えられた旭川が雄物川に向かって南流する。遺跡一帯は久保田城下の侍町として知られ、今回の調査区から市道を挟んで西側は、平成12年に藩校明德館跡として秋田市教育委員会により発掘調査が実施されている。

なお遺跡地は地形区分上低地に分類されており、現地表面の標高は6m前後である。

b 現況

調査対象範囲内には、旧秋田保健所の建物や、駐車場用地のアスファルト路盤、さらにこれらを区画するフェンスやブロック塀などがある。

6 確認調査の方法

第1次調査は、旧秋田保健所の敷地と秋田中央道路建設事務所の南側にある駐車場用地を対象に、第2次調査は、旧秋田保健所及び秋田中央道路建設事務所の建物用地内を対象に実施した。

アスファルト路盤、コンクリート路盤は予め重機により撤去し、その後重機と人力を併用して掘削を進めた。遺構確認面が複数存在する地点については、確認した遺構の記録を行った後さらに掘削を進め、最下位の遺構確認面で精査を実施した。また数箇所でもトレンチ壁面の精査を行い、各地点での土の堆積状況を観察・記録し、遺跡内における層位の対応関係を検討した。

調査の結果、遺構と認めた部分についてはその性格の確認に努め、平面図作成および写真撮影により記録した。出土した遺物はトレンチ番号・出土地点・層位を記録した。

実質調査面積は218.6㎡で、調査対象面積の7.7%に相当する。

7 確認調査の結果

a 層序

遺跡の層序は地点により大きく異なっているため、各トレンチでの観察結果を下に記す。なお土層断面を観察した位置は第116図中に▼のシンボルマークで示してある。

①第1トレンチ北端部における層序は下記のとおりである。

第1層 アスファルト・砂利からなる現代の路盤。層厚40～60cm。

- 第2層 黒褐色土 (2.5Y 3/2)。オリブ色粘土粒少量混入。層厚40～50cm。
- 第3層 灰オリブ粘土 (5Y 4/2)。炭化物粒・オリブ色粘土粒・礫少量混入。層厚0～10cm。
- 第4層 黒褐色土 (10YR 3/1)。炭化物粒・オリブ色粘土粒・礫少量混入。層厚10～20cm。
- 第5層 黒褐色粘土 (10YR 2/2)。腐植少量・オリブ色粘土塊多量混入。層厚70～80cm。
- 第6層 灰色粘土 (7.5Y 4/1)。腐植少量混入。層厚20～30cm。
- 第7層 黒褐色土 (2.5Y 3/2)。腐植少量混入。層厚10～15cm。
- 第8層 黒褐色土 (10YR 2/2)。腐植多量混入。層厚20cm以上。

⑥第2トレンチ中央部における層序は下記のとおりである。

- 第1層 アスファルト・砂利からなる現代の路盤。層厚20～40cm。
- 第2層 黒色土 (10YR 2/1)。礫少量混入。層厚10～20cm。
- 第3層 オリブ黒色土 (5Y 3/2)。礫少量混入。層厚5～10cm。
- 第4層 黒褐色土 (2.5Y 3/2)。オリブ色粘土粒少量混入。層厚35～40cm。
- 第5層 灰オリブ粘土 (5Y 4/2)。炭化物粒・オリブ色粘土粒・礫少量混入。層厚10～20cm。
- 第6層 黒褐色土 (10YR 3/1)。炭化物粒・オリブ色粘土粒・礫少量混入。層厚25～40cm。
- 第7層 黒褐色粘土 (10YR 2/2)。腐植少量・オリブ色粘土塊少量混入。層厚5～15cm。
- 第8層 黒色粘土 (5Y 2/1)。層厚10～15cm。
- 第9層 黒褐色粘土 (2.5Y 3/2)。層厚15～20cm。
- 第10層 黒褐色土 (10YR 2/2)。腐植多量混入。層厚20cm以上。

⑦第3トレンチ北端部における層序は下記のとおりである。なおこのトレンチについては、大部分に近現代の攪乱 (2～6層) が入るため、他トレンチと対応する層は少ない。

- 第1層 アスファルト・砂利からなる現代の路盤。層厚35～45cm。
- 第2層 暗青灰色砂質土 (5BG 4/1)。礫多量混入。層厚15～20cm。
- 第3層 黒褐色土 (2.5Y 3/1)。礫多量混入。層厚10～20cm。
- 第4層 暗緑灰色砂質土 (7.5GY 4/1)。近現代の遺物少量混入。層厚20～35cm。
- 第5層 黒色土 (5Y 2/1)。近現代の遺物少量・礫多量混入。層厚30～40cm。
- 第6層 暗オリブ灰色粘土 (2.5GY 4/1)。層厚25～40cm。
- 第7層 極暗褐色粘土 (7.5YR 2/3)。腐植多量混入。層厚20cm以上。

⑧第4トレンチ中央部における層序は下記のとおりである。

- 第1層 アスファルト・砂利からなる現代の路盤。層厚30～45cm。
- 第2層 黒色土 (10YR 2/1)。礫少量混入。層厚10～20cm。
- 第3層 オリブ黒色粘土 (5Y 3/1)。層厚15～20cm。
- 第4層 黒褐色土 (10YR 3/1)。炭化物粒少量・礫少量混入。層厚5～10cm。
- 第5層 暗緑灰色粘土 (10GY 4/1)。礫少量混入。層厚5～20cm。
- 第6層 黒褐色土 (2.5YR 3/1)。礫少量混入。層厚5～15cm。
- 第7層 暗オリブ灰色粘土 (2.5GY 4/1) 礫少量・オリブ色粘土塊多量混入。層厚20～30cm。
- 第8層 暗オリブ灰色土 (5GY 4/1)。礫少量、粗砂少量混入。層厚20～30cm。
- 第9層 遺構覆土。金属製品・木製品等混入。層厚35～50cm。

第3章 調査の記録

第10層 極暗褐色粘土 (7.5YR 2/3)。腐植多量混入。層厚20cm以上。

㊦第5トレンチ中央部における層序は下記のとおりである。

第1層 アスファルト・砂・砂利などからなる現代の路盤。層厚20～25cm。

第2層 砂・砂利からなる現存する建物を建築する際の造成土。層厚35～40cm。

第3層 暗オリーブ粘土 (5Y 4/3)。オリーブ色粘土塊・礫少量混入。層厚20～25cm。

第4層 黒褐色土 (10YR 3/1)。層厚約20cm。

第5層 灰オリーブ粘土 (5Y 4/2)。層厚約20cm。

第6層 黒褐色土 (10YR 3/1)。層厚5～10cm。

第7層 遺構覆土。木製品、板材等混入。層厚10cm以上。

㊧第6トレンチ中央部における層序は下記のとおりである。

第1層 コンクリート・砂・砂利からなる建物及び、建物建築の際の基盤。層厚35～45cm。

第2層 暗緑灰砂質土 (7.5GY 4/1)。礫少量混入。層厚30～35cm。

第3層 灰オリーブ粘土 (5Y 4/2)。炭化物粒・礫・板材少量混入。層厚50～55cm。

第4層 黒色土 (5Y 2/1)。オリーブ色粘土粒少量混入。層厚15～20cm。

第5層 暗緑灰色粘土 (10GY 4/1)。腐植少量混入。層厚10～15cm。

第6層 黒褐色土 (2.5Y 3/1)。層厚10～15cm。

第7層 黒色粘土 (5Y 2/1)。層厚約10cm。

第8層 極暗褐色粘土 (7.5YR 2/3)。腐植多量混入。層厚20cm以上。

㊨第7トレンチ中央部における層序は下記のとおりである。なおこのトレンチについては、各種配管の埋設が多く見られること、建物に接していることから、確かな確認をするには至らなかった。

第1層 アスファルト・砂利からなる現代の路盤。層厚20～40cm。

第2層 オリーブ灰砂質土 (2.5GY 5/1)。建物の基礎工事に伴う造成土。層厚120cm以上。

各トレンチの土層を観察し、その特徴を検討した結果、現時点では以下のような層位の対応関係をもつものと判断し、これを遺跡の基本層序として捉えておく。

第Ⅰ層 保健所及び駐車場用地の造成に伴う現代の路盤。層厚20～60cm。

(対応する層位：第1～7トレンチ1層)

第Ⅱ層 明治時代以降の遺物を伴う黒～黒褐色土。炭化物を特徴的に含む。層厚5～50cm。

(対応する層位：第1トレンチ2層、第2トレンチ4層、第4トレンチ6層)

第Ⅲ層 明治時代以降の造成と判断される暗オリーブ～灰オリーブ色粘土。層厚0～40cm。

(対応する層位：第1トレンチ3層、第2トレンチ5層、第3トレンチ6層、第4トレンチ7層、第5トレンチ3層、第6トレンチ3層)

第Ⅳ層 江戸時代の造成と判断される黒褐色～暗オリーブ色土。層厚10～40cm。

(対応する層位：第1トレンチ4層、第2トレンチ6層、第4トレンチ8層、第5トレンチ4層、第6トレンチ4層)

第Ⅴ層 腐植混じり粘土に粘土塊が混入する黒～黒褐色粘土。層厚5～70cm。

(対応する層位：第1トレンチ5層、第2トレンチ7層、第5トレンチ5層、第6トレンチ5層)

第Ⅴ層 腐植が少量混入する灰色～黒色粘土。自然堆積層。層厚25～45cm。

(対応する層位：第1トレンチ6・7層、第2トレンチ8・9層、第5トレンチ6層、第6トレンチ6・7層)

第Ⅳ層 腐植が多量混入する極暗褐色～黒褐色粘土。いわゆるスクモ層。自然堆積層。

(対応する層位：第1トレンチ8層、第2トレンチ10層、第3トレンチ7層、第4トレンチ10層、第6トレンチ8層)

b 検出遺構と出土遺物

各トレンチにおける検出遺構は以下のとおりである。なお遺構検出は基本的に上記の第Ⅲ層及び第Ⅳ層上面で行い、場所により第Ⅴ層上面でも行った。

第1トレンチ：江戸時代の井戸跡1基、明治時代の柱穴2基・溝跡3基・井戸跡2基・土坑2基を確認した。

第2トレンチ：江戸時代の溝跡1条、明治時代の柱列2条、帰属時期不明の柱列2条を確認した。

第3トレンチでは大部分で近現代の攪乱を受けており、遺構は確認されなかった。

第4トレンチ：江戸時代の柱穴18基・土坑3基、明治時代の柱穴6基・性格不明遺構1基を確認した。

第5トレンチ：江戸時代の溝跡1条・柱穴2基、明治時代の溝跡1条・柱列1条を確認した。

第6トレンチ：江戸時代の柱列1条・柱穴1基・性格不明遺構1基、明治時代の性格不明遺構1基を確認した。

第7トレンチでは全体にわたり現代の攪乱を受けており、遺構は確認されなかった。

遺物は第Ⅳ層から出土する江戸時代の磁器・陶器・土器が量・種類ともに豊富で、中コンテナ換算で8箱出土している。これら陶磁器類の中でも、特に18世紀前半代に帰属するものがやや多く見受けられる。これに加え、江戸時代の所産と考えられる曲物や下駄などの木製品、柱列・溝跡・井戸跡などに遺存する木製部材が中コンテナ換算で8箱出土し、さらにキセルや銭貨などの金属製品、貝や骨などの動物遺体、クルミやモモなどの種実遺体が少量出土している。

8 所見

a 遺跡の種類

江戸時代の城下町であり、明治時代以降も継続的に建物群が形成されたと考える。

b 遺跡の範囲と工事区域

今回の調査では旧秋田保健所に伴う建造物が現存していたため、試掘の範囲と面積は限られているが、少なくともトレンチを設定した地区においては、江戸時代から明治時代の遺構が確認された。建造物直下の状況について現状では把握し得ないものの、本遺跡を含めた周辺地域は、江戸時代に久保田城下の侍町であったことが明らかであり、工事区域全体が調査対象範囲になるものと考えられる。

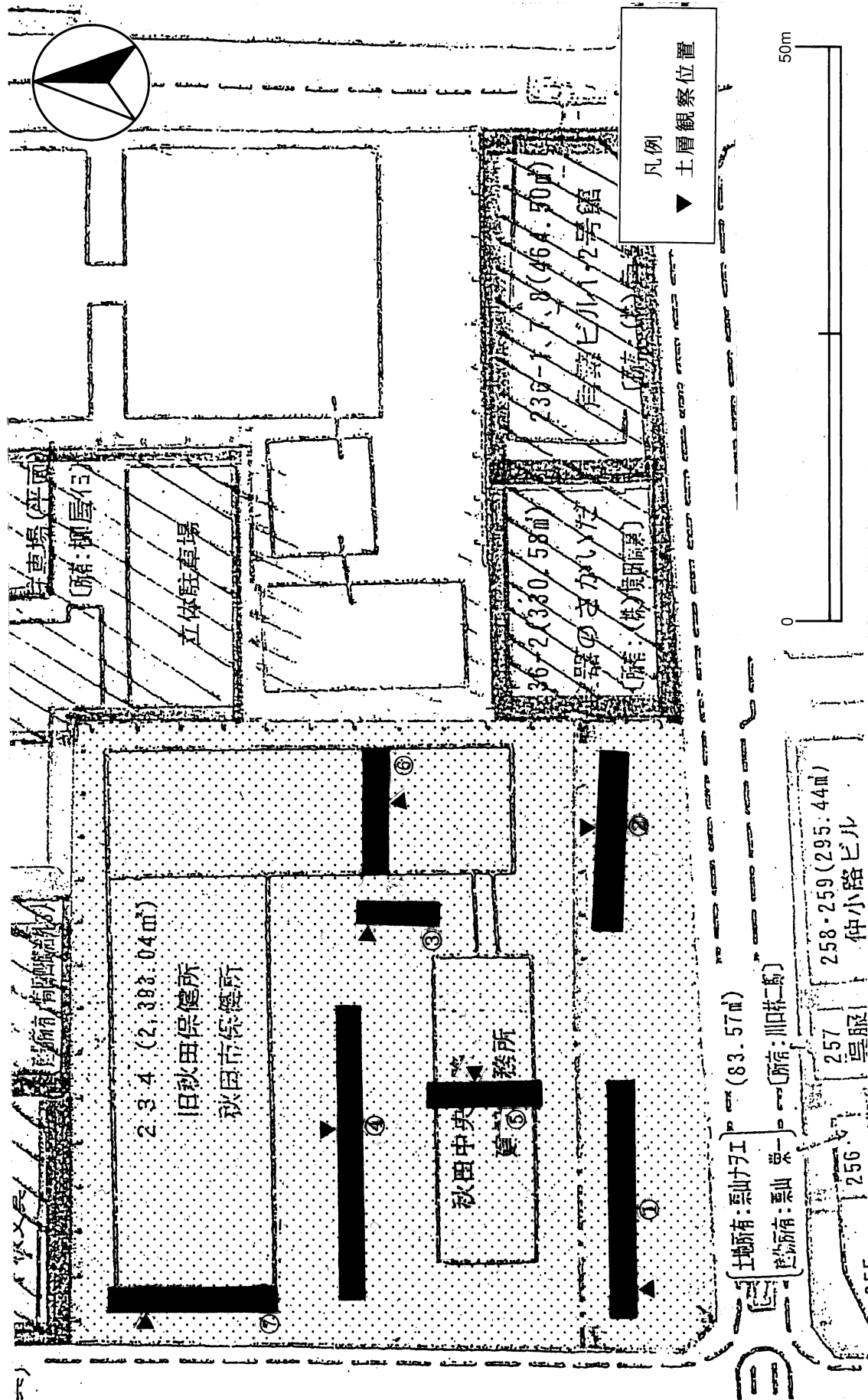
c 発掘調査に予想される遺構と遺物

遺構は江戸時代もしくは明治時代と考えられる掘立柱建物跡・柱列・柱穴・溝跡・井戸跡・土坑などが多数検出されるものと予想される。

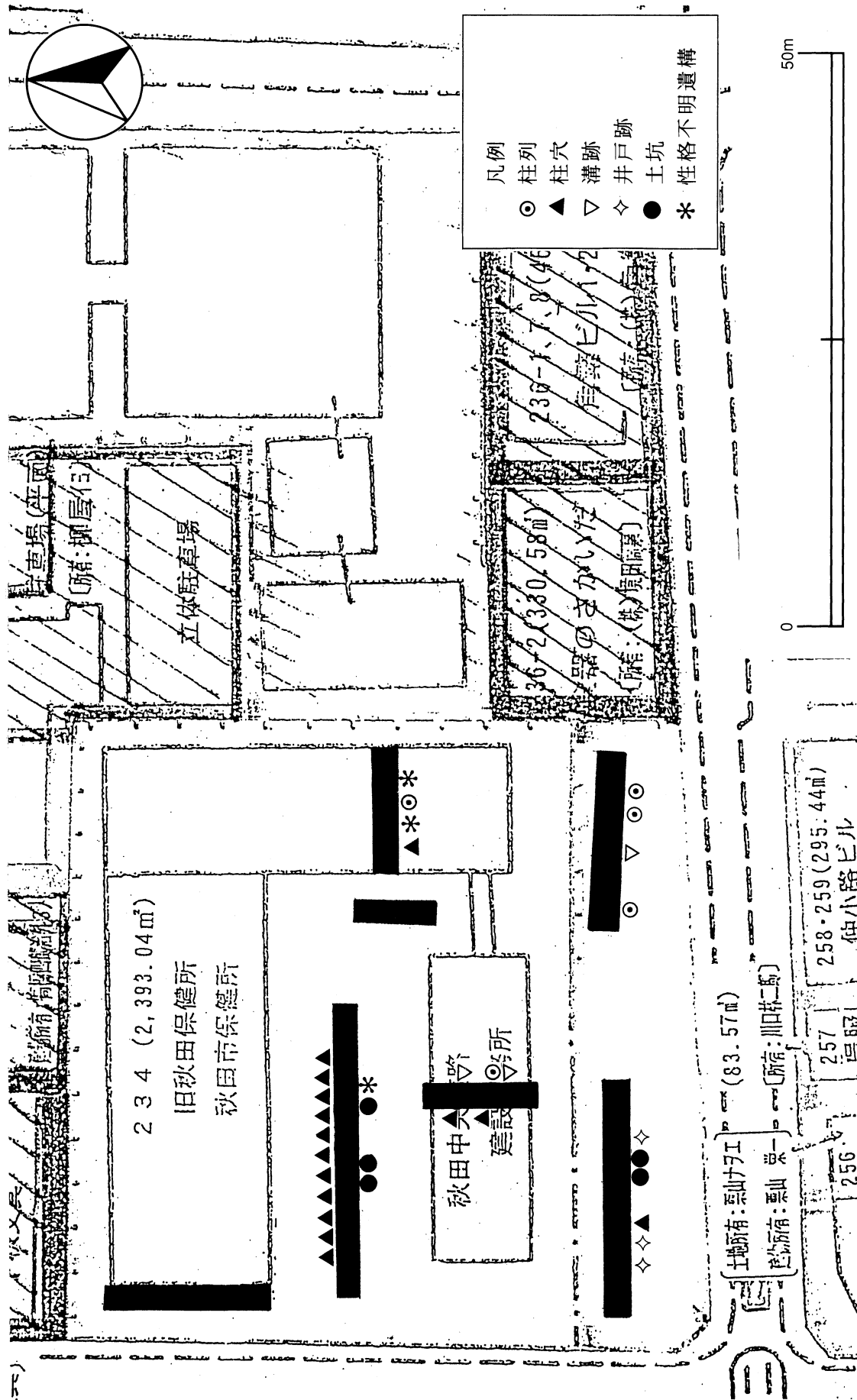
遺物は磁器・陶器・土器・木製品・木製部材・金属製品・動物遺体・種実遺体など多岐にわたり、特に江戸時代の陶磁器類・木製部材は多量に出土するものと予想される。



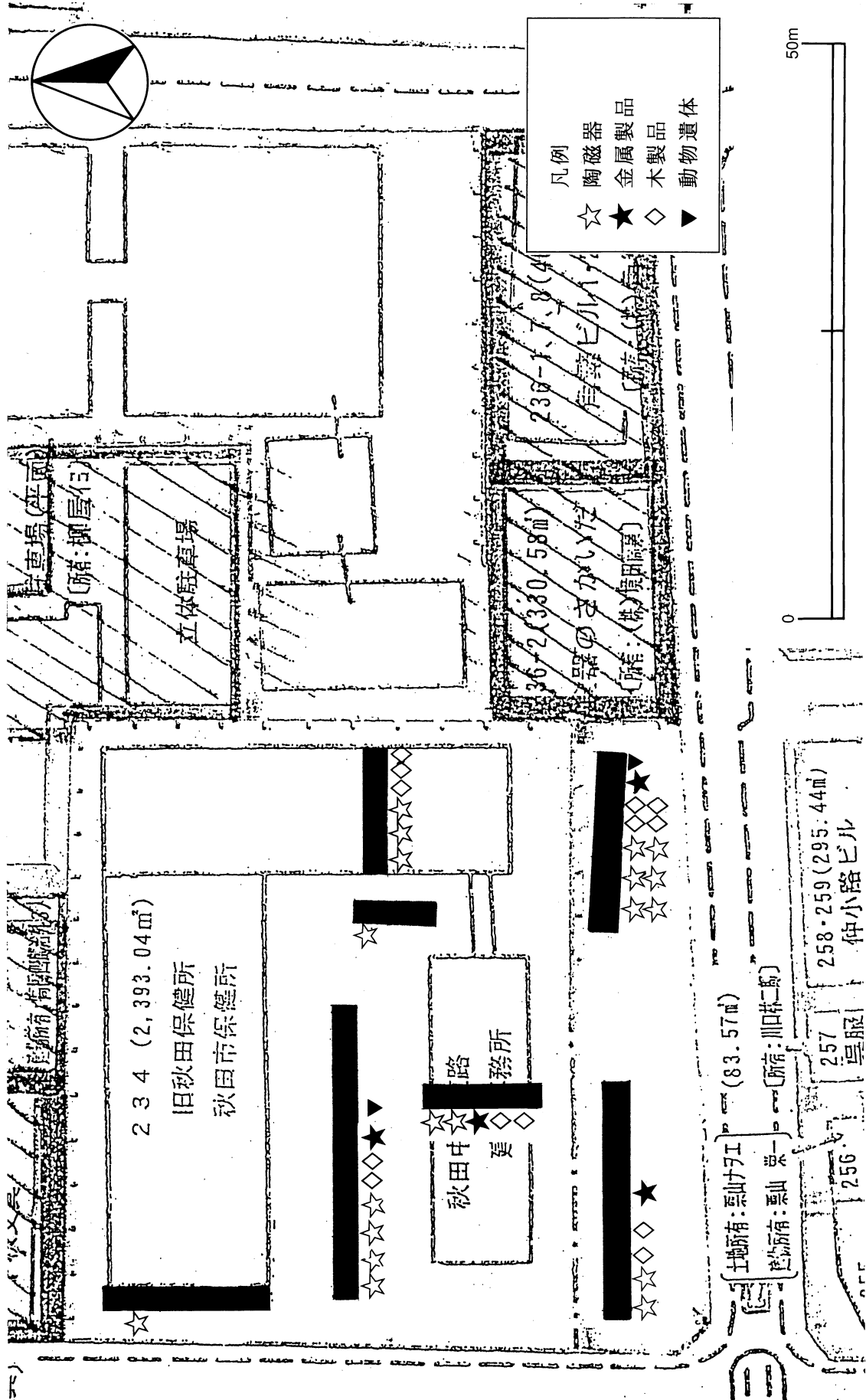
第115図 東根小屋町遺跡位置図



第116図 東根小屋町遺跡確認調査範囲とトレンチ位置図



第117図 東根小屋町遺跡確認調査結果図 (遺構検出地点)



第118図 東根小屋町遺跡確認調査結果図 (遺物出土地点)

東根小屋町遺跡
第1トレンチ
遺構確認状況（東から）



東根小屋町遺跡
第2トレンチ
遺構確認状況（東から）



東根小屋町遺跡
第4トレンチ
遺構確認状況（西から）





東根小屋町遺跡
第5トレンチ
遺構確認状況（南から）



東根小屋町遺跡
第6トレンチ
調査状況（西から）



東根小屋町遺跡
第7トレンチ
調査状況（北から）

(5) 県道秋田岩見船岡線建設事業

① 繫沢遺跡

- | | |
|-------------|--------------------|
| 1 遺跡所在地 | 河辺郡河辺町三内字繫沢159番地 |
| 2 確認調査期間 | 平成14年10月30日～11月15日 |
| 3 確認調査対象面積 | 2,600㎡ |
| 4 工事区域内遺跡面積 | 2,460㎡ |
| 5 遺跡の立地と現況 | |

a 立地

繫沢遺跡は河辺町西側の三内地区にあり、J R 奥羽本線大張野駅の北約6km、国道13号線から北約7kmに位置する。遺跡の北西約1kmには岩見ダムがあり、岩見川およびその支流が北東から南西に流れている。遺跡は台地の東側先端部に位置し、標高は約80mで南東に向かって緩やかに傾斜している。

本遺跡の北側には野田館・白岩館、南には長者館・館ヶ沢・道山館・岩見館などの中世の館跡や飛沢・鍛冶屋敷などの経塚がある。また、縄文から古代にかけての遺物包含地が点在している。

b 現況

全域が荒撫地で、以前は牧場・果樹園として利用されていた。

6 調査の方法

計画路線の幅杭を結ぶ東西方向（第①～⑦トレンチ）とこれにほぼ直交する南北方向（第⑧～⑳トレンチ）に、1m幅のトレンチを20本設定した。重機による表土除去を行った後に人力でトレンチを掘り進め、遺構・遺物の密な区域ではトレンチの拡張を行い遺構の広がりを確認した。実質調査面積は361㎡で、調査対象面積の13.9%にあたる。

調査の結果、遺構と認められた部分についてはその種別を確認するように努め、平面図作成および写真撮影により記録した。出土した遺物にはトレンチ名と出土地点を付し、位置を記録した。

7 範囲確認調査の結果

a 層序

遺跡の層序は、以下の通りである。

- 第Ⅰ層 黒褐色土 (10YR 3/1)。表土層。層厚10～15cm。
- 第Ⅱ層 褐色土 (10YR 4/4)。漸移層。遺構確認面。層厚0～5cm。
- 第Ⅲ層 黄褐色土 (10YR 5/6)。地山。層厚10～30cm。
- 第Ⅳ層 灰白色土 (2.5Y 8/2)。基盤層。シルト質土。層厚40～50cm。
- 第Ⅴ層 浅黄色土 (2.5Y 7/3)。砂質土。

調査区内における各層序は上記のとおりである。調査区全体が、近年の牧畜や果樹栽培の際に削平を受けているため、第Ⅰ・Ⅱ層の堆積は薄い。また、調査区西側中央部の深掘りでは、約1.3mの深さで、礫層の上面に達した。

b 検出遺構と出土遺物

遺構・遺物の広がり、は、宅地造成による削平を受けた北端の地域を除くほぼ全域で確認された。検出された遺構は、縄文時代中期の竪穴住居跡2軒、縄文時代後期の土器埋設遺構1基、縄文時代の焼

第3章 調査の記録

土遺構1基、溝跡8条、土坑7基、陥し穴1基、時代不明の掘立柱建物跡1棟、炭窯跡1基である。

⑧トレンチで検出された竪穴住居跡からは、石囲炉が良好な状態で検出されている。また、その東側約1mにも石囲炉を確認しており、住居跡が重複していることもわかった。

遺物は、竪穴住居跡が検出された区域を中心に、第Ⅱ・Ⅲ層の直上で、縄文時代中期の土器（円筒上層式）や石器などの石器が出土した。

8 所見

a 遺跡の種類

縄文時代中期の集落跡と後期の墓域と推定される。

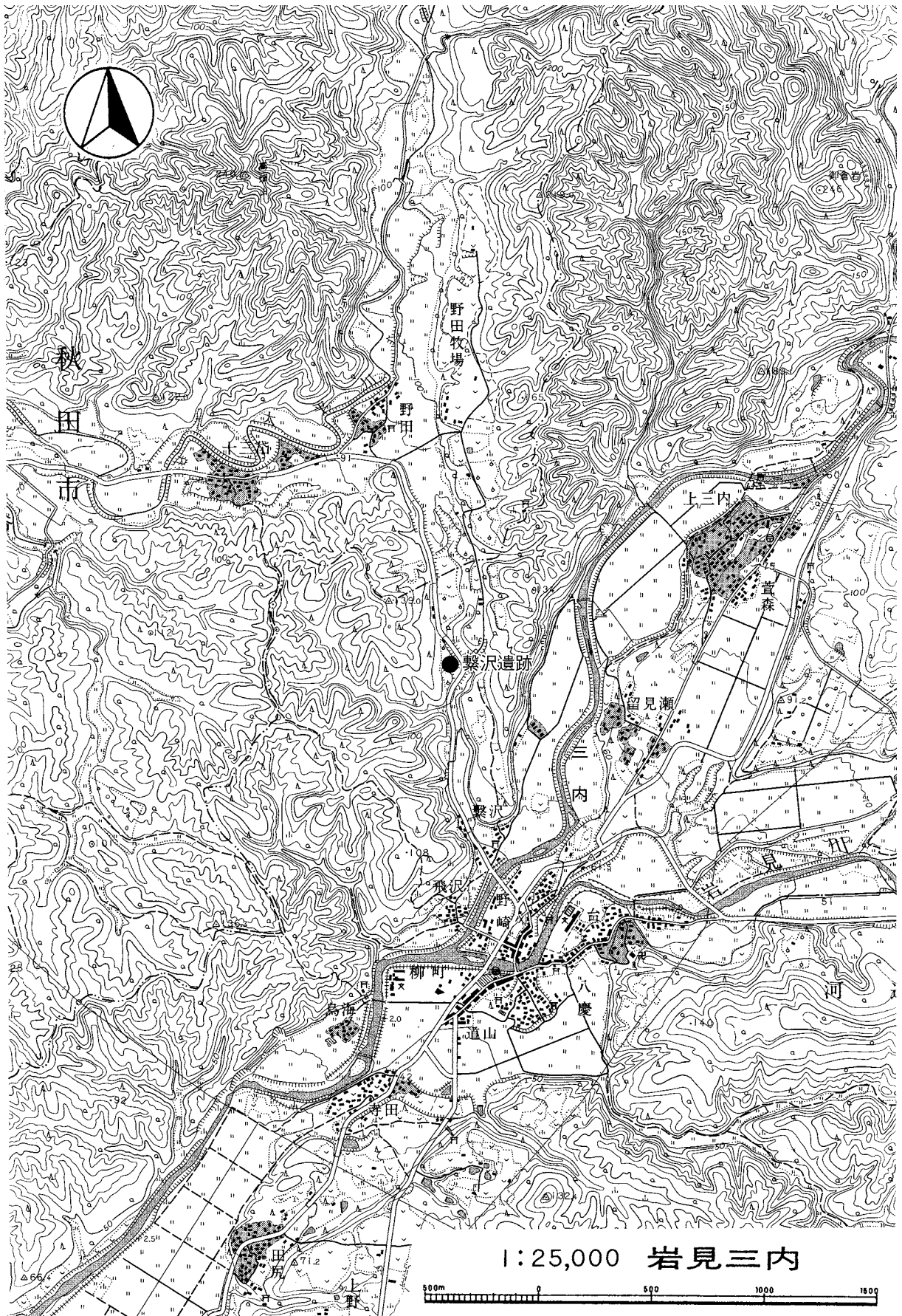
b 遺跡の範囲と工事区域

遺跡は調査対象範囲内の西端の地域を除く2,460㎡と考えられる。西端の地域も遺跡であった可能性は高いが、後世の削平により遺構が検出されなかったことから、遺跡範囲から除外した。

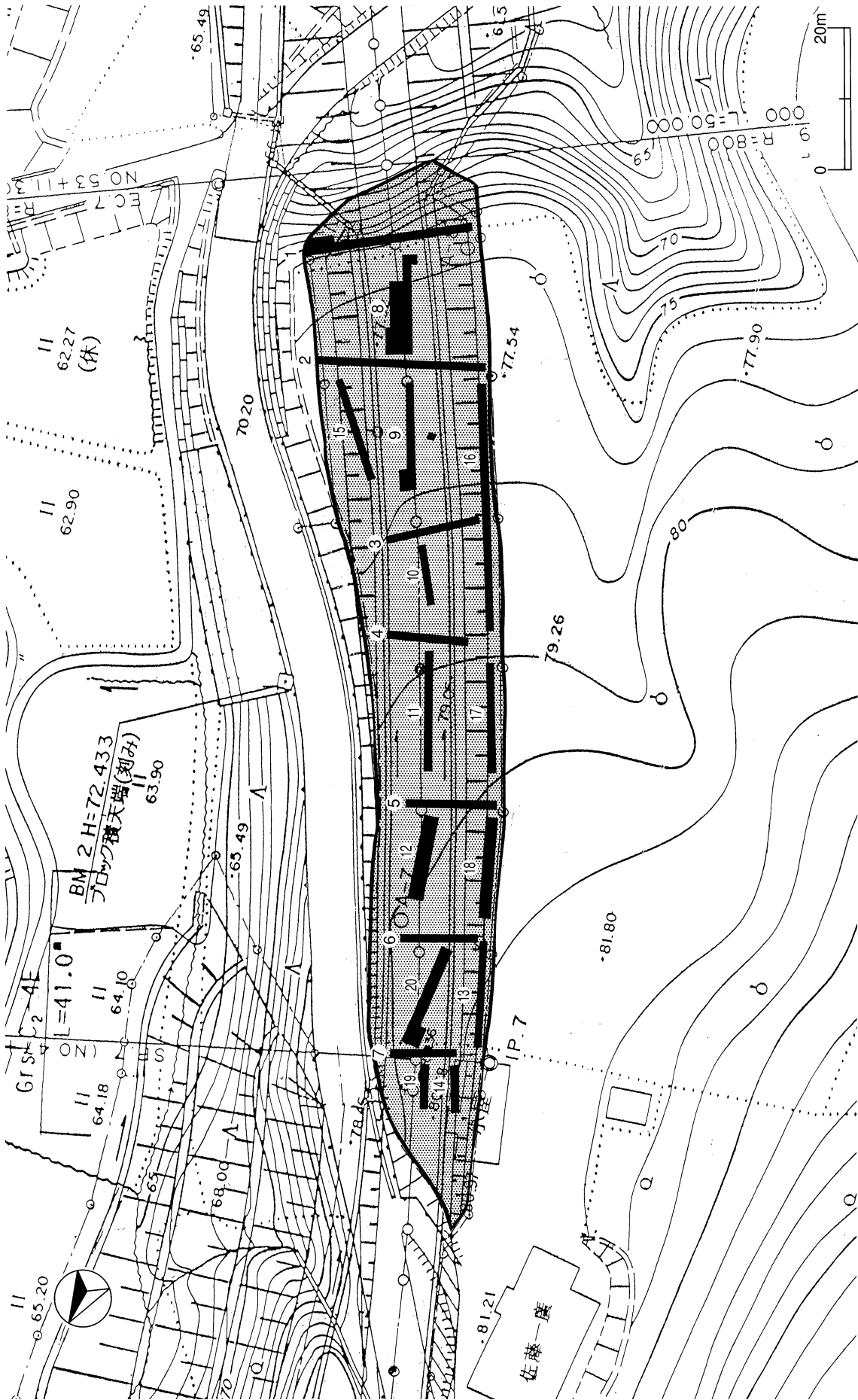
c 発掘調査時に予想される遺構と遺物

縄文時代の竪穴住居跡3～5軒程度、土器埋設遺構1～3基程度、溝跡8～10条程度、土坑・柱穴様ピットが数十基程度、その他に焼土遺構、陥し穴などが検出されるものと予想される。

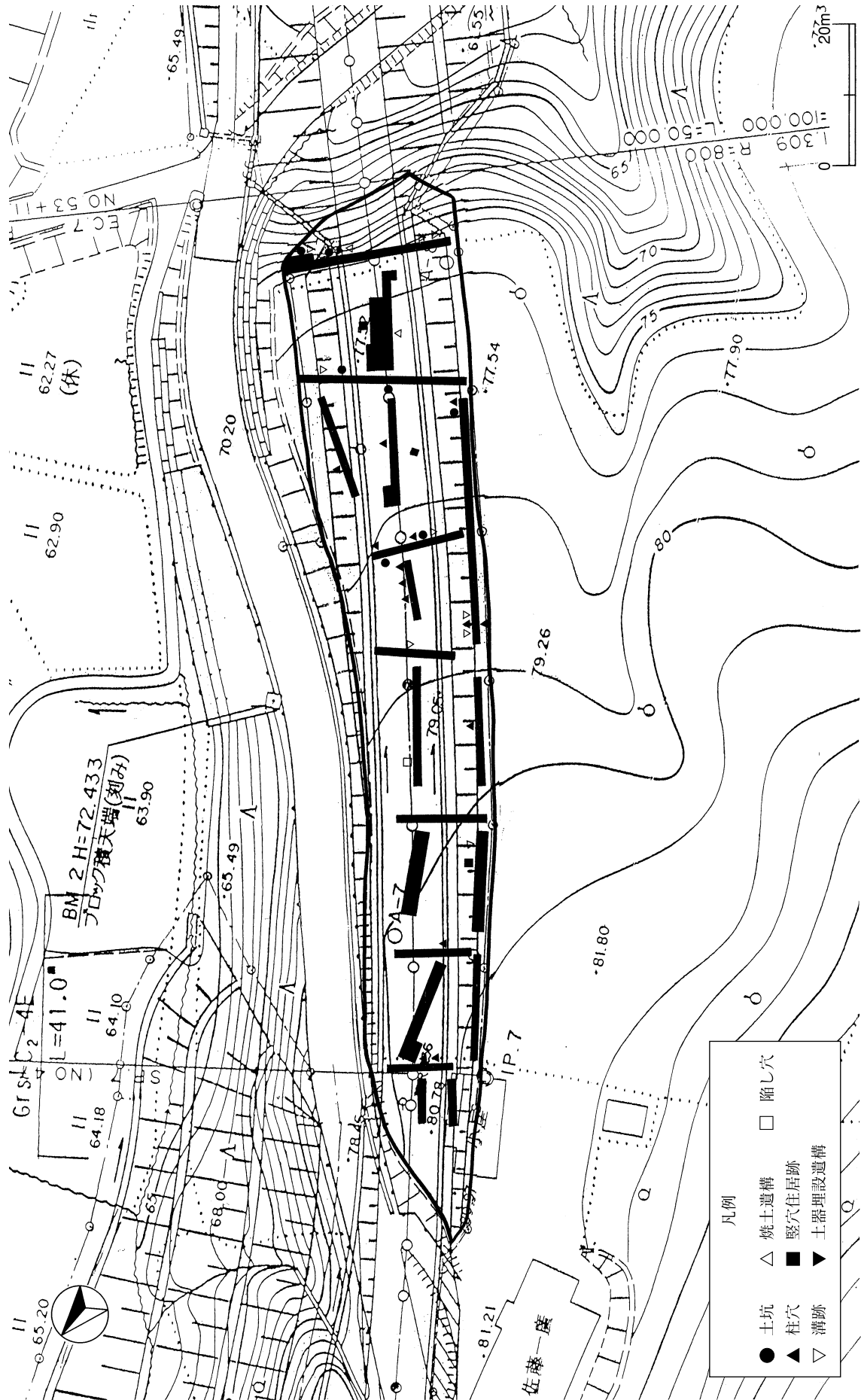
遺物は、縄文時代中期の土器・石器が出土するものと予想される。



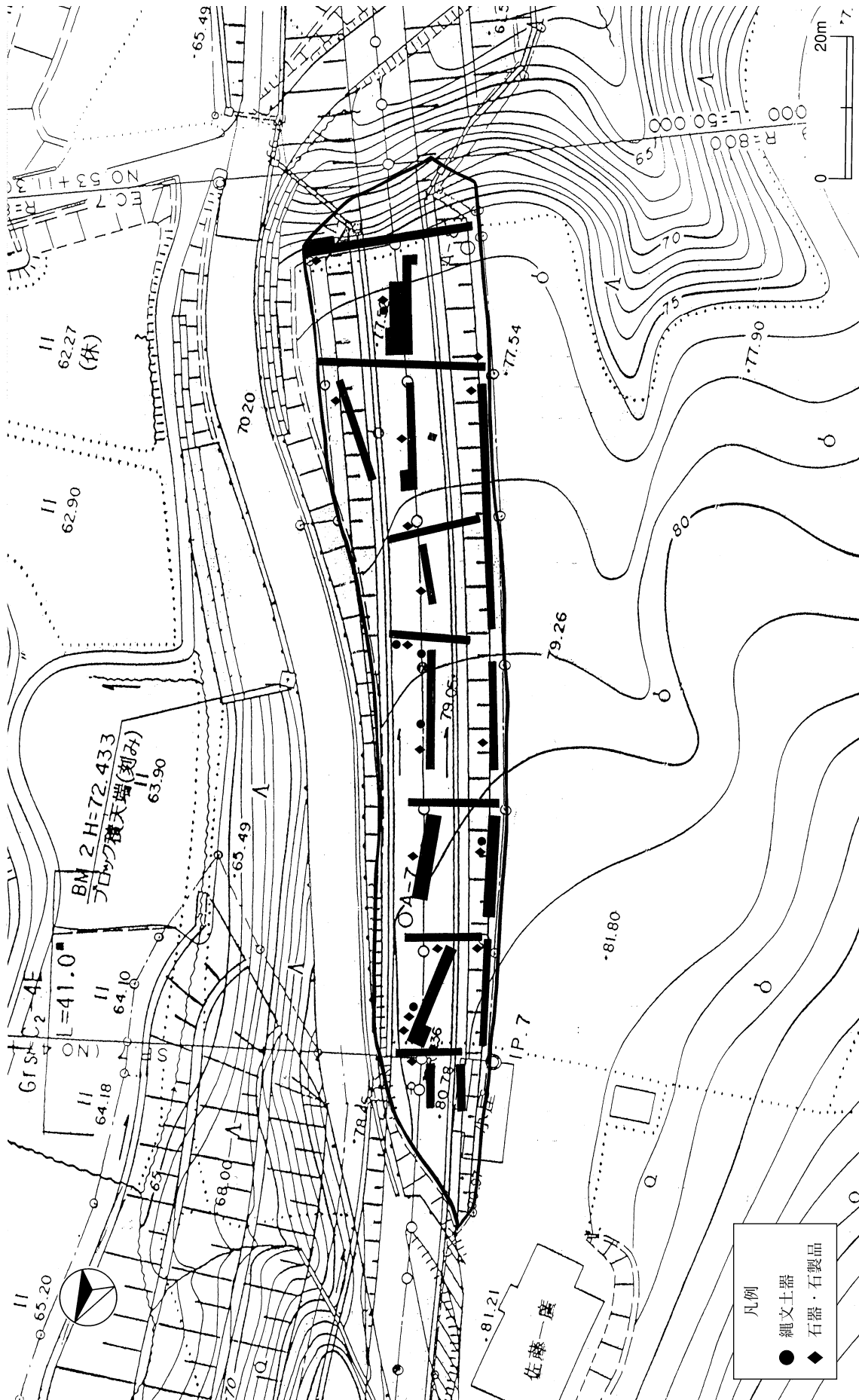
第120図 繫沢遺跡位置図



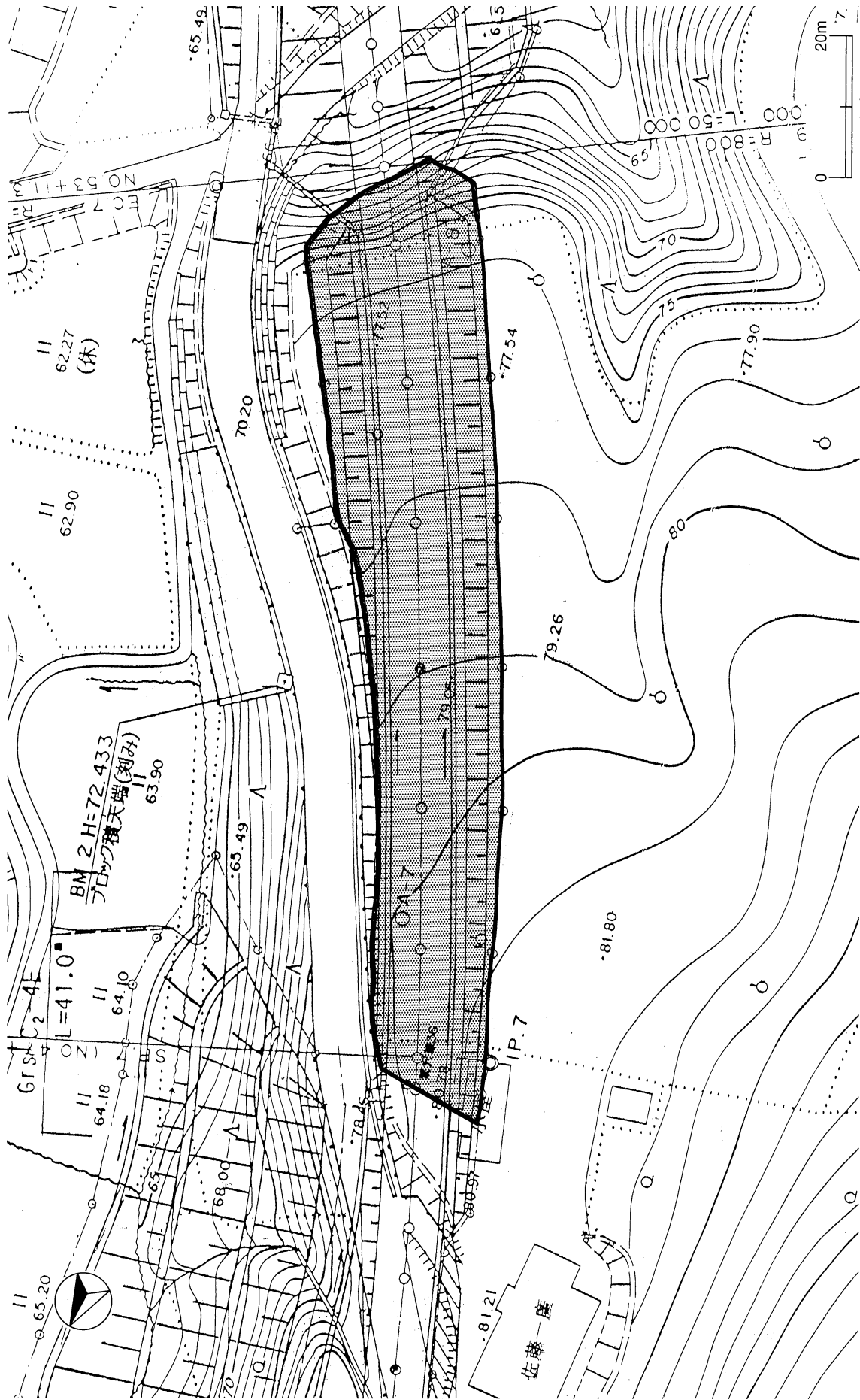
第121図 繋沢遺跡確認調査範囲とトレンチ位置図



第122図 繁沢遺跡確認調査結果図 (遺構検出地点)



第123図 繫沢遺跡確認調査結果図 (遺物出土地点)



第124図 繫沢遺跡範囲図



繫沢遺跡
石囲炉の検出状況
(西から)



繫沢遺跡
石囲炉の検出状況
(南から)



繫沢遺跡
掘立柱建物跡検出状況
(南から)

(6) 国道13号湯沢横手道路建設事業

①^{ながとろ}長戸呂遺跡

- | | |
|-------------|-------------------|
| 1 遺跡所在地 | 雄勝郡雄勝町桑ヶ崎字長戸呂125外 |
| 2 確認調査期間 | 平成14年9月30日～10月22日 |
| 3 確認調査対象面積 | 6,800㎡ |
| 4 工事区域内遺跡面積 | 5,700㎡ |
| 5 遺跡の立地と現況 | |

a 立地

長戸呂遺跡は雄勝町役場の北東約2.6km、出羽丘陵と奥羽山脈の間を北流する雄物川の右岸から約1.4kmの扇状地上に立地する。小比内山地の麓にある御返事集落^{おつべち}から北西約500m、桑ヶ崎地区^{くわがさき}の水田地帯ほぼ中央に位置し、北方1.1kmには高松川が西流する。遺跡の標高は128～130mである。本遺跡とその周囲は、秋田県編『土地分類基本調査 湯沢』(1980年)によると、地形区分上は雄物川低地に属し、表層地質は第四紀沖積世の未固結堆積物(沖積低地堆積物)である。土壌統は細粒質のグライ土壌であることから浅津統に属する。扇状地であるため、奥羽山脈の西端裾部から雄物川右岸に向かって、寺田川や御返事川などの小河川が各所に流れている。調査区に最も近いのは南西を流れる御返事川である。

本遺跡の南西約500mの地点(雄勝町小野字飯塚)には中世後半から近世初頭の集落跡である桐木田^{きりきだ}遺跡が近接する。桐木田遺跡では、少量ではあるが縄文時代前期～晩期の土器および石器が出土しており、これら縄文時代の遺物は今回の長戸呂遺跡確認調査で出土した遺物と一部時期が合致する。

b 現況

過去、調査対象区は水田であった。現況はすでに湯沢横手道路工事路線内にあり、周囲では造成や転圧などの工事が着工中である。調査対象区のほぼ中央を工事用進入路がS字状に蛇行している。路線幅杭の東西両側は水田と畑地であり、農業用水路が調査区を囲んでいる。工事用中心杭No.73付近には工事路線を南北に分断する農道(幅2.4mの砂利道)が走り、これが調査区の南端を成す。

6 確認調査の方法

工事用中心杭No.73からNo.79までの南北長約160m、東西幅約60mを調査対象区とした。旧水田面の畦畔等の地形を考慮して、幅2m×長さは任意のトレンチを13本設定した。このトレンチを重機によって掘り上げたのち、遺構確認面もしくは地山面まで人力で精査し、遺構・遺物の有無を確認した。また、調査区内を南北方向へS字状に蛇行する工事用進入路があるため、トレンチを設定できない調査区北西部分は2m×3mの坪掘りを2箇所設定して人力で精査を行った。なお、確認調査対象面積6,800㎡のうち、試掘面積は904㎡で、対象面積試掘率は13.3%である。

7 確認調査の結果

a 層序

遺跡の基本層序は、各トレンチの土層観察から以下のとおりに分層した。

第Ⅰ層：黒褐色土 (10YR 2/3) しまり中・粘性中、表土兼耕作土。層厚15～35cm。

第Ⅱ層：黒褐色土 (10YR 2/2) しまり弱・粘性弱、遺物包含層。層厚10～25cm。

第3章 調査の記録

第Ⅲ層：黒色土 (10YR 2/1) しまり中・粘性中、遺物包含層・遺構確認面。層厚15～25cm。

第Ⅳ層：黄褐色土 (10YR 4/3) しまり無・粘性弱、地山

なお、ここでは第Ⅱ層下～第Ⅲ層の黒色土が遺構確認面であることから、発掘調査にて表土除去を重機で行う場合、黒色土よりも上面で掘り下げを停止する必要がある。

b 検出遺構と出土遺物

検出した遺構は、土坑9基、土器埋設遺構1基、溝跡2条、柱穴様ピット33基の計45遺構である。調査対象区内における遺構の分布状況は、調査区北側を横断する畦畔に沿った5トレンチが最も密であり、土坑、土器埋設遺構、柱穴様ピットを検出した。土器埋設遺構は埋設状況から墓である可能性がある。この5トレンチに交差する6・7トレンチからも、溝跡、土坑、柱穴様ピットを検出した。また、調査区西側では1トレンチ西半分と8トレンチ北端、13トレンチ南端で土坑を検出した。

出土した遺物は、ほとんどが縄文土器であり、僅かながら5トレンチと7トレンチの交差にて平安時代の土師器が出土した。縄文土器はおおむね後期から晩期までに比定される時期のものである。

8 所見

a 遺跡の種類

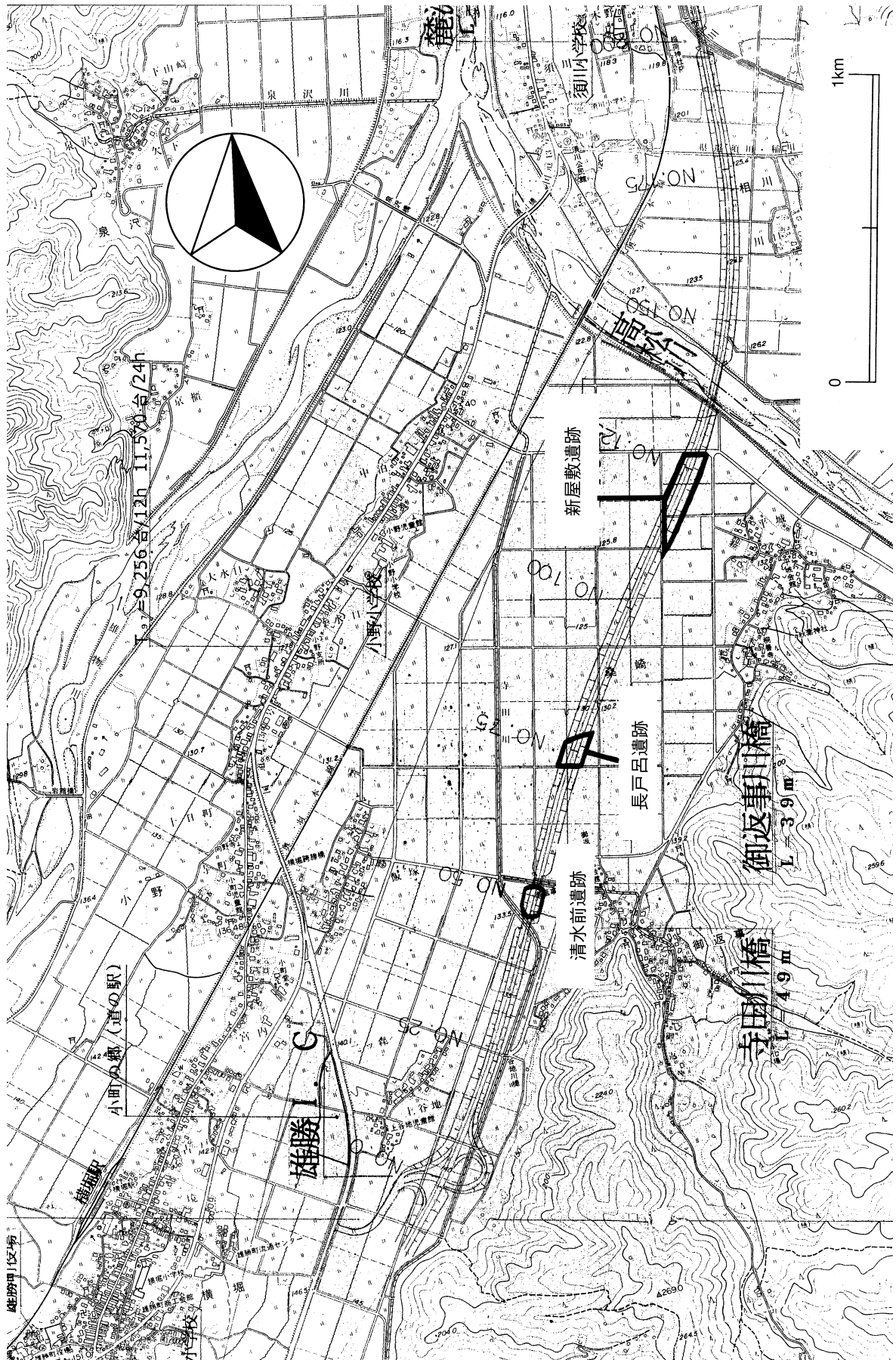
主に縄文時代後期～晩期の採集場・墓域および遺物散布地であり、平安時代の遺物散布地を含む複合遺跡であると考えられる。

b 遺跡の範囲と工事区域

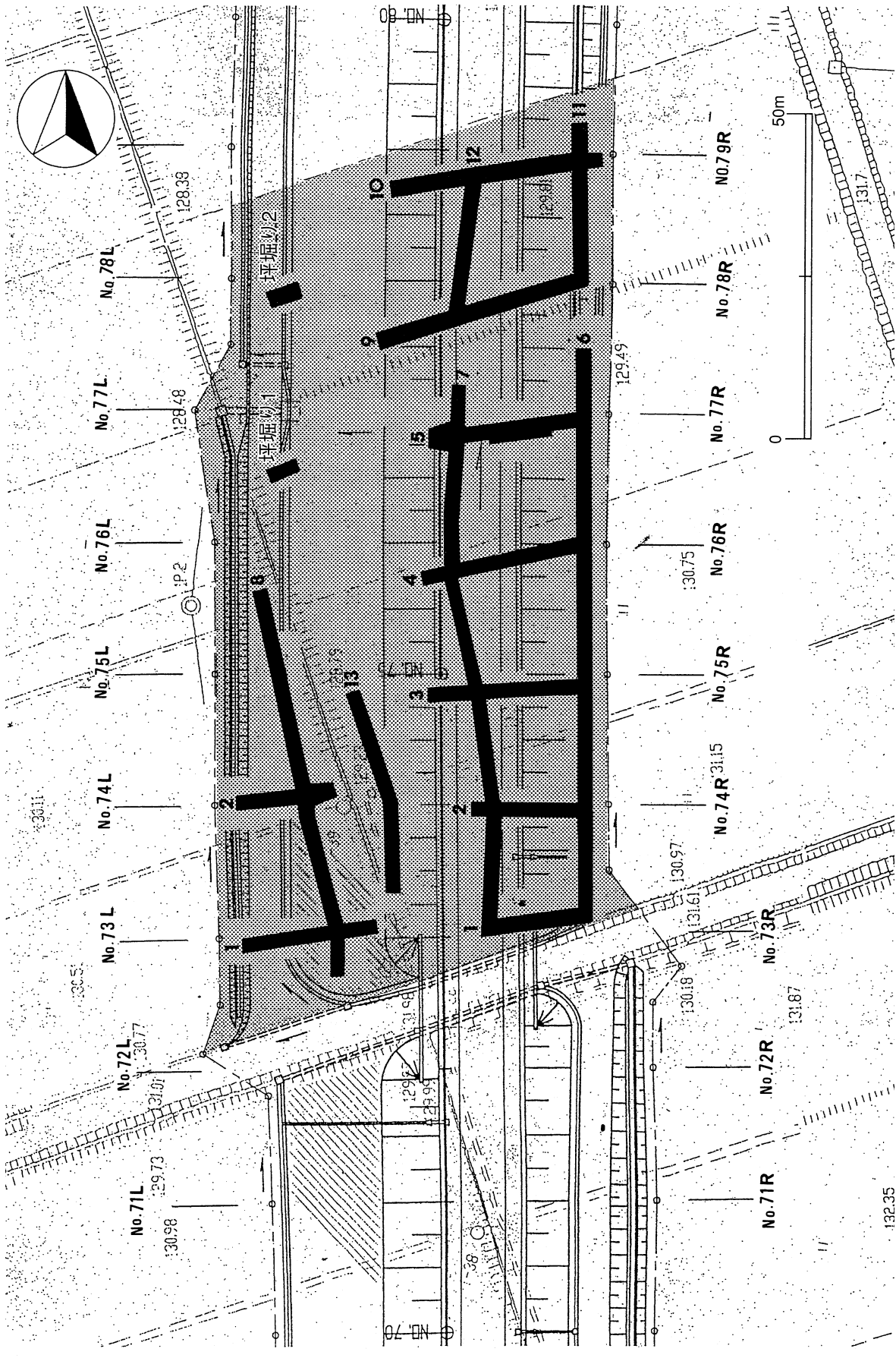
工事区域にかかる遺跡の範囲は、確認調査対象区6,800㎡のうち、遺構および遺物が全く確認されなかった北側の1,100㎡を除く5,700㎡である。

c 発掘調査時に予想される遺構・遺物

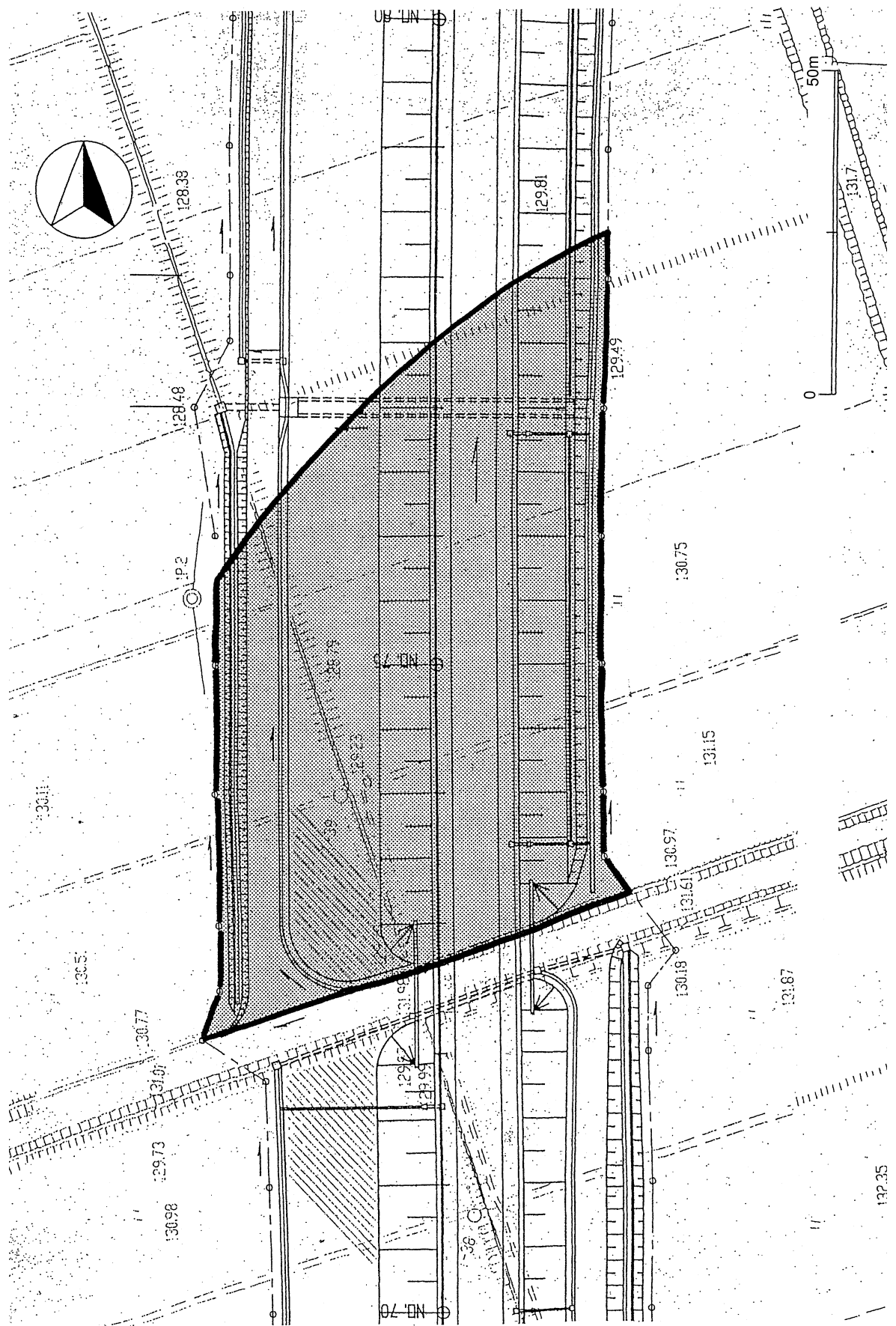
遺構は縄文時代の土坑、土器埋設遺構、多数の柱穴様ピットが検出され、遺物は縄文時代後期から晩期の土器および石器が出土するものと予想される。また、平安時代の土師器や須恵器等が出土することも予想される。



第125図 長戸呂遺跡・新屋敷遺跡・清水前遺跡位置図



第126図 長戸呂遺跡確認調査範囲とトレンチ位置図



第129図 長戸呂遺跡範囲図